



Title	物語の受け手によるセリフ発話：参与者間の共感関係の構築に関する会話分析的研究
Author(s)	山本, 真理
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第11428号
Issue Date	2014-03-25
DOI	10.14943/doctoral.k11428
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55320
Type	theses (doctoral)
File Information	Mari_Yamamoto.pdf



[Instructions for use](#)

物語の受け手によるセリフ発話

—参加者間の共感関係の構築に関する会話分析的研究—

山 本 真 理

目次

第1章 序論 1

- 1.1. 注目する現象 1
- 1.2. なぜ「セリフ発話」と呼ぶのか 4
 - 1.2.1. 「引用」の形式の問題 5
 - 1.2.2. 「引用」の定義の問題 6
- 1.3. 相互行為における受け手の「セリフ発話」と残された課題 8
- 1.4. 本研究の目的と構成 9

第2章 方法論とデータ 12

- 2.1. はじめに 12
- 2.2. なぜ会話分析 (Conversation Analysis) なのか 12
 - 2.2.1. 相互行為における「聞き手」 12
 - 2.2.2. 自然会話の中で「他者の声」を聞くということ 14
- 2.3. 会話分析 (Conversation Analysis) の考え方 16
 - 2.3.1. 会話の当事者の視点で記述するという事 16
 - 2.3.2. 現象の観察可能性 18
 - 2.3.3. 発話の連鎖上の位置と構成 (position and composition) 21
- 2.4. 本研究にかかわる会話分析 (Conversation Analysis) の基本概念 22
 - 2.4.1. 隣接ペア (adjacency pair) 22
 - 2.4.2. 優先構造 (preference organization) 24
 - 2.4.3. 物語を語る事 (storytelling) 25
 - 2.4.4. 不満 (complaint) を述べる事 27
- 2.5. データの概要 32
- 2.6. トランスクリプトの記号一覧 33

第3章 「セリフ発話」の産出と物語の相互行為的展開 36

- 3.1. はじめに 36

- 3.2. セリフ発話の連鎖上の位置と構成 36
- 3.3. 語り手の「演技的な発話」と受け手の「セリフ発話」による参入 38
 - 3.3.1. 物語における語り手の「演技的な発話」 39
 - 3.3.2. 語り手と同じ立場から参入する「セリフ発話」 41
 - 3.3.3. 語り手の相手役になりきる「セリフ発話」 49
 - 3.3.4. 小括 52
- 3.4. 語り手の「身体的動作」と受け手の「セリフ発話」による参入 52
 - 3.4.1. 語り手の身体的動作に声を付与する「セリフ発話」 53
 - 3.4.2. 語り手の演技空間を利用して参入する「セリフ発話」 57
 - 3.4.3. 小括 62
- 3.5. まとめ 62

第4章 物語を語る権利と参加の調整 66

- 4.1. はじめに 66
- 4.2. 語り手と受け手の参加の調整 67
 - 4.2.1. 語りの物語の「可視化」と語る権利の緩み 67
 - 4.2.2. 受け手の語り手の権利に対する配慮 70
 - 4.2.3. 小括 71
- 4.3. 語りの展開を支えること（alignment）と態度に寄り添うこと（affiliation） 73
- 4.4. まとめ 75

第5章 「セリフ発話」連鎖における共感関係の構築 76

- 5.1. はじめに 76
- 5.2. 会話の中で共感を経験すること 77
- 5.3. 冗談を語るの中の「セリフ発話」 78
 - 5.3.1. 冗談の拡張の契機としての「セリフ発話」 79
 - 5.3.2. 物語の収束を可能にする環境の提供 83
 - 5.3.3. 小括 87
- 5.4. 不満を語る中の「セリフ発話」 87
 - 5.4.1. 語り手の不満にお墨付きを与える「セリフ発話」 88

5.4.1.1.	不満の表出と笑いによる受け止め	89
5.4.1.2.	不満にお墨付きを与えることと物語の収束	94
5.4.2.	単独で用いられる「セリフ発話」	99
5.4.3.	小括	109
5.5.	まとめ	110

第6章 結論 112

6.1.	全体のまとめ	112
6.2.	会話分析研究への貢献と意義	115
6.3.	引用研究における貢献と意義	115
6.4.	日本語教育における貢献と意義	117

参考文献 121

謝辞 127

第1章 序論

1.1. 注目する現象

本研究では、日常会話の中で会話の参与者によって過去の体験が語られる場面に注目する。そうした語りの中において、語り手は時に出来事の中の登場人物を演じることで、どのようなやりとりが行われたのかを実演を持って示す。その時、語り手は言わば語りの地の発話にあたる「解説部分」と、実際に行われた（であろう）他者の声を現在の発話場面に取り込む「演技部分」の両方を担う¹。これは、書き言葉でいえば、地の発話と、鍵括弧が付いている発話に相当する。一方、そうした環境において、物語の内容を知らないはずの物語の受け手²が、物語の登場人物になりきったかのように発話することがある。本研究では、そうした受け手の特徴的な反応に注目する。それは、次の断片(1)の15行目、断片(2)の9行目、断片(3)の38行目の語りの受け手の反応に見られる現象である。

断片(1)【Data1 アヒル】

- 09 A: ゆっ¥たら¥hu.h.h[>¥なんか¥<(.)[°そう°((深い一度の頷き))
10 B: [((ジェスチャー))
11 A: ¥一時間後ぐらいに¥hu.hh.hh
12 A: (>なんか<)首(h)を(h)[切(h)っ(h)た(h)の(h)]が(h):(h)hhhhh
13 B: [HAHAHAHAHAHAHA
14 A: ドンってキッチンにあ(h)っ(h)て(h).h.h.h.h
15→B: さっきさしたやつだ[みたいな hahahahahahaha]

¹ 鎌田(2000)では、引用研究の中で引用を「他者の声を現在の発話場面に取り込む行為」ことであると定義している。また、藤田(2000)では統語論の観点から引用を扱っているが、引用されたコトバが通常の言語記号とは異なる表現方式によるものであり、それを「実物提示」と呼んでいる。その際、地の文と実物提示する引用のコトバには質の差があるとしている(p.45-46)。ただし、藤田自身も述べる通り、このような表意様式における記号の質的差異について、これまで、統語論・意味論が扱うことはなかった。しかし、「引用」を捉える際には、この点は無視できない重要な点である。

² 本研究が対象とするのは、物語を語ることにおける聞き手である。ただし、会話分析において一般的に物語の聞き手は通常の「話し手(speaker)―聞き手(hearer)」とは区別して、「語り手(teller)―受け手(recipient)」と言うことが多い。また串田(2009)では、通常の「聞き手」と区別して「聴き手」という区別がなされている。本研究においても、特に物語を語る際の聞き手について論じるときには「受け手」ということばを用いる。また、それ以外の一般的な意味での聞き手については単に「聞き手」とする。

断片(2)【Data12 帝王切開】

- 01 すず：手術[のとかはんこ押して
02 由衣： [大変：：
03 すず： くださいとか[言われて
04 孝子： [いや
05 五月： [いや：[：：
06 すず： [それ
07 すず： どこ[ろじゃないけど:>みたいな<
08 五月： [それどころじゃないね
09→孝子： 誰か押しといて[()hhh
10 すず： [そ 二分の隙間の合間をぬって
11 すず： サインし[てください¥みたいな¥hhh
12 孝子： [hahahaha

断片(3)【CallFriend 1684】

- 29 京子： でもロビーなんかも[：：
30 真弓： [うん
31 京子： じゃあ京子住所送って：とかって[ゆうから
32 真弓： [うん
33 京子： 手紙書い<た[↓ら：：>
34 真弓： [うん
35 京子： 僕はすぐ：受け取ったらすぐ手紙書くよ：って言いなが[ら：：
36 真弓： [hhhhh
37 京子： いつ来るんだよ[：：みたいな
38→真弓： [おい：：みたいな
39 京子： うん：：

断片(1)では、Aがある国に滞在中に起こった出来事について語っている。Bはその受け手である。この断片の直前に、Aは現地の友人に庭にいるアヒルの中から一匹選ぶように

言われ、しぶしぶ指をさして選んだことを報告する。Aは、続く11行目でAが選んだアヒルが（食用として）1時間後に首が切られた状態（12行目）でキッチンに置かれたことを報告する（14行目）。注目したいのは、次の15行目である。それまで物語に対して、笑い（13行目）で反応を示していた受け手Bは「さっき指したやつだみたいな」と発話する。この15行目の発話は、次の特徴からまるでAの物語の中の登場人物（ここではA）が発したセリフのような発話として聞かれる。第一に、Bは15行目の発話と共に右手で指さしを行う。その際、Bは声色、表情を変化させる。このことにより、今・ここでの物語の「受け手」としての反応とは区別可能な発話であることを示す。第二に、この発話の連鎖上の位置は、Aの物語の描写における決定的な出来事（アヒルが「ドーンってキッチンにあって」）の直後に置かれている。そうした決定的な出来事の後に発話が置かれることにより、Aの発話の「さっき」は今・ここにおけるAの発話の時間軸上の「さっき」ではなく、Bの物語の中の出来事のアヒルを指さした「さっき」として聞かれ、「指した」ということばも、物語中に既出の「アヒルを指さした」とことと関連あるものとして聞かれる。

同様に、断片(2)では「すず」が出産の際、帝王切開をすることが急遽決まったという出来事について語っている。断片の冒頭で陣痛で苦しんでいる最中に、手術のための承諾書にはんこを押さなければならなかったことを報告する（1行目、3行目）。それに対し、受け手の3人は「大変」「いや」「いや:」ということばを用いて評価をする（2行目、4行目、5行目）。これは、陣痛の最中において「はんこを押す」という事務的な作業が、すずにとって「否定的なものとして語られている」ことを受け手らが理解していることを示している。更に、すずは「それどころじゃないけど:みたいな」と、物語の中のすずの（実際には言わなかったであろう）声として聞かれる発話を産出する。注目したいのはその後の9行目の孝子の発話である。孝子は「誰か押しといて」と発話する。この発話は、はんこを押すことの依頼として解釈可能な形式を用いて組み立てられている。その一方で、その後の展開を見ると、すずは孝子の発話に対して依頼の反応として適切となる受諾や拒否ではなく、短い承認（10行目「そ」）と物語の一部として聞かれるもう一つの発話を追加する。これにより、孝子の9行目の発話は、その場の孝子自身の声としてではなく、すずが承認を与えることが可能な物語の中の登場人物（ここではすず）のもう一つの声として聞かれていることがわかる。つまり、ここではすずの語りの状況におけるセリフとして参与者によって扱われている。

更に断片(3)では、アメリカに留学中の京子と真弓が話している。京子と真弓はこの断片

の前に別の友人となかなか連絡がつかないことについて語っている。その後、なかなか連絡がとれないある友人に関するもう一つ別のエピソードとして、京子は、ロビーという友人とのエピソードを語り始める。京子は、ロビーに、(住所を教えるため)手紙を送ったが、結局返事が来ていないと言う。その際、京子はロビーに「じゃあ京子住所送って:」(31行目)と言われたので、「手紙を書いた」(33行目)と言うことで、連絡先を求めて来たのはロビーの方であると言う。そして、その際、ロビーが手紙を受け取ったら「すぐ手紙を書くよ」(35行目)と言っていたと報告する。にも関わらず、実際は返事が来ず、結局連絡がとれていない。そのことに対し、京子は「いつ来るんだよ::みたいな」(37行目)と発話する。この発話は、ロビーのそうした対応に対する京子の心の叫びとして聞かれる。更に、注目したいのは、その次の行のこの語りの受け手である真弓の発話である。真弓は、京子の発話に重なるようにして、「おい::みたいな」(38行目)と参入する。この発話も、直前の京子の発話と同様、ロビーに対する発話として聞かれる。それは、京子の発話の「いつ来るんだよ」の直後におかれるという位置的な特徴に加え、京子の発話に接続可能な形と内容で産出されていることによる。

このように、本研究では、相互行為の中において、会話の参加者達が発話の声色の変化、身体的動作、発話の連鎖上の位置等によって、(今・ここでの自身の声としてではなく)物語中の声として聞かれることを示し、参加者らがそのように扱う発話に注目する。特に、物語が語られる行為において、内容を知らないはずの受け手が行う発話に焦点を当て、相互行為上の機能について見ていく。

1.2. なぜ「セリフ発話」と呼ぶのか

本研究で扱う発話は、話者が物語の登場人物になりきって演技的に語るという特徴を持つため、従来の引用研究の中において、「直接引用」と呼ばれていた現象と重なる部分が多い。しかし、本研究ではあえて引用研究における「引用(表現)」と呼ばずに、あえて会話分析の立場から「セリフ発話」と呼び、分析を試みる。このような視点から現象を扱うのは、単にセリフのように発せられているからという単純な理由からだけではない。

以下では、当該現象を日本語の引用研究で扱おうとするとき、どのような問題が生じるのかを、引用の「形式」と「定義」の観点からそれぞれ述べる。それにより、語りの受け手による「セリフ発話」が、これまでの引用研究の枠組みに収まらない現象であり、引用研究とは切り離して考え直すべきであることが明らかになる。

1.2.1. 「引用」の形式の問題

第一に、従来の引用研究において、現象を取り出そうとするとき、形式を出発点とし、基本的には「「～」と言った」のように「引用句(節) + 引用助詞 + 述語」を伴う形式が基本(藤田 2000)とされてきた点が問題である³。実際に、藤田(2000)では引用の統語的な構造に注意を向け、「と」「って」という引用助詞を伴う形式のみを分析の中心的な対象としている。この時、話し言葉に頻繁に見られる「みたいな」や「とか」で終わる発話は扱われていない。なぜなら、このような形式は「引用句(節) + 引用助詞 + 引用動詞」という構文に比べ不完全であり、非典型的な文だからである。また、引用であることを明示化する助詞や述語のような標識を伴わず、引用句(節)が裸の形で使用される発話も、引用の周辺的な現象、または研究の対象外として取り上げられていない。

このように引用研究が形式を重視しすぎる一つの理由は、おそらく日本語の引用研究が生成文法の立場から「引用構文」を扱った奥津(1970)の研究に始まり、その後も遠藤(1982)、藤田(1988, 2000)、廣瀬(1988)、砂川(1988, 1989)などによって、基本的には、意味論、統語論の立場から検討されてきたためであると思われる。更に、取り上げられる現象は、作例または書き言葉を中心とした単文である。そうした研究的な背景から、特に直接引用のような、話者の声色やプロソディ、身体的動作などが伴われやすい現象においても、そうした特徴を扱うことはできず、基本的な形式から出発せざるを得なかったものと思われる。実際に近年の引用研究においては、書き言葉のみならず、実際の話し言葉をデータとして扱う研究(メイナード 2008; 山口 2009; 加藤 2010)や、語用論の立場から現象を捉えようとする研究(鎌田 2000; 中園 1994, 2006)、そして、日本語を第二言語とする学習者の引用表現の自然習得を扱った杉浦(2007)など研究の射程は広がりを見せている。しかしながら、そうした実際のデータを扱う研究においても、山口(2009)やメイナード(2008)を除いては、分析の段階においては結局これまでの先行研究(特に藤田 1988, 藤田 2000)が参照され、「引用句(節) + 引用助詞 + 述語」が分析の対象とされている。また、鎌田(2000)や加藤(2010)では、「非典型的」な引用表現として、「なんて」「とか」「みたいな」を伴う発話の存在にはふれている。しかし、現象の指摘に留まるのみで詳細な分析には至っていない。

従って、そうした形式を重視した「引用研究」の枠組みの中では、本研究で扱おうとす

³ ただし鎌田(2000)では引用を「ある発話・思考の場で成立した(あるいは成立するであろう)発話・思考を新たな発話・思考の場に取り込む行為である。」(p. 17)とし「と」を伴うものだけに限らないと明記している。

る現象は適切には捉えられない。なぜなら、例えば、断片(1)(3)のような「みたいな」を伴う発話は、筆者のデータの会話の中によく現れるものでありながら、逸脱的なものでしかないということになるからである。しかし、そうした現象は、従来の引用研究の中で単に中心적으로とりあげられなかったというだけで、実際の会話の中においては、決して逸脱的なものではない。実際に、自然会話のデータを扱う研究の増加に伴い、そうした様々な形式が、研究の対象とされ始めている。例えば、発話末の「って／と」について会話分析の立場から Hayashi (1997) が、談話分析の立場から山口 (2009)、加藤 (2010) が論じている。また、発話末の「みたいな」に関して、Suzuki (1995)、加藤 (2005)、Fujii (2006)、メイナード (2008) などが論じている。

また、断片(2)のような引用の標識を伴わない発話は、従来の引用を形式からとらえようとする立場では、抽出することができない。もし、孝子の発話を単独で抽出するならば、その発話が物語においてどのようなものであるかを正確にとらえることは難しい。なぜなら、字義上は単なる孝子の声でしかないからである。しかし、連鎖の中で見たときに初めて、単なる孝子の発話ではなく、「受け手」である孝子が、「物語の登場人物(すず)の発話」として産出したものであることが明らかになる⁴。

このように、本研究の論点の一つである「セリフ」であることは、そもそも文単位で現象を見るのではなく、音声や身体的動作と共に、物語を語るという連鎖の中で見たときに初めて気が付くことができるものなのである。特に、語りの「受け手」が行う発話であるということの特徴を捉えるためには、形式の問題よりも、実際にどのような発話の連鎖上の位置において、どのような発話の特徴を伴って発話されたかということがより重要な問題となる。そのため、これまでの引用研究の枠組みでは、本研究で扱おうとしている現象の一部は抽出することができず、見落とされてしまう可能性がある。

1.2.2. 「引用」の定義の問題

第二に、本稿で扱う現象は、「引用とは何か」という定義の問題に関連している。従来、「引用」と呼ばれるとき、そこには多くの場合「元発話」の存在が想定され、引用は「元発話」や「元の場面」の模倣や再現である(藤田 2000; 砂川 1989)と説明される。つまり、「引用」はそのことばが示す通り元の発話を新たな場面で(元の発話と完全に同じではな

⁴ このような標識を持たない現象について、英語では「zero quotatives」(Mathis & Yule 1994)、「enactment」(Holt 2007)として既に研究が行われている。しかし、日本語の引用研究の枠組みでは存在が指摘されることはあっても、実際に現象の詳細な記述が行われたことは筆者の知る限り未だ存在しないようである。

いにしても)再現することとされてきたのである。しかし、本研究で扱う現象は本来語られる物語の内容を知らないはずの受け手が、あたかもその物語を知っているかのように参入してくる現象である。従って、受け手が行っていることは、時間的に隔たりのある別の場面における「元発話」を想定し、それらを「再現」「模倣」することとは異なっていると考えられる。従って、「引用」ということばが示すイメージとは異なった現象として捉える必要がある。例えば、断片(2)において孝子は本来その物語の内容を知らないものとして聞いている。にも関わらず、セリフ発話で参入できる。その根拠として、過去の何かを参照し「引用」しているとは言いにくいだろう。ここでは、孝子が他者の声を借りた演技的な発話を、それまでの語り手の物語を聞き、理解した上で行っていると考えられる。このことは、当該現象が、相互行為のプロセスにおかれることで初めて参与者らにとって理解可能になるものであることを示している。実際に、英語の研究においては、元発話の存在を前提とすることや、再現や模倣であることの可能性の低さが様々な観点から指摘されている (Tannen 1989; Mayes 1990; Woofitt 1992 [ウーフィット(1998)]; Mathis & Yule 1994; Holt 1996)。例えば、「引用 (英語では、reported speech)」という呼び方そのものに関して、Tannen (1989) では発話が「元発話」の「復元」「模倣」「再現」というよりは、「構築される」ものだとし、「constructed dialogue」と呼んでいる⁵。また、大津 (2005) においても、Tannen (1989) の指摘を援用し、主に語り手らがその場で演技的な発話を用いて繰り広げるやり取りを「創作ダイアログ」と呼び、分析を行っている。更に、会話分析の立場から語りを分析した Woofitt (1992) [ウーフィット(1998)]では、他者の言葉が報告されている描写について、当該現象を「reported speech (直接話法)」に限定するのは適切ではないとし、「active voice (能動発言体)」と呼んでいる。その理由として、相互行為においては、実際には発言されていないことがそのように言われたように表現されることもあるため、あくまでもそのとき話されたかのように聞こえるように構築されたものと仮定して考察したほうが有益であるためだと明記している (p. 177[p. 209])。こうした立場は、当該現象をセリフ発話と呼ぶ本研究の立場と一致している。

このように「引用 (表現)」という言葉には、引用研究の枠組みでとらえる「元発話」の存在が常につきまとう。また、それは単なることばの問題ではなく、現象をどのように捉えるかという立場の問題を含んでいる。従って、本研究では「引用」という言葉で想定さ

⁵ 鎌田 (2000) においても「引用」の枠組みから、発話は「元発話の再現」とは限らず、「創造される」ものであることが指摘されている。ただし、この考え方は、(明記はされていないが) Tannen (1989) の指摘を踏まえた議論だと考えられる。

れる形式や様々な概念と切り離すために、当該現象を「引用」とは呼ばずにあえて「セリフ発話」と呼ぶ。そして、実際の会話の参加者がある発話を「セリフ」として扱っているかどうかを見ていくところから出発し、その相互行為上の働きについて記述していく⁶。

1.3. 相互行為における受け手の「セリフ発話」と残された課題

本研究で扱うセリフ発話について、引用研究の中で詳細な記述はなされていない。しかし、談話分析を始めとした実際のデータを扱う研究において、その存在が指摘されている。以下では、まず始めにそれらの研究を整理し、本研究が補うべき課題を明確にする。

Tannen (1989) では、本研究が扱う現象と重なる受け手の振る舞いを取り上げ、「他の人の語りに対して受け手が対話を構築することは、どれだけ十分に語り手のパースペクティブを理解しているかを示す」(p. 117 筆者訳) と述べている。また、大津 (2005) では、語り手が物語の登場人物のやり取りを演じてみせる現象に注目し、受け手の参入についてもふれている。ただし、それによって「雑談が盛り上がる」(p. 202) とするに留まっており、更なる分析の余地がある。また、文法論の観点から、砂川 (2003) では、共通の体験を持つ参加者たちが、出来事を共同で再現する際に、最初の語り手が登場人物の発話を開始すると、同じ体験を共有するもう一人の語り手がそれに重なるように発話を繰り返す現象に注目する。これらの重なる発話について、砂川は、「会話参加者がぴったりと息を合わせ共感したところに、通常のやりとりとは異なった演技の空間が生じるものと思われる」(p. 153) と述べる。砂川(2003)では、これらの発話には「とか+動詞」が用いられやすいこと、また、引用をマークする形式がない発話があることも指摘し、これを自由直接話法として引用研究の中に位置づけて論じている。これらに加え、ナラティブ研究において、嶋津 (2005) は語り手・受け手が共に直接引用を使用する現象に注目し、語り手・受け手の双方によって互いのパースペクティブが共有されていることが示されているとする。

以上の先行研究に共通しているのは、受け手の発話が語り手に理解を示したり、お互いの理解が共有されていることを示したりするという点である。本研究も、この見解には賛同する。しかしながら、これらの研究においては、具体的な会話の流れの中で、どのような位置に受け手の発話が置かれ、受け手が相互行為上のどのような仕事を成し遂げるた

⁶ 本研究が「セリフ発話」と呼ぶことで想定しているのは、語りだけに限らず、会話の参加者が、今・ここでの自分の声とはことなるものとして発話を構成し、実際に他の会話参加者に扱われている発話も全て含まれている。そのため、「セリフ発話」と言うとき、本来は、語りの語り手が行う発話も、受け手が行う発話もすべてを含むものとして考える。ただし、本稿に限っては、記述上の混乱を避けるために、語り手が行うセリフ発話は単に「演技的な発話」と呼び、語りの受け手が行うセリフ発話を中心に扱う。

めに、このような発話を用いているのかについては、詳細に論じられていない。つまり、「理解を示す」「パースペクティブを共有する」「共感する」といった認知的なことばで表される現象が、実際にどのような具体的手続きを通して可能となっているのかは明らかにされていない。

一方、会話分析の研究においては、既に本研究と同様の視点からセリフ発話が扱われている。当該現象と重なる現象のうち、最も重要なのは Holt (2007) である。Holt (2007) は、本研究で扱うセリフ発話と重なる現象を「enactment」と呼び、当該発話によって何が行われているのか、その「行為」を記述した。Holt は、enactment の産出の位置に関して「hypothetical scenario」(Holt 2007) の文脈の中で行われることを指摘している。特に、Holt のデータではそれが冗談を言う環境の中で起こっていることが指摘されている。そして、enactment によって冗談に対する理解が示され、冗談を拡張する働きをしていることがわかっている。また、西阪 (2008) では、物語が語られる際に使われる演技に注目している。その中で、本研究のセリフ発話と重なる「聞き手の演技的な発話」を扱い、身体的動作を含めた詳細な記述と考察が行われている。西阪は、演技的な発話を使用するとき、それは単に語りの状況を要約的に説明するのとは異なり、描写の「詳細度」を高めることができ (Schegloff 2000)、それを聞き手が行うときには、物語の語り手の情報が単に聞き手に伝わったことを示す以上のことをしていると述べる⁷。ただし、西阪では、聞き手の反応に特化して論じているわけではなく、また、一つの事例の分析に留まっている。

1.4. 本研究の目的と構成

本研究では、会話分析の立場に立ち、実際の相互行為場面における受け手の特徴的な振る舞いに注目する。前節で整理した Holt (2007)、西阪 (2008) の知見を踏まえ、以下の三つの点を明らかにすることを目的とする。

【課題 1】 物語を語る・受けるという活動において、受け手によるセリフ発話の参入はどのようになされ、また相互行為上どのような機能を果たしているのかを明らかにする。

受け手のセリフ発話による参入を可能にする環境を考察する際、Holt の言う

⁷ 西阪 (2008) では、聞き手の演技的な発話に関して次の 3 点を同時に行う働きがあることが指摘されている。第一に、西阪の事例では、聞き手発話が物語を実際には知らない者が行う架空のもののため、語り手の物語が終わったという理解を示す。第二に、西阪の事例においては、受け手の発話が直前の語り手の発話の主眼である出来事の「ありえなさ」を強調した形で発話を提示し、それにより物語の主眼点を掴んでいることを実演的に示している。第三に、その実演を「冗談であること」「おどろくべき可笑しいこと」として示すことによって、物語に対する語り手の評価への同調的態度を示しているとする。

hypothetical scenario は重要である。ただし、Holt ではその文脈の構成には、音声言語だけが扱われている。本研究では、身体的動作を含め、複数の事例間に共通して見られる受け手の参入を可能にする環境の特徴の記述を行う。その上で、セリフ発話が相互行為上のような機能を果たしているのかを明らかにする。

【課題2】 セリフ発話に伴う「みたいな」という形式の相互行為上の機能はなにか。また、「みたいな」を伴わずに、セリフ発話が単独で用いられるとき、その相互行為上の機能はなにかを明らかにする。

Holt (2007) が扱う英語のデータにおいて、「enactment」は、「reported speech without an introductory clause」(Holt 2007:51) と定義されており、「he said」のような引用であることを特徴付ける標識を持たないことが前提となっている。しかし、筆者が持つ日本語の事例群の中で、引用の標識を持たない発話が産出されることは少なく、むしろ「みたいな」が頻繁に後置されることが多い。これは日本語のデータにおける一つの特徴である⁸。

本研究では、日本語のデータに見られる「みたいな」を伴う場合には、「みたいな」を付加することによって為されている何らかの機能があると考え、こうした会話の中によく現れる引用をマークする形式を相互行為の観点からとらえ直す。同様に、少数ではあるが、形式を伴わないセリフ発話について、単に「あるべき」形式が省略されたものではなく、単独で用いることによって為されている何らかの機能があると考え、この点について明らかにする。

【課題3】 出来事を冗談として語る環境や、不満を語るといった特定の環境の中で、セリフ発話やそこから開始される連鎖が、相互行為上、特にどのような機能を果たしているのかを明らかにする。

【課題1】 を踏まえた上で、受け手のセリフ発話を含む、より大きな連鎖を対象として分析を行う。その際、受け手のセリフ発話に対する語り手の反応や、語り自体のその後の展開を分析していく。特に、セリフ発話が頻出する、驚いた出来事を冗談として語る環境と、不満を語る環境においてそれぞれ分析を行う。それによって、セリフ発話から開始さ

⁸ 更に、通常「みたいな」の研究に関して英語の対応する表現が示される場合、「みたいな」に対応する表現として「(be) like」があげられる (cf. Inamori 2011; Suzuki 2006)。しかしながら、本研究で日本語の事例においては「みたいな」を伴う現象が多いのに対して、Holt の一連の研究などを見る限り英語では「like」を伴っている事例は報告されていない。この点からも、従来の研究がいかに形式を中心として現象が取り出され、分析が行われているのかがうかがえる。

れる連鎖そのものが個々の活動の中で、どのような働きをしているのかを明らかにする。

構成は以下の通りである。まず、第2章では、なぜ本研究が会話分析の立場から分析を行うのかについて述べる。その上で、会話分析の基本的な概念とデータの概要について説明する。第3章では、本研究が扱うセリフ発話という現象がおかれる一般的な環境を示した上で、具体的な事例分析を行い、セリフ発話やそれが置かれる環境が、個々の事例の中でどのように立ち現れるのかを記述する。この章において【課題1】が検討される。第4章では、第3章の事例の記述を踏まえ、語り手と受け手が微妙な参加の調整を行いながら、語りを共に構築していることを詳細に記述する。第5章では、セリフ発話から開始されるその後の連鎖に注目する。【課題2】は第4章の一部と第5章の一部において論じられ、【課題3】は第5章において検討される。第6章では、本研究全体のまとめと、これまでの先行研究における本研究の位置付けについて述べる。以下が上述した課題と章ごとの対応関係である。

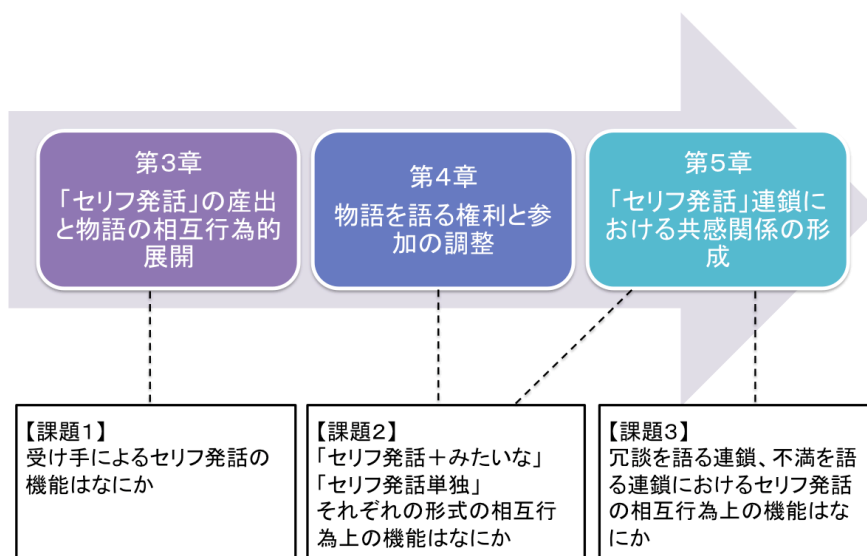


図1 本研究の分析部分（第3章～第5章）のフローチャート

第2章 方法論とデータ

2.1. はじめに

本研究では会話分析の立場から現象の記述を試みる。本章では、まず最初になぜ会話分析の立場を採用するのかについて述べる(2.2)。その際、相互行為において「聞き手」がどのように扱われているのか、そして、自然会話の中で「他者の声」を取り込むことがどのようなことであるのかを述べる。その後、会話分析の基本的な考え方と、本研究に関わる会話分析の基本的な概念と研究成果について述べる(2.3)。その後、本研究で使用するデータの具体的な収集方法とその概要について述べる(2.4)。最後に、分析の資料となるトランスクリプトのデータの転記方法について述べる(2.5)。

2.2. なぜ会話分析 (Conversation Analysis) なのか

2.2.1. 相互行為における「聞き手」

本研究では、会話分析の手法を用いて、日常の些細なやり取りの中に現れる、過去の体験を語る場面 (storytelling) の「受け手 (recipient)」の特徴的な振る舞いに注目する。そこでまず、本節では、従来のコミュニケーション観の元で「聞き手 (hearer)」がどのように語られてきたのかを確認しておく。その上で、会話分析における「聞き手」と、物語を語るという行為について確認する。それによって、会話分析の手法を用いることによるようなメリットがあるのかが示される。

コミュニケーションを捉えるためのモデルとして、コードモデル (Shannon & Weaver 1964) が広く知られてきた。そのモデルの中では、コミュニケーションはあくまでも「情報伝達」を行う過程であり、話し手が「情報」を送信し、それを聞き手が「解読」するという一連のプロセスをモデル化したものとして捉えられていた。一方、その後、Sperber & Wilson (1995) などによって、会話の聞き手にも焦点が当てられるようになり、聞き手がどのような認知的プロセスを経て発話を理解しているのかに注目が集まった。そうした研究においては、聞き手の発話解釈 (utterance interpretation) の能力とそのメカニズムを明らかにすることが課題となり、聞き手が、従来の情報伝達モデルで想定されるような、情報を受け取るだけの受け身の存在ではないことが明確にされた。しかしながらこうした聞き

手観の裏には、話し手が伝える情報についてある前提が存在している。つまり、聞き手が解釈することになる話し手の発話には、話す前から「何を伝えるか」と言う意図が存在し、それに合わせた形で産出されるという「理想的な話し手の発話産出の過程」が想定されているのではないか。そして、そこには、依然として話し手と聞き手という概念は最初から常に固定的なものであり、話し手が計画したことが首尾よくそのまま聞き手に伝えることができるという考え方が根底にある。しかし、もしも物語の「語り手の中にある情報」が滞り無く受け手に伝えられ、受け手がそれを解読することがコミュニケーションで行われていることならば、本研究で扱う現象に見られる、語り手の物語の展開に積極的に関わる受け手の参入について説明することができない。なぜなら、本研究で扱う現象は、物語の内容を「知らないものとして」振る舞っていた受け手が、語りの途中で語り手の物語の登場人物になりきったかのようにして参入する現象だからである。少なくとも、そこでは、単に語られた物語を受け手が受信し、解読する以上のことをしている可能性がある。

また、実際のやり取りにおいては、話し手の発話の産出それ自体も決して理想的なものとは言えない。例えば、話し手の発話産出の途中で聞き手が聞き返すことによって、発話が途中で途切れることや、発話の展開が大きく変わることもある。また、発話産出の途中に、外で何か大きな音がし、発話が中断されることもあるだろう。つまり、実際のやり取りにおいては、発話や語りが刻一刻と流れる時間の中でその場その場で更新される。そして、また、話し手・聞き手という参与役割の構造なども、その場その場で常に変わりうる存在なのである。従って、コミュニケーションを「伝達」としてイメージする無意識な前提の基では、こうしたコミュニケーションの動的な側面は十分に捉えることが出来ない(谷編 1997:vii)。

一方、社会学を出発点として開発された会話分析 (Conversation Analysis) の分野においては、様々な観点から聞き手に関わるコミュニケーションの動的な姿を記述してきた。その代表的な研究の一つに、Goodwin (1980) がある。Goodwin (1980) は、一見単なる発話産出上のトラブルとしてしか扱われていなかったポーズや言い淀み、発話の繰り返しといった現象を扱った。そして、そうした発話産出上のトラブルが、実は話し手が、聞き手の視線を獲得してから話し始める、という相互行為上の問題に対処する一つの方法として利用されていることを明らかにした。この研究が示した最大の功績は、話し手の発話の産出が、常に語り手の企図の元で、滞りなく産出されているのではなく、語り手自身の発話の産出自体に、受け手の存在が影響を与えており、産出される発話はいくまでも相互行為

における社会的な産物であることを実際のデータを用いて示したことにある。

更に、同様の観点から Sacks (1974, 1992) では物語を語ることが、語り手独りの企図によって成り立つものではなく、語りの展開そのものが、その場その場の受け手の反応に依存した形で進行していくことが示されている。また、語りの受け手は、語り手の語りの直後の位置で、語り手が語った内容とよく似たエピソードを語り出すこと (second story [第二の物語]) によって、語りへの強い理解を示すこともあることもわかっている (Sacks 1992; 串田 2006a)。それは、単に受け手が語りを表面的に理解しているだけではできない、より詳細な理解の上で初めてできる反応である。更に、串田 (2009) では、語りにおける受け手の反応のうち、語りの進行に大きく影響を与えるいくつかの現象も扱われている。従って、会話分析は、本研究が扱おうとする実際のコミュニケーション場面における、語りにおける受け手の振る舞いを記述するための有効な方法だと考えられる。

2.2.2. 自然会話の中で「他者の声」を聞くということ

本節では、会話の中に「他者の声」を組み込むことが、実際の会話の中においてどのように示され、理解されるものなのかを実際のデータに基づき記述する。それによって、本研究がなぜ引用研究の枠組みからではなく、会話分析の立場から現象を記述するのかを述べる。

引用研究においては、「って」「と」「みたいな」のような引用をマークする形式を伴う現象を引用研究の対象として抽出する。しかし、本研究では、まず初めにそうした形式に関係なく、あくまでも会話の参加者の振る舞いを観察する。それを通して、一つ一つの発話が、会話の参加者によってどのように理解されているのかを検討していく。従って、ある発話がセリフ発話として理解されているかどうかは、実際のやり取りの中で会話の参加者らがそのように理解し、連鎖の中で取り扱っているかどうかにかかっている。そのため、何がセリフ発話であるかは前もって定義が与えられるものではないと考えている。このことは、文法論で「引用表現」を記述しようとするとき、「と」や述語の存在を手がかりに現象を抽出し、それらの形式ゆえ「引用表現」として扱っていることとは異なる。実際の会話の参加者にとってことばは、刻一刻と流れる時間の中で産出されては消えていくものであるから、もしある発話を引用たらしめているのが、典型的な引用表現に伴う「引用助詞」や「述語」の存在ならば、引用助詞や述語が産出されるまで、会話の参加者はある発話がセリフ発話であるか否かは判断できないことになる。しかし、実際の会話の参加者は、ある発話がセリフ発話であるかどうかについて迷ったり、「今のはセリフ？」と確認す

ることはほとんどない。例えば、以下の例を見ていただきたい。

T: 袋二枚にして[あげたよ][みたいな][haha]

M: [.h あっあっ][そうそう][そうそうよくあります(.)]

(筆者収録データ【Data2】より)

詳細の記述は省くが、この断片の直前 M はある国のスーパーのレジでのエピソードを語っている。その際、Mはその国のレジの仕事がとても遅いこと、秩序がないことを笑いと共に語る。その最後に、Mは「でも袋ぺらっぺら」と両手をあげて右手で袋をつまむようなしぐさと共に示す。この袋というのは、スーパーで商品を購入した際に入れられるプラスチックの袋を指しており、Mは、その国の袋が(日本のと比べて)とても薄いことを指摘する。その後、語りの受け手であった T が参入してくるのがこの断片である。

T は M が直前で言及したスーパーの袋に関して、袋を二枚重ねにして渡すことがあることをセリフ発話を用いて示す。T はこの発話に伴い「袋」で両手を前に出し、「二枚に」でその両手を揃える。更に「あげたよ」で両手を M に向けて差し出す動作を行う身体的動作を行う。この一連の身体的動作とこの発話により、会話の他の参加者は T が今まさに袋を渡す演技を行っていることが理解できる。その際、T は発話の末尾に「みたいな」を付加することで、当該発話を T 自身の地の発話ではなく、セリフであることを遡及的に枠付けている。

ただし、ここで重要なことは、単に分析者である筆者が T の発話をセリフ発話であることを理解できるだけでなく、会話の参加者 M 自身がそのように理解していることを会話の中から確認できることである。T の発話がセリフ発話として理解されていることは、M の反応を見る事によって明らかになる。もし「袋二枚にしてあげたよ」という発話が(セリフ発話)ではなくて、T 自身の地の発話だとするならば、袋を二枚にするということを他の参加者らに対して「報告する」発話として解釈可能である。しかも、その報告は、袋が二枚であることが、「あげた」の付加により、相手にとって感謝すべき事態であり、それがわかるような形で報告されている。そうした「感謝されるべきことの報告」に対して、通常、受け手が行うべき反応の一つは、「そうですか。ありがとう。」のように、「報告の受け止め」と「感謝の気持ちを示す」ことであろう⁹。しかし、実際に M が行っていることは異なっ

⁹ もしくは、「そうですか。でも一枚で大丈夫です。」と報告を受け止めた上で、袋が二枚であることを拒否することもできるかもしれない。

いる。M は、「そうそうそうそうよくあります」と言うことで、M の語りに対して「承認を与える」ことをしている。ここから、M は T の発話を、報告とは異なるものとして扱っていることがわかる。つまり、M は、この発話が T の地の発話ではなく M の語りの登場人物を模した他者の声、つまりセリフとして理解していることがわかる。そして、そのことは、この発話が発せられるまでのやり取りや、T の発話に伴う身体的動作、発話の音調などを参照することによって理解可能となっている。

更に、ここで注意したいのは M の反応が開始されるのは、T の発話に「みたいな」が付加された後ではなく、むしろその前の「あげたよ」が開始される位置だという点である。ここから次のことがわかる。実際の会話参加者は、セリフであることを言語的にマークする「みたいな」が付与される前から、既にこの発話が T 自身の「今・ここ」における地の発話ではなく、語られている出来事において登場人物が産出し得るもう一つの発話として組み立てられていることを理解しているという点である。従って、セリフであることが他の参加者によって理解されるのは、引用の「形式」それ自体、もしくはそれのみによるものではない。つまり。統語的環境や形式はその理解のための一つのリソースではあるが、それらの形式的要素は、実際の会話においては必須要素ではない可能性がある。それは、統語構造や形式が引用表現であることを確定することはあっても、それが無いからといってその発話を理解できないというものではないことを意味している。むしろ、セリフのような発話の性質を捉える上では身体的動作、空間の利用が不可欠の要素と言ってもよいと思われる。このように、会話の参加者は研究者が想像するより遥かに豊かな環境の中で会話に参加し、理解しているのである。そして、そうした観点から会話をとらえるために、本研究では会話分析の手法を用いる。

2.3. 会話分析 (Conversation Analysis) の考え方

2.3.1. 会話の当事者の視点で記述するという事

会話分析 (Conversation Analysis) (Sacks et al. 1974; Schegloff 2007) は、Garfinkel に始まる社会学の流れから開始された。そうした流れの中で、Harvey Sacks と共同研究者の Gail Jefferson、Emanuel Schegloff が行った先駆的な研究がその始まりと言われている。会話分析は、言語学が対象とする言語そのものの意味機能を問う分析方法とは明確に異なっている。会話分析では、一見無秩序に見えるささいなやり取りを一つの秩序ある現象としてとらえる。この時、重要なことは、その秩序が他の科学研究によく見られるようなあらかじめ決められた規則を、研究者が当てはめていくものとは異なる点である。会

話分析の基本的な姿勢は、あくまでもその秩序を「会話に参加する当人たち自身」が、合理的に互いに理解可能・説明可能・報告可能・記述可能なやり方で達成するものであると捉えているところにある（西阪 2008:28）。そして、そうした相互行為の中で、会話参加者がことばを通して何を行っているのか、会話参加者たちの「行為」を組織するやり方を見ていく。

この「行為」について、語用論の立場から現象を論じる久保（2001）は、Austin（1962）や特に Searl（1969）による「言語行為論」は「具体的な個別の言語事象の分析そのものを目的として開発されたのではなく、発話内行為に体现される、人間の言語と思考と行為の一般形式を説明するために開発」（p. 89）されたものであるとする。その際、久保は、言語行為論はある形式のひとつの特別な具現としての「トークン」の理論ではなく、抽象的形式としての「発話のタイプ」の理論であるとする。そして、「規則が付随する要素がタイプであり、その規則の新たな個別の適用によってトークンが産出されるのである」（p. 89）と言う。その点、会話分析では、「言語使用や個別事例を記録し、詳細に記述するので立場が違ふ」と述べる。つまり、語用論と会話分析それぞれで為されていることについて、久保は言語行為論では「抽象的な規則」の解明を中心とするが、会話分析ではあくまでもそれらの規則の上にある実際の発話の個別性を扱っていると解釈できるように述べている。しかしながら、実際の立場の違いはそこにはない。特に、両者の立場は「実際の会話をどのように見るか」という点で根本的に異なっている。

例えば、語用論においては研究者が立てたある規則がある現象に当てはまらないとき、その規則をより広い現象に説明可能なものに更新していくことが多い。それに対し、会話分析の研究者は、「規則性に反している事例」をむしろ詳細に分析することを通して、既に見られた規則的振る舞いがそこでもなお、参照され、用いられているかどうかを示すことを重要なことだと考えている（串田 2006b:199）。ここに会話分析がよってたつ重要な姿勢が示されている。つまり、会話分析が明らかにしようとするその「規則」とは、どのような環境においても当てはまるような研究者の説明のための規則ではなく、我々が「会話参加者」として参照している「規範的で道徳的な秩序」（山田 1999:16）なのである。そして、会話参加者が参照している規則が、会話という活動を通してどのように達成されているのかを明らかにしていく。

そのため、分析において重要なことの一つが、分析者は、出来る限り実際の会話参加者の視点に立って、会話の流れとともに、一行一行の発話を丁寧に見ていくことである。そ

の時、ある発話の後に起こったことを根拠として、発話を理解したりすることはできない。なぜなら、実際の会話の参加者にとっては、ある発話がなされたその時点までが参照可能な現実だからである。そのため、分析の際には、ビデオや IC レコーダーを使い、なるべくその場にいた他の参加者が感じ取っていたのと同じ環境で分析者も会話を繰り返し聞き、詳細な記述を行っていく。この時、分析のリソースとなるのは、話者の語彙の選択、統語構造、発話の参入位置といった、一般に会話をしているときに使っていると考えられる音声言語に関わるものだけではなく、呼気・吸気、表情、笑い、身体的動作、身体や頭の向き、視線、ターンの途中やターンとターンの間、などあらゆるものが含まれる。会話分析では、こうした会話参加者らが実際に利用可能なあらゆるリソースを、発話の理解のための重要な手がかりとし、細かく記述していく。

2.3.2. 現象の観察可能性

会話分析においては、会話参加者自身が参照している規則は、会話参加者たちが互いに認識可能なものとして利用しているものであり、必ず参加者の振る舞いを通してデータの中に現れてくると考えている。それは、単に会話の表面的な部分だけを扱うという単純なことではない。

例えば、前節で述べたように、会話分析では多くの場合、研究者自身が実際の会話場面をビデオカメラと IC レコーダーで撮影・録音したものをデータとして使用し、その場の会話参加者の視点に立って分析を行っていく。その際、会話参加者が当然知っているべきその文脈における固有の情報や、会話参加者としての直観を重要なものとして考えている。これは、実際の会話参加者の視点に立つ為に不可欠な要素である。ただし、注意しなければならないのは、こうしたエスノグラフィックな情報を参加者らが持っていることと、それを研究者が実際の分析の段階で利用することは別のことであるということである。例えば、複数の参加者がいる会話の中において、その中の二人は夫婦であるとか、ある人は医者であり、ある人は教師であるとか、またある人は日本人ではないといったことがあり得る。そして、その事実はその場の会話参加者なら誰でも知っていることとする。しかし、だからといって、ある参加者が医者であるがゆえにあらゆる行為が為されているものとして記述することはできない。そうした情報は、会話の参加の組織化の中で時にリソースとして利用されるかもしれないし、そうでないこともある。例えそうした無数にある情報が、参加者の「心の中に」あったとしても、相互行為の中でそうした情報が利用されるならば、それは利用されていることがわかるような形で、会話の中に現れてくると考え

る。でなければ、その場の参加者らが、そうした無数にある情報のうち、ある情報だけがリソースとなって、ある情報はそうでないことの説明ができない。むしろ、ある情報が利用されていることがデータから観察可能な形で、会話の中に示された時に初めて、会話の他の参加者にとっても分析者にとっても、そうした情報を参加者ら自身が利用したものとしてその発話を理解し、記述に加えることができるのである。

具体的な例を考えてみたい。例えば、複数の友人らが食事をしている場面を考えてみる。そのうちの二人が夫婦であり、夫がある出来事について語る。夫は、語りの冒頭で、「昨日の晩、最悪なことがあったんだよ」と発話したとしよう。その時、他の聞き手らは「えーどうしたの?」とか「なにになに?」といったように、その夫が何らかの「最悪なことがあった」語りを開始することを理解し、それに対する「聞き手」となる準備があることを示す。つまり「語り手」-「聞き手」という参加構造を示す。一方、その状況の中で、妻が「ああ、あのことね。あなた大変だったわよね。」と言うとしよう。この時、この妻の会話の参加の仕方は、他の会話参加者らと異なっていることがわかる。少なくともその出来事を初めて聞く単なる「聞き手」としては振る舞っておらず、他の人たちが知らないことを自分は知っているという立場を示しているように見えるだろう。Sacks (1992) は、こうした会話を「配偶者トーク (spouse talk)」と呼び、配偶者の一方が他人の前で語る時に、もう一方が通常の聞き手とは異なる参加の仕方をするを指摘し、一方はもう一方が正しく語っているのかをチェックしながら聞くこととなると言う。こうした現象を扱うとき、なぜその場にいるある一人の聞き手だけが、当該発話をよく知っているものとして主張し、そのような参加の立場を示すことができるのか。そうしたことを記述するときに初めて、両者が「夫婦」であり、一方が「妻」であるということそれ自体が、妻の発話を理解する際の重要なリソースの一つとして記述の中に含めることができるのである¹⁰。

同様に、西阪 (1997) では、「日本人」「外国人」という互いのアイデンティティが、実際の会話の中でどのように立ち現れてくるのかの記述を行っている。そして、「「日本人」「外国人」であることの成否は、相互行為の具体的展開におけるさまざまな偶然的条件に依存している」(p. 91) とし、こうしたコミュニケーションが、単に「日本人」「外国人」というだけで、「異文化間のコミュニケーション」であるとされることの危うさと、「異文化間の」と呼ぶからには、それはむしろ、相互行為の具体的な展開のあり方として記述すべき

¹⁰ 勿論、ここに示した妻のこの発話だけではそれが果たして「妻」がゆえになされたものであるかは完全に記述できない。妻が「あなた」ということばを使用していることといった発話一つ一つの構成に関する詳細な記述や、その後の振る舞いなどを通して、記述可能になるものである。

ことであることを指摘する。

また、会話分析において話者の実際の「思考」や「意図」が扱われないことも、こうした現象の観察可能性という問題と関連している。つまり、会話分析においては、「思考」や「意図」といった認知的・心理学的な概念の存在を否定したり無視したりしているわけではない。しかし、「実際の相互行為の中で何が行われているのか」という課題に取り組むとき、実際の会話の参加者の視点に立てば、他人の頭や心の中で起こることは基本的には、会話の参加者たち自身にとってもお互いに参照することができないはずである。そのため、分析においても実際のデータの中に現れない限り、「扱しようがない」ものであると考えている。だからといって、会話参加者に事後的に「どうしてこの時そのように言ったんですか」と意図を話し手に聞いたからといって、的確な答えが得られるようなものではない点も重要である。会話分析で扱うのは、実際のやり取りの中で繰り返し利用される社会的行為の組織化の仕方である。そうした行為は、通常会話の参加者らが意識的には行っていない。それは、日本語母語話者に対して、「は」と「が」の違いは何ですかと聞いても、(日本語の専門家でない限り)普通の話者には的確に答えることができないことと似ている(西阪他 2013:6)。つまり、我々は会話の中でことばを「正しく」使用することはできても、なぜそのように使用するのかに関しては無自覚である可能性がある。だからといって、話者がランダムに発話を行っているのでもない。発話の産出の位置や構成には一定の秩序だった規則が見られる。会話分析では、そうした日常の会話において、実際に何が行われているのか、どういう相互行為上の要請の結果ある発話のある位置で行ったのかを一つ一つ観察・記述する。そして、そうしたやり取りの中に潜む参加者らも気がついていないようなからくりを解きほぐしていくのである。

このことについて西阪(2008)は、「会話参加者たち自身が会話をどのように把握しているのかは、本人にしかわからないといったものではなく、会話の参加者たち自身が互いに何をどのように把握しているのかをわかっていなければ、そもそも相互行為が成り立たず、成り立つのであればそれは、研究者にもアクセス可能なものである」(p.28)としている。その一方で、会話の中では時に「そういうつもりで言ったんじゃない」とか「私はこういうつもりだったのに」といった発話が行われるのも確かである。会話分析では、そうした発言が為されたときに初めて、話者の「意図」といったものがやり取りの中において表出し、会話の参加者にとってもとり扱うことができるものとして分析の対象とする。

このように、会話分析には、実際の自然なやり取りの中で示される人々の振る舞いを、

徹底的に「当事者の視点」で記述することを目指す姿勢がある。

2.3.3. 発話の連鎖上の位置と構成 (position and composition)

会話分析において、ある発話を理解するためには、ある発話が「連鎖上のどの位置」に、「どのような発話の構成」を用いてなされたのかが重要であると考えている (Schegloff 2007:20)。このことは、発話行為論と会話分析が扱う「行為」がそれぞれどのように異なっているのかを示す重要な点である。これらの違いについて西阪 (2008) では端的に次のようにまとめられている。

発話行為論は、発話が生じた実際の環境から切り離された個々の発話に焦点をおく傾向があるのに対し、会話分析は、発話はまず第一に、一連の発話の流れの中におけるその位置を考慮した文脈の中で理解されなければならない、という前提から出発する (p. 62)

例えば、「get on your clothes」という発話について考えてみよう。この発話を単独で理解しようとするなら、おそらく服を着ることを「命令」または「指示」するものとして記述されるだろう。しかし、この発話が連鎖のどのような位置に置かれているのかを見ることで、異なる行為が為されていることに気がつく。Schegloff (1984) では、以下のような事例を用いて、ある発話を理解するときそれが単に統語的形式がその行為を決定付ける要因とはならないことを指摘している。以下は電話会話の断片である。

```
((B has called to invite C, but has been told that C
is going out to dinner))
01 B: Yeah. Well get on your clothes and get out and
02 collect some of that free food and we'll make
03 it some other time Judy then.
04 C: Okay then Jack.
05 B: Bye bye
06 C: Bye bye
```

(Schegloff 1984:30(2)より抜粋。行番号は筆者が付与。)

1行目、2行目の「get on your clothes and get out and collect some of that free food」という発話は、発話の言語形式だけを見るならば、「命令」または「指示」として記述される可能性が高い。しかし、本当にこの発話を理解しようとするとき、実際の発話が置かれる会話の連鎖上の位置を理解することが重要である。まず、この電話において、発話に至るまでに、BはCを誘ったが、Cは既にディナーに行くこととなっていたというやり取りが為されている。そうした電話の終盤において、この発話が為される。そして、更に重要なことは、この発話が「実際に」他の参加者によってどのように理解されているのかは、次の行でCが当該発話をどのように理解しているかにかかっているという点である。Cは、通常、「命令」「指示」のような第一対成分に対して適切となる「受諾」「拒否」のような第二対成分を行っていない。Cは4行目で「Okay then Jack.」と発話する。この発話によって、CはBの発話を「命令」ではなく、「会話を閉じるための誘い」として聞いていることがわかる。そして、Cの発話はそれに対する「賛同」として構成されている。このことは、そもそもBの発話が会話の連鎖上のどの位置におかれ、それを踏まえた上で、どのような形式が用いられているのかを見なければ理解できないことである。

言語的リソースとしての統語構造は発話の行為タイプを特定する一つの重要なリソースである。しかし、重要なことは、その発話がどのような連鎖上の位置に置かれているのかという視点なしには、実際のところ何を行っているのかは記述できないのである。会話分析が分析上の重要な視点として考える「連鎖上の位置」は、こうした発話を文単位で見る研究では的確にとらえられなかった様々な現象を扱うことを可能にする。このような「行為」の記述に関して、Schegloff (1984)、Schegloff (1988b) では、発話行為論では何が見過ごされてきたのかの詳細について更に詳細が論じられている。また、Levinson (1983) や串田 (2006a) においても、同様の観点から記述がある。このようにある発話を分析する際に、会話分析は「なぜ、いま、それを (why that now)」を考える。この考え方によって、本研究で扱うセリフ発話を(単なる字義通りの意味としてではなく)、なぜ受け手が行う「セリフ」として他の参加者によって理解されるのかが説明される。

2.4. 本研究にかかわる会話分析 (Conversation Analysis) の基本概念

2.4.1. 隣接ペア (adjacency pair)

隣接ペアとは、連鎖組織を構成する基本的な単位である。それは例えば「質問-応答」「挨拶-挨拶」「依頼-受諾/拒否」のような行為の対である。これらの対には以下のような特徴がある。(1)第一対成分 (first pair part) と第二対成分 (second pair part) の2つの

部分からなり、(2)それぞれの行為は、異なる話し手によってなされ、(3)隣り合った位置に置かれ、(4)一方が先に置かれ、その後にもう一方が置かれるという順序の制約があり、(5)第一対成分は、次におかれるべき対応する第二対成分を要求する (Schegloff 2007:13-14)。Stivers (2011) では、以下のように様々な行為対をまとめている。

First-pair part action (第一対成分)	Second-pair part action (第二対成分)
Summons (質問)	Answer (応答)
Greeting (挨拶)	Greeting (挨拶)
Invitation (誘い)	Acceptance/declination (受諾/断り)
Offer (提案)	Acceptance/declination (受諾/断り)
Request for action (行為要求)	Granting/denial (承諾/拒否)
Request for information (情報要求)	Informative answer (情報提供)
Accusation (非難)	Admission/denial (承認/否定)
Farewell (別れの挨拶)	Farewell (別れの挨拶)

(Stivers 2011:192 Table 10.1 より抜粋。日本語訳は筆者による加筆。)

ただし、会話分析においてこうした規則は、どのデータにも必ず見られる絶対的な規則というわけではない。つまり、研究者が分析のために作った規則ではなく、あくまでも会話の参与者によってその都度参照され、会話の中で利用されている規則として考えている。例えば、Aさんが「質問」をBさんに向けて行うとする。このとき、「質問」の後にはそれに対応する「応答」が来るのがBさんに期待される。この期待がなされることがまさに、こうした隣接対の存在が相互行為を行う際に参照される規則であることを裏づけている。そして、このことは次のようなやり取りの説明を可能にする。

((夕食の席で))

01 妻：明日どこに行こうか

02 (1.0)

03 妻：ねえ聞いている？

1行目の妻の「質問」の2行目の「聞」はどのようなものとして聞かれるだろうか。こう

した「間」は、様々に記述が可能である。しかし、多くの場合、私たちはこの間を単に「誰も話していない状態」として理解するのではなく、来るべき応答が為されていない「夫の沈黙」もしくは「夫の応答の不在」として聞くだらう。そしてそのように理解できることは、分析者が単にそう考えるだけではない。沈黙の次の3行目で、妻が夫が聞いているかどうかを尋ねている。このことは、2行目の間が単なる沈黙ではなく、妻によっても夫の応答の不在として理解されていたことを裏づける。つまり、2行目で起こったことの対処として3行目の妻の発話がなされていると見ることができる。

こうした記述は、隣接ペアという概念を用いることによって可能となる。それは、ある時は、単なる間としか感じないものが、ある特定の場面において我々がなぜ「夫の沈黙」として理解できるのかに説明を与えることができるからである。隣接ペアは単にある発話とある発話の行為対を特定するための単純な規則ではない。混沌とした会話の中で参加者らによって参照されている。そしてそうした装置は、間といった実際には見えない何かを分析者の我々にも観察可能にするものなのである。

2.4.2. 優先構造 (preference organization)

隣接ペアという概念から、ある隣接ペアを構成する第一成分が発せられたなら、ある特定の第二成分が期待されることがわかった。その一方で、期待される第二成分にはいくつかの可能性が考えられている。例えば観光地を歩いているときに、他の観光客から「写真を撮ってください」とカメラを差し出されたとしよう。この状況において、当該発話は、通常「依頼」として聞きうる。そして、「依頼」という第一成分がきたなら、少なくとも「受諾」と「拒否」という第二成分の候補が考えられるだろう。「受諾」は「いいですよ」とか「もちろん」と言いながらカメラを受け取ることで示すことができるだろう。また、「拒否」は「あー私、ちょっと写真とるの下手なんで…」とか「あ、すみません、今急いでるんで」と言うことによって示されるだろう。この第二成分で行われている行為はどちらも、第一成分の「依頼」に対する適切な反応として理解できる。しかし、重要なことは、これら「受諾」と「拒否」という選択肢の第一成分に対する関係は同じではなく、一方に偏りがあるという点である。つまり、応答間に非対称性がある。この偏りのことを一方の行為に「優先性」(preference)があると言う(Sacks 1992, Pomerantz 1984, Pomerantz and Heritage 2011)。

一般的には「～てください」という依頼に対する応答としては、「はい、します」と「受諾」を行うほうが優先される。そのことは、単に心理学的な理由から私たちが受諾の方が

拒否を行うよりもいいと考えているからではない (Schegloff 2007:61)。そうした行為の非対称性は、実際の相互行為の組織を構成する連鎖の構造からも確認できるものである。それは、例えば、「受諾」の場合、その応答の仕方は、一般的に第一対成分の直後のできるだけ早い位置で、短く単純な発話形式を用いて行われやすい。その一方で、「拒否」を行う場合は、通常、話し手は即答せずに、言い淀んだり、明確な反応を示す前に理由を述べる。それによって、依頼に対する応答に遅れが生じる。そうした会話の構造的にわかるような形で示される「応答の遅れ」自体が、それを非優先的なものであることを裏づける証拠となる。具体的なやり取りに照らしてみると、「写真を撮ってください」の依頼の応答として受諾を行うとき、通常私たちは、即座に「ええいいですよ」などと応答するのに対し、拒否を行うときは、すぐに「撮れません」とか「無理です」と言うことは稀で、その前に「あの一」とか「すみません」「ちょっと…」と言い淀んだり、「写真を撮るのが下手」とか「急いでいる」と言ったように、拒否の理由説明を行うことにより、応答を遅らせる。そうした遅れは、まさに会話の参加者自身が、依頼に対して拒否を行うことが、第一対成分の行為の進行を支える (align) 行為ではなく、むしろそれを止めてしまう (blocking) 行為であることが、会話の組織の中に示されることである。この優先性の概念は、本研究においては第6章の不満を語る際にどのような受け手の反応が優先性をもったものとして扱われているのか、という議論の中でふれる。

2.4.3. 物語を語ること (storytelling)

物語の語りについては、これまで様々な研究が重ねられ、注目を浴びてきた。例えば、語りにはどのような構造的特徴があるのかが示されてきた (Lavob & Waletzky 1966; Jefferson 1978; Goodwin 1984)。また、M.H. Goodwin (1990) は、語るということが、ある行為を達成するために利用されていることを記述的に示した。例えば、子どもたちの口論において、出来事の語りを持ち込む。それは、口論の単なる傍観者であった者をも会話の中に引き込み、聞き手として参加させることを可能にする手続きとなる。つまり、その場の会話の参加者の構造に変化をもたらすことができる (M.H. Goodwin 1990)。また、Sacks (1974) は joke-telling (冗談語り) の連鎖の分析の中で、物語を語るということが、ある構造を持った連鎖であることを指摘している。その構造は、語りの前置き (preface)、語り (telling)、そして反応 (response) の連鎖から成る。ただし、その構造は、語りの中で必ず見られる固定的なものではない。あくまでも、相互行為の中で参加者らによって志向され、形作られていくものであるという点が重要である。本節では物語を語るという

ことと、そこでの「受け手」の振る舞いに関して、主に Sacks (1974) と西阪 (1995) を参考にしながら整理する。

日常の何気ない会話の中で、互いの経験を語る場面に遭遇することがある。その際、物語の語り手と聞き手は互いに、その物語に関する情報を「持つもの」「持たないもの」として振舞い、基本的には情報を「持たない」ものから、「持つもの」へと「情報が伝達される」ことを我々はリアリティを持って経験する。このようなりアリティの中で「物語の語り」という行為は価値あるものとして達成される。しかし、そのとき物語の語りは語り手だけに関わるのではなく、そのつど相手とともに協同で成し遂げなければならないものである (西阪 1995)。

まず、語りの前置き (preface) について考えてみよう。語り手は、語りの前置きにおいて、受け手に対して語る機会を尋ねたり、要求することができる。そして、受け手はそれを受け入れたり、拒否したりすることができる。例えば、語り手は「先週面白いことがあったんだ」と言うことで、語りをどのように聞くべきかや、どのような語りであるか要点を示す。受け手は、その機会を利用して、その語りを既に知っているかどうかを知ることができる。一方、その時、受け手は、「昨日聞いたよ」などと言うことで、語りが先に進むことを阻止することもできるし、「うんうん」など相槌的反応を示すことにより、語り始めることを受け入れる準備があることを示すこともできる。そして、もし語り手が語り始めることができるならば、そのとき、会話のターンテークシステムは通常とは異なる。物語を語る際のターンテークシステムが通常と異なるということは、どういうことか。それは、物語を語り始め、語り、終えるためには語り手は複数の文を用いなければならない。そのため、物語の完了を迎えるまでには、物語を語るあいだ通常のターンテークシステムの働きは停止される必要がある。語り始めることができたなら、語り手は、語るべきことが語り終わるその時まで、一つ以上のターンを継続的に語り、維持し続ける機会が提供される (Sacks 1974; Mandelbaum 1987; 西阪 1995)。このように、語りを語り始めること、そして継続することは、語り手一人の勝手な企図によって成し遂げられるものではない。受け手と協働的に達成されるものなのである。

一方、物語の終わりもまた、相互行為的に成し遂げられるものである。「物語が終わった」とき、一旦停止されたターンテークシステムが通常通りに再び機能することとなる。そのためには、会話の参加者によって、観察可能な形で、物語が今まさに終わりに向かうための具体的な手続きが踏まれる。例えば、ある物語が「面白いもの」として語られてい

るとき、受け手はしかるべき反応をするよう期待されている。つまり、受け手は面白い語りが語られるならば、その「面白いこと」が語られるできるだけ早い位置で笑うことや、「面白いね！」と反応することが求められる。実際に、語り手は、物語の終わりにおいて、受け手の受諾や評価といった物語の終わりを示す典型的な装置 (a prototypical story-ending device) 用いた反応を探す (Jefferson 1978)。そのため、もし受け手の反応の遅れや沈黙が生じたなら、それは反応の不在として理解され、語り手は、例えばオチをもう一度言い直すことなどによって、適切な反応の不在への対処を行うこととなる。そして、そうした受け手の適切な反応が得られたなら、語り手は次の位置において、物語のまとめとして聞きうるような感想やコメントを行う。それによって、語り手は物語を収束に持ちこむための具体的な手続きを踏むこととなる。こうして、語り手、受け手双方にとって、今や通常のターンテークシステムに戻ってもよい位置に達していることが認識され、それまでの日常的なやり取りとは境界付けられた (西阪 1995) 物語を語るという行為全体が終わりを迎え、通常のターンテークシステムへと戻る。

このように、物語を語るということは、単に語り手が語りたいことを語ることで実現されるといった一方的なものではない。常に受け手の反応によって支えられ、協働的に成し遂げられていくものである (Sacks 1974, 1992; Jefferson 1978; Goodwin 1984; Stivers 2008)。本研究においても、物語を語ることが相互行為の中で交渉され、形作られていくものであるというこの視点に立ち、分析をすすめていく。特に、本稿で扱う受け手の特徴的な反応の仕方が、そうした相互行為的に達成される、物語を語るという活動への一つの証拠となつていることを示す。

2.4.4. 不満 (complaint) を述べること

会話分析において、相互行為の中で不満がどのように取り扱われているのかに関して一定の研究の蓄積がある。以下では、まず初めに不満を述べるということがどのように扱われてきたのかについて整理する。

不満を述べることとそれに対する受け手の反応という一連の流れは、質問のあとには応答が、挨拶には挨拶、そして依頼には受諾/拒否という行為の対が期待される隣接対の概念と同様に、その次に affiliate/disaffiliate という特定の行為対が想定されることが指摘されている (Drew and Holt 1988, Drew and Walker 2009; Dersley and Wootton 2000; Drew 1998; Pomerantz 1984; Schegloff 1988a)。更に、そうした第二対成分の応答の仕方には、優先性があることも指摘されている。不満に対しては affiliate な反応が優先的な応答と

して理解され、disaffiliate な反応が非優先的な応答として理解されると言う。ただし、不満を述べることそれ自体は、単に質問をするという一つのターン内で達成される単純な現象ではない。そのため、不満に対する応答についても、単純には記述できない。この点で、質問—応答、依頼—受諾（拒否）のような行為対と全く同様には捉えられず、とりわけこの点が重要である。そのことは、先行研究において不満を述べるのが単に話し手一人の企図の上に成り立つものではなく、相互行為の中で参加者らが交渉していくものであることが記述されている。例えば、Schegloff (2005) では、行為の記述に関する論考の中で、一見質問にしか見えない発話が、実は不満として聞きうることを受け手自身が気がつき、それが実際に明示的に不満として表明化する前に、受け手が阻止していることを示している。具体的な例を見てみよう。

[Schegloff Coffee Chat, 8]

- 1 (0.5)
- 2 Hank:--> Wut is that cam:era set up for?
- 3 Betty:-->> Well they- she came over and she ask'd* if we minded if
- 4 she took (.) our conversation_they're jist doing it for
- 5 a school proj:ect.
- 6 Hank: Mm hm.=
- 7 Betty: =And we said we didn't mi:nd<and we all sign:ed it.
- 8 (ap)proving we didn't mind so(h)=
- 9 Tom: =heh=heh=
- 10 Betty: =heh heh .hh hh
- 11 (1.6)

(Schegloff 2005:451より引用)

この断片では、3人の参加者が会話を交わしている。Hank はそのうち最後にこのテーブルについて人物である。Hank はこのデータを収録しているビデオカメラに気がつき、1行目の発話を行う。この発話に注意したい。この発話は、字義通りに見れば単純な質問として理解可能な形式をとっている。しかし、次の行のBettyの応答に注目するとBettyはHankの発話を単なる質問としてはとっていないことがわかる。それは、第一に、Bettyは発話を「well」(3行目)で開始していることに現れている。このことは、その応答が容易に答えられないこと、少なくとも即答することができないことを示している。第二に、その後の

Betty の応答は、質問に対する単純な応答ではなく、カメラが設置されるに至った経緯を物語として語る形をとっている。しかもそこには、Hank が来るまえにきちんと承諾を得る手続きを経て、ビデオカメラが設置されるに至ったという事情説明が盛り込まれている（7～8行目）。そして、笑いを発して応答を終えている（10行目）。こうした応答によって、Betty は Hank の質問を、「次に不満がくる可能性があるもの」として聞いていることを示していると見ることができる。つまり、Hank の質問を「なぜビデオカメラが設置されているのか。許可を得ているのか。」といったように不満として聞きうる発話が続けられる可能性を持ったものとしてとらえているからこそ、Betty は先回りして、ビデオ撮影が正当な手続きを経てなされていることであることを説明しているのである。このような Hank の不満が来うる発話について、Schegloff は、*complainability* ということばを用いて表している。*complainability* は *complaint*（不満）に先立って認識されうるものであり、結果的に *complaint*（不満）が表出しないこともある。つまり、不満を述べることはやり取りの中で示される。そして、それが聞き手に理解され、徐々に不満として形作られていくものとして捉える必要があることがわかる。

次に、語り手がどのようにしてある出来事（や人）に対して不満を語っていくのかについて整理する。自身の経験を語る際、語り手は報告する出来事を自分自身がどのように理解しているのか、自身の態度（*stance*）を何らかの形で示しながら発話を慎重に組み立てる（Stivers 2008）。それは、明示的に示されることもあれば、非明示的に示されることもある。明示的に示されることとは、例えば驚いた体験が語られるときに、語り手が語りの最初に「すごいびっくりしたことがあったんだよ」と宣言し、そこから具体的な語り（の本体）に入る場合などがある。それは、語りの最初に語り手がその語りをどのようなものとして聞くべきかの態度を明確に示す一つのやり方である。その一方で、語りの中で「驚いた」と言語的に明示せずとも、語りの中の演技的な発話や、そのプロソディ、身体的動作、表情を使って、それが驚くべきものとして語り手が理解していることを示すこともある。いずれにせよ、語り手は、そうした様々なリソースを利用して自身の出来事に対する態度を示す。

では、語りの中で不満に言及する場合はどうか。既に述べたように、不満を述べることは一つのターンで確実に為され、取り扱われるといった単純なものではない。また、他者や出来事に対する否定的な態度を表出することは、ある意味でモラルに反することを行うことであり、もし受け手が同意できないようなことを語り手が不満として語り続けてしま

うならば、語り手自身の立場を危うくするリスクを伴う。そのため、不満を語るためには、同様の思いを示す共犯者または、不満を受け止めて共感してくれる人が必要であり、そうした受け手の存在が明らかになることによって語ることそのものが価値あるものとしてその場で扱われる。従って、通常、不満の語り手は最初から「Aさんはとても嫌な人だと思う」などと、語り手自身の他者に対する否定的な態度を明示的に示すことはしない (Drew and Walker 2009:2405)。むしろ、態度を明示するような断定的な表現を避け、語りが進行する中で、徐々に明らかにしていく。実際に、Drew and Walker (2009) では、語り手が、complainable な事柄をトピック化 (topicalizing) することを通して、注意深くシークエンスを進めたり (move into)、共一参加者からの不満の構築における参加を確保していることを示している。この時、不満は最初のターンで不満として示されるのではなく、complainable matter (不満として聞きうる事柄) が提示され、会話のやり取りを通して、語り手は受け手の反応に注意しながら、徐々に、不満として明確に構成されていく様相が記述されている。具体的な例を見てみる。

[Holt M88:1:5:3]

- 1 Rob: I: find her I get t'the sta:ge w'r I: I: come out'v
 2 staff room cz I feel like saying t'her .hhh(0.2)if
 3 you don' w'nna p't anything int'teaching, th'n why don't
 4 you get out.=
 5 Les: =That's ri:gh[t,
 6 Rob: [Did you f-(.)Di[d you(feel the]sam[e)
 7 Les: [Y e : s .]Yes[she's
 8 just ticking over isn't sh[e].
 9 Rob: [Oh:: it's ridicu[lous].
 10 Les: [Ye:s:.=
 11 Rob: =I[really feel very]()
 12 Les: [W el l it's ni]ce to have this cha:t['n know that=
 13 Rob: [Oh!
 14 Les: =you feel the same .hhhh

(Drew and Walker 2009:2401 より引用)

この断片において、Robbie は同僚の振る舞いについて語っている。Lesley はかつて当該

人物と一緒に働いた経験がある。まず、Robbie は、不満として聞きうる出来事について語る（1～4 行目）。重要なことは、この時点において、Robbie はその同僚に対して明確に批判を述べたり、不満に思っていることを明確に示していないという点である。字義上は出来事の報告として聞きうるものとして産出している。それに対し、受け手の Lesley は、Robbie に同意を示す（5 行目）ことや、より明確な形で同僚に対する見解を示す（7～8 行目）。そうした受け手の反応を得たその後、Robbie はその同僚に対して明確に不満として聞くことが可能なことば「ridiculous」を用いて再度語り続ける。

このように、語り手が不満を語ることは、語り手一人が一つのターンで達成するものではない。受け手とのやり取りを通して、徐々に、自らの態度を明確に示しながらたち現れてくるものである。更に、そうした語り手が不満を表明する際の有効な態度の示し方の一つに、「I thought」という表現の利用がある（Haakana 2007）。Haakana は、これまで reported speech の研究の中に含まれていた reported thought を取り上げ、分析を行った。Haakana では主に「I thought」という表現を用いて、語り手が語った出来事に対する自身の思いを、登場人物の視点から実演的に語りの中に織り込むことを指摘している。そうした表現の使用によって、語り手はより明確に描写された場面における（言語的）活動を、語り手がどのようなものとして評価するのかを示すことができる（Haakana 2007:161）。つまり、確かに相手とのやり取りの中に批判すべきことがあったことを、（しかし実際には言われなかったこととして）現在のやり取りの場に示すことができる。そうした語り手の発話は、語り手がその出来事をどのように捉えているのかという評価装置として（as an evaluation device）利用される（p. 176）。そして、重要なことは、そうした語り手の態度の表示が、受け手の物語に対する評価への一種の導きとなるということである。更に、同様の観点から、日本語においては須賀（2012）が分析を行っており、「みたいな」や「思って」という表現形式によってマークされる現象が Holt の言う「I thought」と似た機能を果たしている（p. 431）ことが指摘されている¹¹。第5章では、こうした先行研究を踏まえた上で、不満が述べられる際の受け手のセリフ発話による反応を検討していく。

¹¹ ただし、須賀（2012）では、「みたいな」「思って」の使用の差異について詳細に述べていない。このことについて、筆者は、両者の使用が必ずしも交換可能な形式ではないと考えている。つまり、「思って」は、（実際に発話されていなくとも）報告する現場において、実際にそのように思ったという「経験」を報告するという活動の「内部」から示す形式の一つである。それに対し、「みたいな」は、そのように感じる事象であることを、「現在の報告場面の立場」、つまり出来事の「外部」から示しているように思う。そのため、「思って」の後に、受け手が同様に「思って」と続けて他のパターンを示すことはできないが、「みたいな」を使えば、受け手にも同様に参入する機会がおとずれる。この点について第4章でもふれる。

2.5. データの概要

本研究の分析においては、主に筆者自らが収集した自然会話のデータを用いる。収集したデータから諸現象の実例を収集し、トランスクリプトに起こし、分析を行う。データの種類は、対面会話と電話会話に分けられる。

対面会話

主な分析に用いるデータの種類と分量の内訳は、以下の約 18 時間分である。

データ名	収録経路	時間	人数	会話場面の特徴
Data1	筆者収録	1 時間	2 名	研究室の先輩後輩
Data2	筆者収録	1 時間	3 名	職場の仲間
Data3	筆者収録	1 時間	4 名	研究室の先輩後輩
Data4	共同研究者収録	1 時間	4 名	友人同士
Data5	筆者収録	1 時間	2 名	研究室の先輩後輩（一人は非日本語母語話者）
Data6	共同研究者収録	1 時間	4 名	友人同士
Data7	筆者収録	1 時間	3 名	友人同士
Data12	筆者収録	1 時間	6 名	友人とその子ども（うち 1 名乳児、1 名幼児）
okzk data	共同研究者収録	約 10 時間分	2 名	初対面会話、音声のみ

表 1 収録した会話データ一覧

会話の調査の際、筆者はビデオカメラと IC レコーダーを使用した。Data1～Data7 については、研究協力者に大学構内の一室に来てもらい、一定時間自由に会話をしてもらった。その際、会話場面をより自然なものとしリラックスした状態で話してもらうために、お菓子や飲み物を準備し自由に飲食をしながら会話をしてもらうよう環境を整えた（下図参照）。



図1 会話の場面例

その際、携帯電話による通話は禁止とし、必要があれば教室の外で行うよう指示した。基本的には自由に会話をしてもらったが、Data1 と Data2 については、「海外での体験」について話してもらうよう指示した。その際、研究協力者は全員、一定期間の海外での移住経験を持っていることを前提に協力を依頼した。更に、Data1 においては、話題に詰まったり、一区切りついたところで、会話のトピックが書かれた紙を引いてもらい、基本的にはそれに沿って話してもらうよう指示した。トピックは、海外での「驚いた体験」「不思議な体験」「失敗した体験」「腹が立った体験」「忘れられない体験」「ショックだった体験」であった。Data12 は、親しい友人らがメンバーの一人の家に集まり、飲食をしながら会話を行う様子を撮影した自然会話である。更に、okzk data は初対面の音声会話データ（約 10 時間）を広島大学大学院生の岡崎渉氏から提供を受けたものである。

電話会話

筆者や共同研究者が撮影したデータに加えて、電話会話も利用した。電話会話は、『CallFriend Japanese Corpus』と呼ばれるコーパスである。これは、The *TalkBank Project* (MacWhinney2007) において配布されている音声データ（約 30 分）であり、1990 年代のアメリカで収録された在米日本人同士の電話の通話データである。以下のデータにおいては「CallFriend」と記載する。

2.6. トランスクリプト

会話データの転記は Gail Jefferson によって開発されたシステムを参考にしている。以下、記号の意味の説明は『社会言語科学』Vol. 10, No. 2 で用いられた一覧と、串田(2006a)、西阪他(2008)を参考に本稿のために記したものである。

トランスクリプト記号一覧

記号	意味
[オーバーラップの開始位置。
]	オーバーラップの終了位置。
=	末尾に等号を付した発話と冒頭に等号を付した発話との間に感知可能な間隙がまったくないことを示す。
(数字)	丸括弧内の数値は、その位置にその秒数の間隙があることを示す。
(.)	その位置にごくわずかの感知可能な間隙(概ね 0.1 秒前後)があることを示す。
:	直前の音が引き延ばされていることを示す。コロンの数により相対的な引き延ばしの長さを示す。
-	直前の語や発話が中断されていることを示す。
?	直前の部分が上昇調で発されていることを示す。
↑↓	上向きと下向きの矢印は、直前の部分で急激な抑揚の上昇や下降があることを示す。例えば同じ話者の前後の発声に比べて音量が大きい場合、音が高くなっている場合などがある。
文字	下線を引いた文字が相対的に強い音調で発されていることを示す。
°文字°	音が小さいことは、当該個所を°で囲むことにより示す。
hh	h は呼気音を、h の個数はその相対的な長さを示す。この記号は「ため息」「笑い」などいくつかの種類の異なるふるまいを示すが、本稿においては「笑い」の記号として用いることもある。
.hh	ドットに続く h は吸気音を、h の個数はその相対的な長さを表す。この記号は「息継ぎ」「笑い」などいくつかの種類の異なるふるまいを示す。
文字(h)	呼気音の記号は、笑いを表すのにも用いられる。とくに笑いながら発話が産出されるとき、そのことは、呼気を伴う音の後に(h)を挟むことで示す。
¥文字¥	発話が笑いながらなされているわけではないけれど、笑い声でなされている場合、発話を¥で挟むことで示す。
(文字)	丸括弧内の文字の聞き取りに自信が持てない場合の表記。
()	聞き取り不可能な箇所は、()で示される。空白の大きさは、聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している。
(X/Y)	XかYかいずれかが発話されていると聞こえるが、どちらであるかに確信が持

	てないことを示す。
(())	発言の要約やその他の注記は二重括弧で囲む。
文字-	ダッシュは、直前の語や発話が中断されていることを示す。
文字.	ピリオドは、尻下がりの抑揚を示す。
文字?	疑問符は、尻上がりの抑揚を示す。
文字;	逆さまの疑問符は、やや尻上がりの抑揚を示す。
文字,	コンマは、まだ続くように聞こえる抑揚を示す。
文字_	アンダーバーは、平坦な抑揚を示す。
文字!	感嘆符は、弾んだ抑揚を示す。
↑文字	上向き矢印は、直後に急に音が高くなっていることを示す。さらに高くなっているときには↑↑このように矢印を二つ使う。
↓文字	下向き矢印は、直後に急に音が低くなっていることを示す。さらに低くなっているときには↓↓このように矢印を二つ使う。
<文字>	不等号で囲まれた部分が、前後に比べてゆっくりと発話されていることを示す。
>文字<	不等号で囲まれた部分が、前後に比べて速く発話されていることを示す。

第3章 「セリフ発話」の産出と物語の相互行為的展開

3.1. はじめに

受け手の反応が物語を適切に「理解している」ものとして聞かれるためには、単に受け手が反応を示せばいいのではない。相互行為の中で適切な位置と発話の構成で参入する必要がある。本章では、そうした受け手の積極的な参入が、物語を語る・受けるという活動において、受け手によるセリフ発話がどのようになされるのかを詳細に見ることによって、相互行為上、どのような機能を果たしているのかについて論じる。

まず初めに議論の理解のため、筆者の持つデータに見られたセリフ発話の発話産出上の位置と発話の構成の特徴について整理する(3.2)。その際、受け手のセリフ発話による参入の直前には、語り手が示す「語りの中の具体的状況」の提示が行われやすいことについて述べる。それを踏まえた上で、そうした「語りの中の具体的状況」がどのように示され、それによって、セリフ発話がどのように立ち表れるのかを詳細に見ていく。まず、受け手の参入のリソースとして、語り手の語りの中の具体的状況の提示の仕方に、語り手の「演技的な発話」が関わっている事例を分析する(3.3)。次に、語り手の「身体的動作」が関わっている事例を分析する(3.4)。最後にまとめとして、セリフ発話が、語り手に対する強い理解を示すこととなっていること、そして、そうした行為は、物語を語るという行為が相互行為的になされることを示す、一つの証拠となっていることについて述べる(3.5)。

3.2. セリフ発話の連鎖上の位置と構成

本節では、受け手のセリフ発話による参入の仕方に注目し、筆者の事例の多くに見られるセリフ発話による参入の位置と発話の構成の特徴を、次節以降の分析の理解のために整理しておく。

まず、セリフ発話の産出の位置についてである。筆者の持つ事例においては、受け手のセリフ発話の直前に、語り手による物語の実演が行われることが多い。物語の実演とは、語り手が、演技的な発話や身体的動作を用いて、物語中の登場人物になりきった発話を行ったり、物語の中で描写される物が、あたかもその場にあるかのように示されることであ

る。例えば、次の事例においては、38行目のセリフ発話の産出の直前、37行目で語り手である京子が、「いつ来るんだよ::」と発話する。この発話は、京子が語る出来事の中における京子自身が発した（思った）ものとして聞かれる。つまり、今・ここでの京子の声としてではなく、演技的な発話を用いて、物語の一部の声を実演的に示すことをしている。

断片(1) 【CallFriend 1684】 (=第1章 断片(3))

- 29 京子: でもロビーなんかも[::
30 真弓: [うん
31 京子: じゃあ京子住所送って:とかって[ゆうから
32 真弓: [うん
33 京子: 手紙書いた[↓ら::>
34 真弓: [うん
35 京子: 僕はすぐ:受け取ったらすぐ手紙書くよ:って言いなが[ら::
36 真弓: [hhhhh
37⇒京子: いつ来るんだよ[::みたいな
38⇒真弓: [おい::みたいな

こうした実演が、セリフ発話の産出の直前に行われやすいことは、先行研究の事例やその観察とも一致している (Holt 2007; 西阪 2008)。ただし、本研究で新たにわかった重要な点は、その実演が発話だけで為されるとは限らないという点である。事例を詳細に見てみると、発話の上では、単に語り手が説明的に語り、その中で突然受け手が参入しているように見える場合もある。しかし、その場合にも、実際には、語り手は身体的動作によって実演を行っていることがある。つまり、語り手は、実演を用いて語りの詳細度（「granularity」 Schegloff 2000）を引き上げる。それを通して、語りの一場面を具体的な形で「今・ここ」に生み出し、その出来事がどのようなものであったのかを際立たせる。その際、提示される語りの中の具体的状況は、過去の出来事の再現として理解される場合もあれば、冗談の文脈の中で行われる仮定・架空の（「hypothetical」 Holt 2007）状況として理解されることもある。重要なことは、受け手のセリフ発話が、語り手が語りの中の具体的状況を「今・ここ」に生み出した後の適切な位置に、適切な形で置かれるという点である。分析の見通しのため、流れを図示しておく。

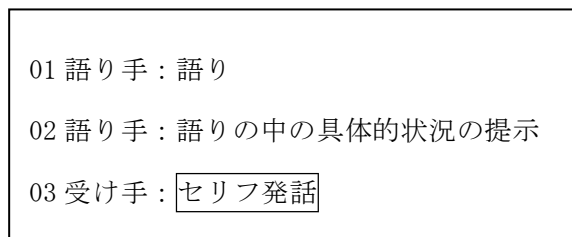


図1 セリフ発話が見れる典型的な連鎖構造

次に、セリフ発話の構成についてである。受け手は、語り手の具体的状況において、セリフとして適切に聞かれる形式と内容でセリフ発話を産出する。その際、受け手は、セリフ発話が行われる直前まで、笑いや納得を示すことで物語の「受け手」としての振る舞いを見せていることが多い。しかしながら、受け手は、あたかも物語の内容を知っているかのように、物語の登場人物になりきって参入する。その際、セリフ発話には、「自らの声とは異なる」ことを示すために、言語的な標識、発話の音調、身体的動作、視線の変化等が用いられるという特徴がある。更に、発話の内容は、その登場人物が実際に声に出して言いそうなことというよりは、登場人物が思いそうな、心の叫びや、本音の吐露として聞かれる発話が多い。更に、その本音の吐露は、単に語り手の発話を繰り返したり、模倣するものではない。受け手は、今・ここで示されている語り手の描写の焦点が、より明確に浮かびあがるような、極めて具体的な詳細度の高い形で、発話を組み立てる。そして、受け手がセリフ発話で適切に参入できることは、まさにそのような厳密なレベルで受け手が物語を理解していることを示す一つの手段となっている。以下の章では、こうした受け手のセリフ発話の参入の位置と構成の特徴を、具体的な事例と共に見ていく。

3.3. 語り手の「演技的な発話」と受け手の「セリフ発話」による参入

本節では、セリフ発話の直前に示される語りの具体的状況が、主に語り手の演技的な発話によって為される事例を分析する。まず、具体的な分析に先立って、演技的な発話の相互行為上の機能について論じた研究を整理しておく(3.3.1)。そこでは、語りにおいて、語り手が演技的な発話を用いるとき、それは単に場を盛り上げたり、会話を生き生きとさせるためだけになされているのではないことが明らかになる。そのことを踏まえつつ、3.3.2以降では、具体的な事例に基づき、受け手によるセリフ発話が、いかに語り手の振る舞いに敏感な形で組み立てられ、物語に対する適切な理解を示す手段として利用されているのかを明らかにする。受け手の参入には、大きく二つのパターンがある。一つは、語り

手の演技的な発話と同じ登場人物の立場から参入し、語り手の発話にパラレルなものとして聞かれる発話である (3.3.2)。もう一方は、語り手の演技的な発話の反応として聞かれる発話、つまり、語り手が発した発話の登場人物に対する「相手役」の発話として聞かれる場合である (3.3.3)。最後に、双方の事例の相違点と共通点を整理し、当該現象によって為されていることが何であるかを明らかにする (3.3.4)。

3.3.1. 物語における語り手の「演技的な発話」

会話分析の立場から、英語の語りにおける Direct reported speech (cf. 演技的な発話、直接引用、直接話法、能動発言体) の使用に関して様々な記述がなされている (Holt 1996; 1999, 2000, 2007; Wooffitt 1992 [ウーフイット 1998]; Schegloff 2000; Haakana 2007; Stivers 2008)。本節では、特に本研究に関わりのある部分についてふれる。

まず、演技的な発話は、語りの中において、受け手を語り世界に引き込むことのできる方法であることが指摘されている。例えば、Holt (1996, 2000) では、direct reported speech の使用によって、実際の出来事の中で「何が」言われたのかだけでなく、「どのように」言われたのかを示すことができることが指摘されており、この点が重要である。そして、そうした語り手の発話によって、受け手が語られた出来事を評価する可能性を与えることができることがわかっている。例えば、語り手が演技的な発話を用いて、出来事を描写するとき、そこには一種の際立った一場面が提示される。場面がその場に提示されることによって、受け手はそれを実際に経験することを通し、笑いや、「すごい」「おもしろい」などと、評価を行うことが可能となる。そのとき、受け手は、語り手の発話の内容それ自体だけでなく、非明示的な要素であるプロソディなどのパラ言語的な要素も重要なリソースとして、発話を理解する。この点は日本語における引用研究においては、あまり重要視されてこなかった点である。

また、Wooffitt (1992) では科学的には説明がつかない超常現象のような不思議な体験を語る際の語り手の発話に注目した。その研究の中で、Wooffitt は、語り手が演技的な発話¹²を用いることによって、体験の「objectivity (客観性)」や「facticity (事実性)」を

¹² Wooffitt(1992[1998])は当該現象を reported speech (直接話法) と呼ばずに「active voices (能動発言体)」と呼んでいる (p. 177[p. 209-210])。その理由として、それが実際にその言葉通りに引用された可能性が低く、場合によっては皆無であると考えられるためである。つまり、相互行為の目的にとっては、時に実際には発言されていないこともあたかもそのように表現されることもあり、「直接話法」ということばで限定するのは適切ではないと考えているためである。このことは、当該現象をセリフ発話と呼ぶ本稿の立場と一致している。このことは、第2章でもふれた。

示すことができることを指摘している。Wooffittの研究で扱われる超常現象を語ることは、「幽霊を見た」とか「人が誰もいないのに、突然ドアがあいた」といった、本当であるかどうか疑わしい出来事を語るものである。そうした通常信じられにくいようなことを語ることは、嘘をつくことと紙一重である。そのため、その語り手に対する他の参与者からの信頼性の観点からすると、語ることによって、語り手自身の立場を危うくする可能性を持つ。そのため、語り手は、その語り手が他の参与者に「本当のことである」と理解してもらうために、慎重に語りを構成する必要性に迫られる。その際、語り手は語りの中で出来事の超常性を明示することなく、しかし、それが単なる想像ではなく、実際に起こった超常現象であることをいくつかの方法を用いてほめめかす。その一つの方法が、演技的な発話であるという。例えば、ある体験を語り、それに対する他者の反応を演技的な発話を用いて語る。それによって、現象が起こったその時、その場にいた他者にもそれが体験できるものとして存在していたことを客観的な形で示すことができる。そして、その現象が実際に起こったのだということを保証する。更に、ある現象がどのようなものであったかは、その体験の演技的な発話だけでなく、その直前の描写や、演技的な発話を枠付ける引用動詞などの付加によっても示すことができることが指摘されている (p. 217)。以下の事例を見てみる。

HD 208 話し手は、その一家を苦しめていた不思議な音について描写している

- 1 私の義理の兄は
- 2 この音に
- 3 もう本当にとってもいらついて
- 4 文句を言い始めたんです
- 5 なんだかんだと
- 6 そして大声で叫んだんです
- 7 「もうここから
- 8 出て行って
- 9 しばらくは
- 10 俺たちをそっとしておいてくれ」
- 11 みたいなことを

(ウーフィット (1998) p. 211 より引用)

この断片は、ある超常現象を体験した者が、霊能者に語っている場面である。この断片では、語り手が自らの恐怖体験を語るのではなく、「義理の兄」がそれをどのように体験したのかが描写されている。その際、語り手は演技的な発話（7～10行目）の内容や、そのプロソディなどによって、義理の兄によって、その恐怖の気持ちが「どのように」発せられたのかが描写する。また、このとき、語り手は、語り手以外の他者の様子を演技的な発話を用いて語る。それによって、その場にいた少なくとも語り手以外の一人（ここでは義理の兄）にとって、その現象が「そのような激しい反応を引き起こすようなものであった」（p. 121）ことが「客観的な事実」として聞かれることを可能にする。それに加え、直前の様々な描写によっても当該発話がどのようなものであったかが示されている。例えば、「文句を言い始めた」（4行目）と言う点に注目したい。この発話によって、次に発せられる発話が「文句」として語り手に理解されるべきだということが示される。加えて、「叫んだ」（6行目）ということばの選択にも注意したい。これにより、それが単に「言う」ことよりも一層激しいものとして理解すべきことが示唆される。このように、語り手は、その出来事が超常現象であることを最初から明言しない。語り手は、起こった出来事を描写する際に、演技的な発話それ自体の組み立てや、発話のプロソディ、それを枠付ける様々な描写の中に、それが超常的なものとして聞かれうることを埋め込む。それによって、語りの受け手が、語りを聞く中で実際にそれが異常なものであることを経験していく。その結果、（一見）客観的な形で、それが超常現象であったこととして受け手が理解することが可能になる。

このように、語りの中での演技的な発話が行われることは、単に語りを生き生きとした描写にしたり、会話を楽しいものにするだけではない。語り手独自の体験を語るという行為において、語り手が直面する相互行為上の様々な仕事を成し遂げる一つの方法として利用されている。以下では、こうした分析を参考にしながら、受け手のセリフ発話による参入が、どのような相互行為上の機能を果たすために用いられているのかを念頭におき、分析を行う。

3.3.2. 語り手と同じ立場から参入する「セリフ発話」

本節で分析する事例は、語り手が物語を語る中で演技的な発話を行い、その後、受け手が語り手が演じる登場人物と同じ立場になりきり、セリフ発話で参入する。これは、筆者

が収集したセリフ発話の事例のうち、最も多い受け手の参入のパターンである。このとき、セリフ発話は、語り手の演技的な発話にパラレルなものまたは、語り手の演技的な発話に接続可能な発話として聞かれることが多い。まず、一つの事例について詳細に見てみよう。

断片(1)【Data4 転校生】(17行目の「永積さん」はDの名前)

- 15 D: だから私がちょっと違うことをやると[:
16 E: [ん::
17 D: なんか::(.)永積さんて(.)ね::
18 D: 札幌から[来たしね::[みたいな h[hhhhhhhhhhhh
19 F: [.h.hhhhhhhhhhhhhhh[hhhhhhhhhhhh
20 C: [hhhhh [え:意外::
21→E: [hhhhh [しょうがない
22 E: ね[::みたいな hhhh
23 D: [ね::みたいな hhhh

この断片における語り手はDである。Dは小学校の時に札幌から函館に転校した際に、クラスメートから田舎者扱いをされたという出来事について語っている。この断片の前に、語り手は札幌から転校した際に方言の違いを理由に、クラスメートに田舎者扱いされたという別のエピソードを語っている。そのエピソードがこの断片の理解において重要である。なぜなら、一般的に考えて大都市「札幌」から来た者が「函館」で田舎者扱いされるといふのは理解しにくく、通常は逆だと考えられるからである。しかし、Dは「函館」のほうが「東京に近く札幌のほうが奥地」であるため転校先の函館で田舎者扱いされたと説明する。それに対し、参加者らは全員で笑うことで、その論理が笑うべき理不尽なものであることを示し合う。その後開始されるのがこの断片である。

まず、15行目でDは、「だから」で発話を導入する。それにより、これから語られることが、これまで述べた理不尽な論理を踏まえた何らかの結果や結論として聞くことができるものであることを示す。しかも、既に、田舎者扱いされたことが話題になっている環境の中で、「私がちょっと違うことをやると」と、改めて私の他の人とは「違う」行動を行うことが提示される。更に、Dは、「と」で音を引き延ばすことによって、次に何らかの結末が来ることを文法構造的にも投射する。こうした発話の構成の特徴から、この発話の次に来

るのは、こうした物語の何らかの結末が来うことが強い形で予測可能となる。

さて、17行目以降を見てみよう。語り手Dはクラスメートの自分に対する反応を演技的な発話を用いて示す(17~18行目)。それに対し、受け手らは笑いで反応を示す(19~21行目)。この時、受け手は「札幌から来た」と聞いた時点で、少なくとも笑いで反応を示すことができる程度に物語の内容を予測できていることを示している。注目すべきはその後に、受け手Eが「しょうがないね::みたいな」(21~22行目)と、セリフ発話を用いて反応をする点である。この発話は語り手の17~18行目の発話と同様、クラスメートの反応として聞かれる。具体的に見てみよう。

まず、同級生がクラスメートに向かって「しょうがない」と言うことは、転校生のDを「低く見る」ことや「あきらめ」の気持ちで見ているということを含んでいる。この発話を産出するには、受け手は少し前に提示された理不尽な論理の理解と、17~18行目の語り手の演技的な発話の音調や身体的動作を結びつけ、語り手が演技的な発話を用いてどのような情報を伝えようとしているのかを見つけ出さなければならない。具体的には、語り手の発話は「なんか」の後「名前+てね」の後に二回の間をおくことや、「なんか::」「ね::」で語尾を引き延ばす。これにより、発話の内容に関する、何らかの躊躇があることが示される。更に、次の「札幌から来たしね::」で演技がかった音調で「ね」に強勢を置き、視線をEに合わせながら首を右に傾ける。これらの振る舞いによって、Dがこれから語ることは「Dに対して直接的には言いにくいこと」であることが理解可能である。また、この「札幌から来たしね」の「来たし」は「来たから」というのと同様に、その後に「札幌から来た」ことを「理由」とする何らかの「帰結」が置かれることを、節間関係のレベルでも投射していると見ることができる。

更に、セリフ発話が物語の中のまさに「セリフ」として、つまり、語り手の生み出した語りの中の具体的状況において可能な発話として聞かれるためには、ただ単にことばを産出すればいいのではない。そのように聞かれるために、発話全体の組み立てにおいても調整が行われている。例えば、断片(1)において、セリフ発話は、語り手Dのクラスメートの発話(17~18D)の直後に置かれ、その際、語り手が用いた「~ね::みたいな」という形式が、一種のフォーマットとして用いられている。それにより、「ね::みたいな」に前接する「~」のみが、別のことばに置き換えられた発話、または並列された同種の発話として聞かれることが可能となる。実際に、このようなフォーマットの利用については、Ho1t(2007)の分析においても、先行する発話のフォーマットが利用されたり、音声的な特徴に共通点を持つ

て産出されていることが指摘されている。筆者の観察によると、日本語の事例の場合、特に、発話の末尾に置かれる終助詞や「みたいな」の付加が産出の際の、一つのフォーマットとして使われやすいように思われる¹³。

同様に、次の事例も見てみよう。以下の断片(2)は、AとBの二人の対面会話である。

断片(2)【Data1 帰る帰る】

- 01 B: そのお家は::¥その家:¥.h 特別じゃないと[思うんですね.=
02 A: [hh
03 B: =>でも私そうだ<クリスマスは:.h その↑年しかいなかったんです[よね.(.)
04 A: [.h ああ::
05 B: ↑最↑初の年しか(.)メキシコにはいなくて:
06 B: >それ以外<(.)基本的に帰っ[¥てき¥て(h)た(h)の(h)で:(h)h]
07 A: [hhhhhhhh] .h
08 B: 帰る帰る[とか()haha とつとと日本に帰る]((声を低くセリフがかって))
09 A: [hahahahahahahahaha]haha
10→A: あ(.)¥あんなスープ飲んでもられない¥[(hahahahaha)
((顔は笑っている))
11 B: [haha(いやいやいや)haha
12 B: 実家に[帰って-帰って来て[飲み明かしてる[だけだから
13 A: [.h.hhuhuhuhuhu[¥(そうですね)¥[HAHAHAHA
14 B: [¥何の意味も[ないんですけど¥]
15 A: [hahahaha [(結局)hahaha]
16 A: .h.h.h[.h.h .h .h]
17 B: [そうそうそうそうだそうだ]だから一年しかないのもそれは
18 A: ((大きく頷く))
19 B: ん:::=

この断片は、Bがメキシコ赴任中に経験したクリスマスの過ごし方について、一通り話し終えた直後に開始されている。1行目の「そのお家」とは、Bがクリスマスを過ごした家

¹³ このようなフォーマットの利用については、第5章でも述べる。

のことを指している。また、「特別じゃない」というのは、深夜にまで及ぶパーティーが特段その家庭が特別なわけではなく、メキシコでは一般的に行われていることだと思うという B の見解を述べている。従って、この 1 行目の発話は、クリスマスに関する B の具体的な経験の語りから、一歩外に出た語りのまとめ、つまり一つの区切りとして聞くことができる。ところが、B は数年赴任経験のあるメキシコにおいて、クリスマスを過ごした経験はその年のみであったことを即座に述べる。具体的には、1 行目の発話の完了可能点に至った直後に、間隙を入れずに発話を開始し（3 行目）、メキシコでのクリスマス体験は赴任した「最初の年」（5 行目）のみであったという情報を加える。その後、B は「それ以外基本的に帰って来てたので」と、最初の年以外は日本に帰国していたことを、笑えるものとして語る（6 行目）。それに対し、A も笑いで反応を示す。

その後の B の発話に注意してみよう。B は「帰る帰る」と語気を強め、「帰る」を二回繰り返して言う。加えて、短い笑いの後に、「とっとと日本に帰る」と声を低くし、セリフがかって発話する（8 行目）。この発話のうち、特に「とっとと」という発話の選択やその音調、顔の表情から、B がメキシコから一刻も早く日本に帰りたいという思いを吐露している発話として聞かれる。その時、B は、単に早く帰りたいということ子どもが駄々をこねて何かを切望するように表現することによって、メキシコにいたくない何らかの事情があるという含みをもたせて発話を構成する。このとき、B の発話には、「言う」や「思う」のような演技的な発話であることを言語的にマークする形式は伴っていない。しかし、こうした B の発話の音調と表情、発話の形式から、それが、セリフとして聞くことが可能となっている。実際に、この発話がどのように理解されたのかは、次の A の発話を見ることで明らかになる。

10 行目で A は「あ あんなスープ飲んでも飲んでも」と笑いながら言う。この時、A の発話は、単なるその場の A 自身の発話ではなく、直前に B が示した語りの具体的な状況の中のもう一つのあり得るべき発話、または B の発話に接続可能なセリフ発話として聞かれる。それは A の発話とともに、首を左右に降ることや、笑いを含みながら行うことによって、まともに聞くべきではないことに表されている。また、「あんなスープ」とはこの語りの直前に B が語ったメキシコでのクリスマスのエピソードと関連している点も重要である。実は、この断片の少し前、B は、クリスマスのパーティーで深夜にシメとして脂がたっぷり入った「こってりした」スープが出されたことを語っている。その際、B は、とてもじゃないけど自分は飲むことができなかつたと、そのスープを否定的なものとして語る。従って、この

「あんなスープ」とは実際にメキシコで B 自身が経験したスープを指示しており、本来 A が経験したものではないため「あんな」と指示することはできない。しかし、ここでは直前の B の発話に接続可能な発話の形式や位置に発話を置き、まさに B になりきることによって、A が実際に経験したかのように (B の立場に立って) 「あんなスープ」や「飲んでられない」と表現することが可能となっている。

更に、このとき A のこうした発話の組み立てにより、このセリフ発話は直前の B の発話に加えられるべき発話として構成されている。特にこの事例においては、B がクリスマスをメキシコから一刻も早く出て、正月を日本で過ごしたいと熱望していることの原因として聞かれる。つまり、B の「とっとと日本に帰る」という発話で示された「メキシコが嫌である／メキシコにいたくない」ことの原因を、A のセリフ発話によって、その詳細が具体的に示されているのである。それは、B が既に述べた出されたスープがひどいものであったというエピソードと、メキシコのクリスマス期間にはいつも日本に帰国していたという事実を受け手 A が結びつけることにより、S が帰国を熱望する理由を、詳細化した形で示すことを可能にしている¹⁴。

更に、次の事例も見ていただきたい。以下は由紀と愛子による電話会話である。由紀と愛子は共にアメリカの大学に通う大学生である。

断片(3) 【CallFriend 1722】

- 11 由紀: 最初アシかと思ってたんだけど hh[hh
12 愛子: [hh
13 由紀: ママが(.)代償高くななんいうちにやめなさいよあなた h[hhhhh
14 愛子: [hhhhhhh
15 由紀: えっ.h
16→愛子: hhhhh でも好きになっちゃったし[::みたいな
17 由紀: [い::もう-
18 由紀: もうこっちのもんだし[hhh
19 愛子: [hhhhh

¹⁴ しかし、この断片においては、この後の 10 行目以降の B の反応から、この A の詳細化が、B にとっては予想外の「行き過ぎたもの」として扱われる。つまり、実際にその詳細化は妥当なものとして扱われていないように見える。ただし、重要なことは、10 行目のこの時点までで A がそのように解釈していることを示していることであり、B が「いやいやいや」と言わなければならないことは、まさに B のセリフ発話が直前の語りに対する理解表示であるということを裏づけている。

20 愛子: .h いいなあ::[:

21 由紀: [うん

22 (1.0)

由紀は恋人について語っている。11 行目で「最初足かと思ってたんだけど」と由紀の恋人に対する見解を示す。由紀は、恋人と交際を開始した当初、その彼を単に車で送り迎えをしてくれる便利な男性(=「アシ」としか思っていなかったことを明かす。続く 12 行目で、「代償高くななんいうちにやめなさいよあなた」と、そのような不当な付き合いをやめるよう、母親から忠告を受けていたことを明かす。まず、この発話の組み立てに注意したい。由紀は発話を「ママが」で開始し、「代償」から始まる発話がだれによるものであったかを明確に示している。また、通常、日本語においては対等な関係にある現在の話し相手に対して使うことのない、「あなた」という二人称を用いる。この「あなた」が指すのは、由紀が語る語りの中の由紀自身である。更に、このとき、「やめなさいよ」という命令形の使用と「あなた」により、この発話を、母親が由紀に対して行った忠告として聞くことが示される。このことは、15 行目の更なる由紀の発話を通して、より明確になる。15 行目の「えっ」という発話は、今ここでの愛子とのやり取りの中で何かに驚いてなされた反応ではなく、直前の 13 行目で由紀自身が報告した母親の忠告に対する反応として聞かれる。つまり、由紀の戸惑い(「えっ」)を示した発話である。この由紀の発話によって、由紀の交際相手との関係に対する思いが、端的に示されている。つまり、母親の忠告をすぐには受け入れられないことが示されている。更に、この時「えっ」という発話は、セリフであることを明示するような「って言って」とか「みたいな」という形式を一切伴っていない。にも関わらず、今・ここでの由紀自身の声ではなく、物語の中の演技的な発話であるものとして愛子に理解されている。この点が重要である。なぜ、愛子は由紀の発話が、演技的な発話であることが理解可能となったのであろうか。それは、「えっ」が演技的な発話として理解可能なのは、由紀が演技がかって発話しているという発話の音声的特徴に加え、13 行目の発話と隣接ペアをなすように聞かれる位置で産出されているためだと考えられる。つまり、ここでは「母親の忠告」—「娘の反応」の一人芝居的なやり取りのセットが提示されており、このセット自体が、語り手による語りの具体的状況として提示されているのである。

注目したいのは、その次の愛子のセリフ発話である。愛子は、「でも好きになっちゃった

し:」(16行目)と発話する。この発話は、直前の由紀の「えっ」と同様、「母親の忠告」に対する由紀の正直な想いの吐露として聞くことができる。このとき、愛子のセリフ発話が、直前の語り手が演じたのと同じ、セリフ発話として発せられていることは、次のような発話の産出の際の工夫による。第一に、その発話は、まさに母親の忠告に対する「応答」として聞くことが可能な、由紀の発話の直後の位置に置かれている。第二に、その際、愛子はセリフ発話を発する前に(由紀と同様)笑いによって、それがまともに聞くべき発話ではないことを示し、その上で「でも」から開始する。それによって、当該発話を前の発話と何らかの繋がりのある発話として聞くことを示している。第三に、愛子は声色を変えて発話することにより、現在の愛子自身の発話のモードとは異なる発話であることを示している。その際、愛子は特に「し:」と語尾を引き延ばすことにより、愛子の通常の話ことばとは異なったモードとは異なる、まるで女子高生が話すような音調で演技的に発話する。第四に、「みたいな」が用いられる。それにより、当該発話がセリフであることが遡及的に示されている。

以上を整理すると、受け手のセリフ発話による参入は次のように為されている。まず、本来の語り手である由紀が物語の語りの中の具体的状況を、「母親の忠告」と「由紀自身の反応」という独り芝居のような形で反応示す。続いて、物語の受け手である愛子は、その独り芝居、特に直前の語り手のキャラクターを引き継ぎ、参入する。それにより、愛子のセリフ発話は、語り手が報告した由紀自身(=娘)の反応を言いかえる、または由紀の反応に続くようなデザインで参入しているように聞かれることが可能となる。更に重要なことは、このとき受け手は由紀が発した「えっ」という一言だけでは明示されていない、重要な情報を盛り込んだ形でセリフ発話を組み立てているという点である。母親の忠告に対し、「えっ」というのは、母親の忠告に対する修復(例えば、ことばが聞き取れない)や、単に驚きを示す発話として理解することも可能である。しかし、実際には由紀は「えっ」と言うことで、母親の忠告に対して「とぼける」ことをしており、それによって「恋人と別れる気はない」という重要な点が示されているように思われる。受け手のセリフ発話には、こうした由紀が示した反応の中で言語的には明示されていない由紀の「本音」を詳細化して示す働きがある。具体的には、愛子の16行目の発話によって、由紀がなぜその彼との付き合いをやめる気がないかの理由が示されている。それに対して、実際に、17行目で由紀は愛子の発話を一瞬「い」で引き取り、即座に「もうこっちのもんだし」と愛子が明確にした「恋人と別れる気はない」という語りの焦点となる理由を承認している。それが

承認であることは、由紀の発話が、愛子のセリフ発話と同様、語尾を「し」にすることで形式が揃えられていることから確認できる。ここまでで見てきた事例におけるやり取りを、整理のために図に示すと以下のようなになる。

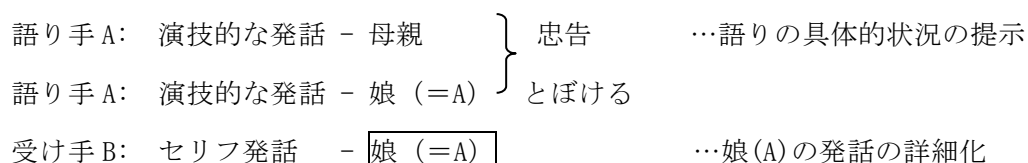


図2 発話の連鎖構造の整理

以上、3つの事例を見てきた。このように、受け手の参入の位置と発話デザインは、物語の全体的な構造と、今語られている語り手の発話の局所的な構造を受け手が詳細に分析することによって、適切に選択される。これらの参入の際の調整に加え、受け手のセリフ発話の内容は、受け手が単に笑いで反応を示すことや、語り手の演技的な発話を単に模倣しているのではない点でも重要である。つまり、断片(1)においては、語り手が「札幌からきたし::」で示したことの焦点は、「否定的な評価を受けた」ということにある。しかもそれは、一般常識的にはおかしい笑うべきものとして語られている。従って、同級生に向かって、「しょうがない」と言うことは、その笑うべき同級生の語り手自身を馬鹿にするように捉えていたという態度が、更に際立つようデザインされていると見ることができる。実際に、その後、語り手 D は 23 行目で「ねーみたいな」と E の発話を共に完結しており、D が E のセリフ発話を適切な理解の表示として扱っていることがわかる。また、断片(2)では、「とっとと日本に帰る」という B の発話の「真意」が受け手 A のセリフ発話によって、より詳細な形で示される。更に、断片(3)においても同様に、なぜ母親の忠告が受け入れられないのかの理由にあたる「本音」が示されている。このように受け手は、単に発話を繰り返すのではなく、描写の焦点への理解の表示として、語り手の描写についてより詳細度の高い形で発話を再構成している。この時、受け手は、語り手が語った出来事が単に「分かる」というだけではなく、どのように分かっているのかを実証的に示しつつ、積極的に物語の構築にも貢献している。

3.3.3. 語り手の相手役になりきる「セリフ発話」

これまで見てきたデータにおいては、語り手がセリフ発話で物語の中の具体的状況を提示した際、受け手は基本的にはその発話と同様の立場、もしくは同じ登場人物の視点からセリフ発話を構成している事例であった。それは、語り手の発話と内容と形式がパラレルなものであり、語り手の発話を更に詳細化するという点で、語りの構築に貢献を果たしているものであった。一方、本節では、参入する受け手のセリフ発話が、直前に語り手が演じたセリフ発話に対する応答として聞かれるように構成されているものである。

以下の断片(4)は、すず、孝子、由衣、五月の四人で話している場面である¹⁵。ここでは特に、すずが出産の経験について語っている。その中で、すずは長い陣痛を経て急遽帝王切開をすることが決まったことについて言及する。この断片の前に、孝子が帝王切開になるまでは、「普通に産む」予定だったのかを問うと、すずは、その予定であったと言う。それに対し、孝子は帝王切開に決まるまでにどれぐらい時間があつたのかと更に問い、すずは病院に行ってから、帝王切開の判断がくだされるまでの経緯を説明し始める。すずは、深夜0時に破水し、病院へ行ったが陣痛がなく、朝になってしまったことを語る。更に、朝になっても「そこそこ」しか陣痛がこない。そのため、医者が状態によっては、帝王切開になる可能性を示唆し、投薬がなされたことを報告する。そして、「昼ぐらいから」二分かきの陣痛が「延々と」続くも、結局感覚は縮まらなかったことを報告する。以下の断片は、そうした長い経過を経た後に、帝王切開に決まったことが告げられる場面である。

断片(4)【Data12 帝王切開】

- 01 すず： だから無駄に回数(.)だけは[陣痛
 02 孝子： [いや[:わあ::
 03 由衣： [ああ::
 04 五月： [本当
 05 すず： で4時ぐらいに(.)°駄目だねって°hhh[hh[h
 06 孝子： [は[あ::
 07 五月： [大変だっ[たね:
 08→孝子： [だったら
 09→孝子： 早[く<°ゆってよ°>][()
 10 由衣： [それって朝?][夕方? =

¹⁵ 実際のこの場面には、五月の2歳の娘と、すずの生後半年の息子もいる。ただし、この断片の中では、特に声を発していない。

1行目の「無駄に回数だけは陣痛」というのは、陣痛がとにかく長かったことを示している。それに対し、受け手らは全員、驚きや納得を示す(2~4行目)。その後、すずは「で」で発話を開始することにより、陣痛が長かったことの結果として、「4時ぐらいに駄目だね」(5行目)と医者が結論付けたことを報告する。この時、すずは「駄目だね」の前にポーズを置き、更に小声で発話する。それにより、この発話は、医者が言いにくいことをすずに向けて発したように聞かれる。また、この時「駄目」で示されることは、ここまでの語りの流れから考えて、通常の出産が困難な状況であり、帝王切開になることを意味している。それに対し、実際に孝子は「はあ::」(6行目)と深いため息をつく。それによって、医者が出した結論が、孝子によって、少なくとも喜ぶべきことではないものとして理解されていることが示されている。一方、五月は「大変だったね」(7行目)と、出産までに長い時間を要したすずの状況に対する同情を示す。注目したいのは、その直後の孝子のセリフ発話である。

孝子は「だったら早くゆってよ」(8~9行目)と発話する。この孝子の発話は、今ここで孝子が他の参加者に対して、発しているのではない。あくまでも、直前のすずが示した語りの具体的状況の中の医者の発話に対する反応として聞かれる。それは、孝子の発話がすずの発話の後に置かれるという位置的な特徴と、発話の組み立てによって示されている。孝子は、顔をすずから背けつつ、「だったら」の「だ」の語気を強め、「~てよ」と何かを強く求める形式を用いて発話する。この発話がその場の孝子自身の声ではなく、セリフ発話として他の参加者によっても理解されていることは、孝子の発話が字義的に示す求めに対する受諾や拒否はなされないことが示している。つまり、孝子の発話は、「4時ぐらいに」(5行目)でくださった帝王切開の結論に対する「もっと早く決断してほしかった」といった医者、または置かれた状況に対する不満の吐露として理解されている¹⁶。

この時、受け手がセリフ発話によってやっていることは、単に語り手が提示した演技的な発話に対する理解を示すことだけではない。この断片において、受け手の孝子は、すずが示した演技的な発話に対し、どのように応答しうるのか、すずの態度に寄り添う形で反応を構成している。その時、この断片の最初に「辛かった経験」としてこの語りが開始されていることは重要である。しかし、帝王切開という結論に至るまで要した時間が、どのようなものとして語り手に理解されているのかは言語的には未だ明確にされていない。そ

¹⁶ この反応は、既に6行目で孝子自身が「はあ::」によって示した気持ちとも重なっている。

のような状況において、出産経験のない孝子は、語りの全体の構造と内容を参照し、更に孝子が医者が発話をどのように組み立てるかに敏感に反応することによって、それが「否定的にとらえるべき」ことを理解する。そして、すずの発話に対する的確な応答として聞かれ得る形式を用いて発話を組み立てる。従って、この発話によって、第一に、語りそれ自体の展開が進められる。第二に、受け手独自の発話を組み立てることによって、直前までの語りへの詳細な理解が実証的に示される。第三に、語り手が言語的には未だ明示していない、医者報告に対して語り手がどのように捉えたかの態度を、受け手のほうから明示化する。その時、受け手が語り手の立場に立って的確に態度を示すことができることは、そのように描写できるほどに、受け手が語りの内容を詳細に理解していることを示すことになる。

3.3.4. 小括

本節では、受け手によるセリフ発話が、語り手の演技的な発話に寄り添う形で、示されることにより、語りに対する強い理解を示す一つの方法であることを、いくつかの事例を通して見てきた。受け手は、語り手が演技的な発話によって提示した語りの具体的な状況を利用し、参入を行っていた。その参入の際に、受け手は、大きく二つのやり方で参入を実現していた。一つは、語り手の演技的な発話と平行な形で発話を組み立てることである。その際、受け手は、語り手の報告する出来事において、あり得るべきもう一つの発話、または、語り手の演技的な発話に接続可能な発話を自分なりに構成していた。もう一つは、語り手の演技的な発話の相手役になることによって行われていた。そうした参入においては特に、受け手の発話によって、語り自体の時間的経過の中での展開が前に進められることとなっていた。更に、最も重要なことは、いずれの場合においても、受け手のセリフ発話は、語り手の演技的な発話の単なる繰り返しではなく、受け手なりなことばで、よりその状況が際立つようなことばや形式を用いて、語りを再構成するものであることが明らかになった。

3.4. 語り手の「身体的動作」と受け手の「セリフ発話」による参入

前節では、語り手が示す語りの具体的な状況が、主に語り手の演技的な発話によって提示されている事例をみてきた。本章では、語り手の演技的な発話が見られないにも関わらず、受け手が的確に参入している事例を検討する。これらの事例から、語り手が示す具体的状

況が、語り手の演技的な発話だけによってなされるとは限らず、語り手の身体的動作や演技空間など、その場の相互行為における様々なリソース¹⁷が利用されることによって、示されることが明らかになる。そうした環境において、受け手は、語り手の物語の内容、発話と身体的動作や空間の利用等を結びつけ、語り手の発話や身体的動作が何を示しているのかを理解し、そうした語り手の振る舞いに沿った形で、発話を構成し参入する。

本節では、まず、語り手の身体的動作がリソースになっている事例を検討する(3.4.1)。もう一つは、語り手の身体的動作を通じた空間の利用がリソースになっている事例を検討する(3.4.2)。その後、本節で得られた知見を簡単にまとめ(3.4.3)、最後に、事例研究全体のまとめとして、特に本章で扱った現象がこれまでの先行研究とどのような関係にあり、受け手のセリフ発話によってなされていることが何であるかを明確にする(3.5)。

3.4.1. 語り手の身体的動作に声を付与する「セリフ発話」

以下は、G、H、I、Jの四人の対面会話である。この断片では、語り手Gが赤ちゃんの頃から、自分の体が大きかったことについて回顧している。

断片(5)【Data3 お医者さん】

- 01 G: だから子どもって健診ってある [じゃん
02 H: [うんある
03 G: [なんとか健診
04 J: [んんんん
05 I: [んん
06 G: あん時も(.)体重はかるときも(.)急成長しすぎ)
07 G: てるから
08 H: hh[h
09 G: [お医者さんが(.)三回ぐらい
10 G: 量りなおし[て((首を左右にかしげる))
11 J: [hhh[hhhh

¹⁷ 本研究において「リソース」とは、串田(2006a)の以下の意味で用いる。

「相互行為の中でさまざまな行為や活動を成し遂げるために利用可能で、かつ相手にとって観察可能な、言語的素材(語彙、統語構造、韻律)、発話に直接伴う非言語的素材(発話のテンポ、音の大きさ、音の長さ、声調、声質、間隙、吸気、呼気、発話の位置、など)、およびその他の身体的素材(視線、表情、頭部の向き、上体の向き、身振り、動作、など)への総称」(p. 53-54)

- 12 I: [hhh[hhhh
 13 H: [へえ:[:
 14→I: [これちげ::だろみたいな
 15 I: hhhhhhhh

この断片の前、体の大きい G の出生時の体重が、ごく通常のサイズであったことが報告されている。それに対し、I は、G の体がいつから大きくなったのかと尋ねる。すると、G は「生まれてすぐだよ」と答える。続いて、G は生まれてすぐ大きくなった理由として、赤ちゃんの頃の特技が「ミルクがぶ飲み」であったこと、隣の赤ちゃんからも「ミルクをもらおう」ほど食欲旺盛であったという二つのエピソードを語る。この断片は、その後開始される。従って、1 行目の「だから」は前節の見た断片(1)のデータと同様、これまで語られてきたことへの理解を前提とし、結論を導いているように聞かれる。つまり、「だから」により、これから語られることは「生まれてすぐに大きくなった」という大きな物語の結末に向かっていることが示される。そして、これまで語ってきた二つのエピソードが「生まれてすぐに大きくなった」ことの裏付けとしての位置付けを持つことになる。それに対し、H、J、I はあいづちで物語を先に進めるように反応する（2 行目、4 行目、5 行目）。

さて、6 行目以降を見てみよう。6 行目の「あん時」というのは、冒頭で語られた子どもの健診のことである。G はその健診において、「急成長しすぎてるから」（6～7 行目）と発話する。これは、そもそも、この物語が語られる契機となった「生まれてすぐ大きくなったこと」と呼応している。H は、この時点で小さく笑いを開始する（8 行目）。それにより、既に、物語が笑うべき局面にさしかかっていることを、理解していることを示す。その後、G は「お医者さんが三回ぐらい量りなおして」（9～10 行目）と、医者がどのような行動をとったかを報告する。それに対し、受け手らは、あいづちや笑いで物語が笑うべきものであることへの理解を示す（11～13 行目）。これにより、受け手らがこの時点で、G の物語が笑うべきものであり、更に、受け手が反応を示すことが、適切な物語上の位置でもあることを理解していることがわかる。一方、語り手にとっては、これらの「笑い」は「驚くべき面白い物語」に対する適切な反応として、理解可能である。その上で、I のセリフ発話が行われる（14 行目）。既に述べたように、ここまでの G の描写によって、既に物語のオチがどこにあり、何が笑うべきものかは予測可能になっている。その一方で、セリフ発話の直前、10G までで語り手は医者が三回体重を量りなおしたことを描写するのみで、断片(1)

～(4)のように演技的な発話で、具体的にその場でどのようなことが起こったか（起こりえたか）を示していない。では、受け手の「これちげ::だろ」という発話は、どのように産出されているのだろうか。この断片において、発話だけを見るならば、受け手によるセリフ発話の直前で、語り手が音声上語りを止めることによって、「文」が完結されないまま途切れているようにも見える。しかし、重要なのは、実際には語り手は身体的動作を用いて、語りを継続している、という点である。これは、受け手の発話がこの位置で産出される、一つの理由となる。詳細を見てみよう。

まず、Gは6行目の最初の間隔の直後、「体重」の「た」で両手を少し挙げ、赤ん坊を抱くような動作を開始する。その後「体重はかるときも(.)」(6行目)の小休止で両手を机においたまま止める。更に、「お医者さん」(9行目)で右手を挙げて、赤ん坊を抱く動作を行い、右手を上下に軽く揺らす。これは、赤ん坊の首を支える動作のように見える。重要なのは、その後の「お医者さんが」の後の小休止で、両手を一度机の上に置き(図3)、10行目「量りなおし」で両手を前に出し、まさに赤ちゃんを量りなおすような動作を行う点(図4)である。その後Gは、「量りなおして」の「て」で一旦手を机に置く。この時、既に述べたように、受け手らは笑いや納得を示す反応(11～13行目)によって、この物語が笑うべきものであることへの理解を示す。それに続き、Gは首を左右に傾げる演技を行う(10行目)(図5-1、2、3)。受け手Iのセリフ発話「これちげ::だろ」(14行目)が行われるのは、Gが右方向に首を傾げた(図5-2)直後である。

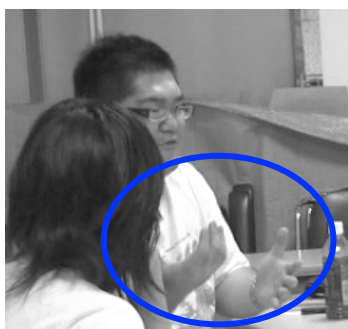


図3 09G「お医者さんが」



図4 10G「量りなおし」



図 5-1 首を傾げる



図 5-2 首を傾げる



図 5-3 首を傾げる

ここから明らかなのは、「これちげ::だろ」という発話は、I が単に G の物語を聞いて作り上げたイメージによる発話ではなく、今まさに G が体を使って演じる「医者」そのものの発話のように聞かれるようデザインされていることである。いわば、語り手の演技に声を付けるアフレコのようなデザインをとっている¹⁸。また、セリフ発話が、語り手の発話と統語的にも結びつくことが可能となるような位置と形式で産出されていることも重要である。つまり、前件の「お医者さんが三回ぐらい量りなおして」を、語り手自身が産出し、後件にあたる「これちげ::だろみたいな」を受け手が産出する。それにより、「お医者さんが三回ぐらい量りなおして、これちげーだろみたいな」と聞くことができるよう、組み立てられている¹⁹。更に、この時、語り手の発話の後件が開始されるべき位置で、語り手の身体的動作が行われることにより、音声上語りの進行性に滞りが生じているように見える。それにより、受け手の参入のための機会も生じ、受け手が途切れた「文」に接続可能な形で参入する。このことは、受け手が物語の展開における音声上の滞りを最小化し、語りを先に進めることにもなっている。その意味でも、物語構築への貢献になっている。

更に、セリフ発話のデザインの詳細を見てみる。I の「これちげ::だろみたいな」という発話は、まるで赤ん坊の体重を量る医者とその体重の変化に驚いているように聞かれる。しかし、「ちげ::だろ」は単に「ちがうでしょう」「ちがうかな」と言うのとは異なる。つまり、「ちげ::だろ」は、その場で医者が「実際に」発話したとは聞かれない、「本音の吐露」として産出されている。それにより、その体重の変化の異常性と医者の衝撃が、更に際立つこととなる。それは、語り手の描写における焦点が、より具体的になり、一言でそ

¹⁸ 発話と身体的動作の結びつきに関しては、Hayashi, Mori and Takagi (2002)、Hayashi (2003)、Hayashi (2005)、岩崎 (2008) の分析を参照のこと。

¹⁹ Lerner (1996) では TCU の完了可能点に至る前に、発話を開始した話者とは別の話者がターンに介入し、統語的につながりを持つ一つの発話を構築する現象を扱っている。日本語では Hayashi and Mori (1998)、Hayashi (2003)、串田 (2006a) が重要である。

の状況が理解できるような形に再構成されていることを表している。その意味でも、受け手が物語の構築に積極的に関わっていることが見て取れる。実際に、その後、語り手 G は頷くことを通して、受け手の貢献を受け入れることを示す。

このように、受け手は物語の展開と共に、語り手の発話の統語構造、身体的動作に敏感に反応する。これにより、受け手の発話は語り手が「今・ここ」で生み出した語りの中の具体的状況に適切な発話として聞かれることが可能となる。特に、この事例においては、語り手の身体的動作に依存させた形で発話を行う。それによって、受け手のセリフ発話があくまでも、身勝手な受け手の解釈ではなく、今・ここで示されている語りの一部としての貢献であることを示すことが可能となっている。

3.4.2. 語り手の演技空間を利用して参入する「セリフ発話」

次に、受け手の参入の際に、語り手の身体的動作そのものだけではなく、語り手の描写の中で示された空間が利用される事例を見てみる。以下は、冒頭で示したのと同じ事例である。

断片(6) 【Data1 アヒル】(一部、序章の断片(1)で提示)

- 01 A: で、.h もうす::ごい頑張って[作]って.h
 02 B: [ん:.]
 03 A: で:↑三十一日の(.)なん-午後かな?:.h あの::(.)どれがいい?とかって、
 04 B: んん
 05 A: .h<庭の>(.)アヒルを.h 指して(h)言(h)わ(h)れ(h)て(h)hehe
 06 A: 窓から¥こうどれがいい¥って ¥そのルームメイトにも¥hehe[he.h
 07 B: [はいはいはい=
 08 A: =¥どうしよとか思ったけど¥じゃあれって
 09 A: ゆっ¥たら¥hu.h.h[>¥なんか¥<(.)[°そう°((深い一度の頷き))
 10 B: [((ジェスチャー))
 11 A: ¥一時間後ぐらいに¥hu.hh.hh
 12 A: (>なんか<)首(h)を(h)[切(h)っ(h)た(h)の(h)]が(h):(h)hhhhh
 13 B: [HAHAHAHAHAHAHA
 14 A: ドンってキッチンにあ(h)っ(h)て(h).h.h.h.h

- 15→B: さっきさしたやつだ[みたいな hahahahahahaha]
- 16 A: [あれは(¥みたいな¥)hahaha]
- 17 A: .h¥すいませんすごい罪悪感が[(あった)¥]
- 18 B: [それアヒルなんですか]
- 19 A: アヒルです=
- 20 B: =へえ::::

ここでは A がある国に滞在中に参加した年末のパーティーでの出来事について語っている。A は、ルームメイトでパーティーの招待者でもある現地の友人から「どれがいい」(3行目)と「庭のアヒルを指して」(5行目)言われたことを報告する。このとき、A は、5行目の「庭の」の後の間隙から「指して言われて」(5行目)にかけて、A と B の間の後方の空間を「庭」に見立て、指さしを行いながら描写を行う(図6)。更に、A は、6行目の「窓からこうどれがいいって」で実際にアヒルを選ぶように、5行目で設定した空間を、更に利用する(図7、8)。例えばA は、「窓」で、A と B の後方に実際にある窓のほうに目を向け、何かをのぞくようにする(図7)。また、「こうどれがいい」で、やはり窓の方を指さして、何かを選ぶような振る舞いをする(図8)。そうした身体的動作により、今。この空間がまさに物語の一場面を構成するものとして、利用される。

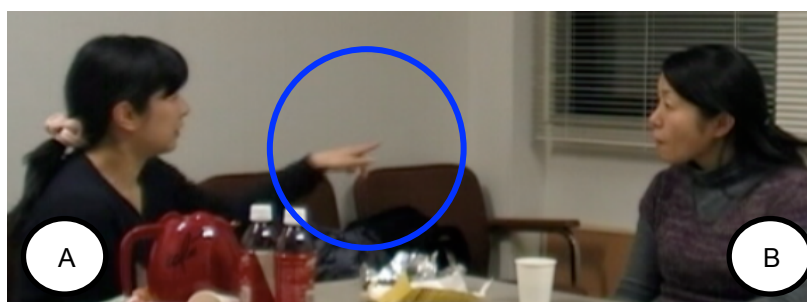


図6「庭の「(.)」」(5行目)



図7 「窓」から (6行目)



図8 「こう」どれがいい (6行目) 「どれがいい」で指と体を左右に動かす

こうしたAの実演に対し、Bは、「はいはいはい」(7行目)と言いながら数回の頷きを行う。この頷き以降、Bは10行目のジェスチャーまで小刻みの頷きを継続的に行う。このBの頷きは、単に聞いていることを示す相槌ではなく、Aがこれから何を言おうとしているのか、この語りのオチがどこに向かっているかを既に理解し始めていることを示しているように見える。それは、その後、庭のアヒルの中から「どうしよ」(8行目)と思いつつ、「じゃああれ」(8行目)と一匹選んだことを報告した(図9)後の、Bの振る舞いから明らかになる。

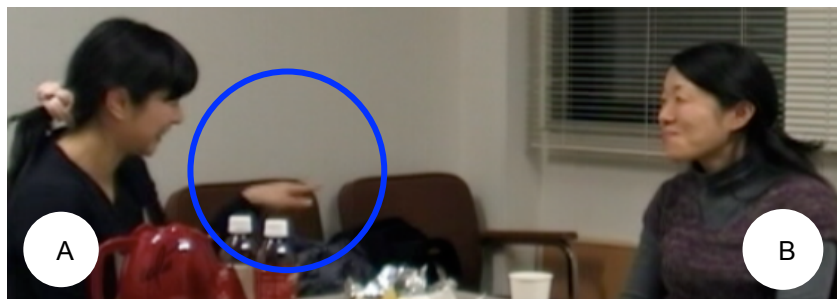


図9 「じゃあ」あれ (8行目)

B は 10 行目で、A が指したのと同じ空間に向かって、右手で何かを持ち上げるジェスチャーを行う(10 行目)。この動作は、直前に A がアヒルを指さした空間に向かって、片手である程度の重量のあるものを一気に持ち上げるとわかるやり方で行われる (図 10-1、2)。



図 10-1 「B のジェスチャー」 (10 行目)



図 10-2 「B のジェスチャー」

この時の受け手 B の動作は、まだ A が明確には語っていない物語上の展開と、その結末についての予測に関する重要な点を含んでいる。つまり、この時点で既に B は、アヒルを選んだ後に「(ペットとしてではなく) 食用としてのアヒルが捕らえられた」ことを予測できていることを示している。持ち上げているものが、「食用としてのアヒル」であることは、B が片手で握りこぶしを作り、何かを持ち上げる、そのやり方に端的に示されている (図 9-2)。それに対し A は、語りを継続しながら、「そう」と言いながら深く頷くことを通して、実際に B の理解が正しいことを承認する (11 行目)。

さて、11 行目以降を見てみよう。A は、A が選んだアヒルが、1 時間後に首が切られた状態でキッチンに置かれたことを報告する (11~14 行目)。それに対し、B は再び、笑いによって語りの受け手としての振る舞いを見せる (13 行目)。注目したいのは、次の 15 行目である。B は、右手で指をさしながら「さっき指したやつだみたいな」と発話する。この「さっき」というのは、アヒルがキッチンに出てきた「今」に対して、A がアヒルを指さした「さっき」である。また、「やつ」というのは「アヒル」である。つまり、A の物語の受け手である B が、15 行目では物語中の A になりきり、セリフを言うように発話している。この断片において、「さっき指したやつだ」というのは、前節で扱ったアフレコのような発話とは異なり、語り手の演技に声を付けるような発話にはなっていない。受け手の参入はどのようにして可能となったのだろうか。この事例においては、A と B の空間の利用がセリフ発話の出現と関わっている。以下詳細に見てみる。

A は、「一時間後ぐらいに」(11 行目) 首を切られたアヒルが「ドーンってキッチンにあ

って」(12 行目、14 行目) と、そのアヒルが食用として処理され、首を切られた状態で A の目の前に出されたことを語る。この時 A は「ド」に強いアクセントを置きながら、同時に両手で何かを持ったまま、それを目の前のテーブルに置く動作を行う(図 11)。この「ドーン」というオノマトペの使用と、身体的動作によって示されているものは、A と B にとって互いに認識可能なものである。それは、次の 15 行目の B のセリフ発話(図 12)によって明らかになる。

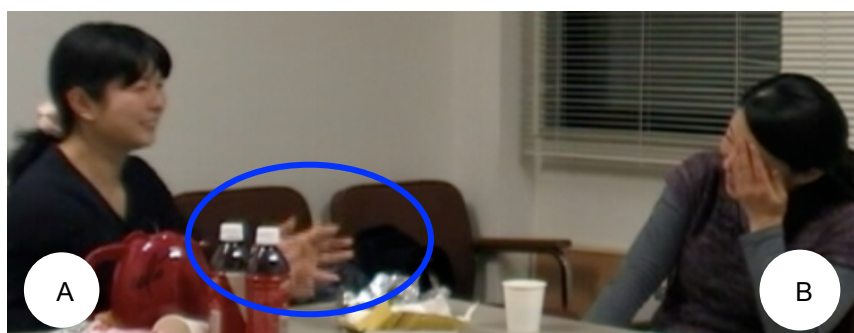


図 11 14A 「ドーン」

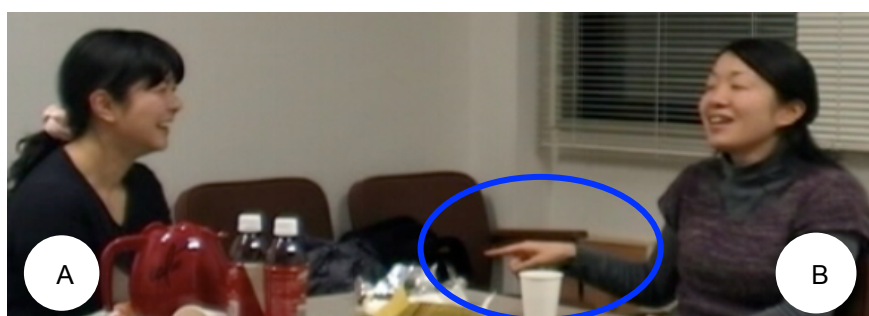


図 12 15B 「さっき指したやつだ」

まず、B は「さっき」で、少し前まで庭で生きていたアヒルがキッチンにあがったという時間的な近接性を示す。また、「指したやつ」で、自らが「指し」て選んだものがテーブルにあがったことを示す。加えて、このジェスチャーの際の B の表情は、軽く目を閉じ少しあごを引き、指さしを行う。それにより、まさに登場人物がショックを受けている様子を示しているように見える。これらの B の発話の連鎖上の位置、組み立て、そして身体的動作によって、A の「ドーンってキッチンにあって」の描写の焦点となる衝撃的な事実が理解されていることが表されている²⁰。更に重要なのは、B が 15 行目のセリフ発話に伴って、身

²⁰ また、衝撃的であることは、この後 A が「すみませんすごい罪悪感があった」(17 行目) と発話する点からも確認できる。

体的動作も行っている点である（図 12）。それにより、15 行目の発話は、14 行目の描写に関連付けて聞かれることが可能となる。具体的に見てみよう。B は「さっき指したやつだ」という発話の「さっき」で体を起こし、「指した」で右手で指さしを行う。その指が指し示すのは、まさにその直前に A が何かを置いた空間である。それは、提示された語りの具体的状況の中で置かれた「アヒル」に向けられていると見ることができる。つまり、B はセリフ発話を A の描写の直後に置くという「時間的な位置」の特徴と、A の身体的動作で設定された「空間的な位置」を利用することによって、B はセリフ発話と A の物語が関連づけて聞かれることを示す。更に、受け手は参入の際に断片(5)と同様に、語り手の発話の統語構造も利用する。それにより、「ドーンってキッチンにあって、さっき指したやつだみたいな」と、語り手の発話を前件とし、受け手がセリフ発話によって後件を完結させているものとして聞かれるよう発話を組み立てている。こうした受け手の参入の際の工夫により、ここでも、語り手の物語の描写の声の一部として聞かれることが可能となっている。実際に、その後、語り手 A は「あれは（みたいな）」と B のセリフ発話で指された同じ空間を指さしながら発話することを通して、受け手の貢献を承認している。このように、受け手は物語全体の構造を参照しながら、自らの理解を徐々に示しつつ、語り手の進行中の発話の統語構造と、語り手がある場に生み出した空間に沿う形でセリフ発話を産出しているのである。

3.4.3. 小括

本節で見た事例群は、受け手のセリフ発話による参入の直前、語り手は言語的には語りの具体的状況を提示することをしていないように見える。しかし、実際の会話場面を見てみると、語り手は直前の語りに伴う身体的動作や利用した空間を使って、語りの具体的状況をやはりその場に提示していた。そうした環境の中で、受け手は語り手の語りにおける発話の文法構造に接続可能な形で、発話を構成し受け手はセリフ発話による参入を可能にしていた。

3.5. まとめ

以上に見てきたように、セリフ発話による参入には、語り手の語りの全体的な構造に加え、発話の文法構造や身体的動作といった局所的な振る舞いがリソースとして利用されていた。そうした手がかりを基に、語り手の発話の産出途中においても、受け手は、その後の語りや発話の展開に関する予測可能性を高め、参入を可能にしていた。こうした展開の

予測性の高まりと、聞き手の参入について、C. Goodwin & M. H. Goodwin (1992) が次のような点を指摘している。C. Goodwin & M. H. Goodwin (1992) では、話し手が語る事柄に対する評価の産出の前に、聞き手が評価を開始する現象に注目している。具体的な例を見てみたい。

Dianne: Jeff made en asparagus pie

Dianne: It wz s::so[:goo:d.

→Clasia: [I love it.

(C. Goodwin & M. H. Goodwin 1992 より引用)

この断片の注目すべき点は、Dianne のアスパラガスパイの評価に関して、Clasia が「It was so good」の「good」という評価が産出される前に、「I love it」と評価を開始することである。これは、話し手のDianneが「good」を産出する前から、すでに評価という行為を開始していることを聞き手のClasiaが理解しているためであるという。このとき、聞き手が参照しているのは、第一に、表出する話し手の文の構造である。つまり、「good」を産出するには、「It was」まで発話された際に、次に投射されるのが形容詞であることを理解していなければならない。第二に、受け手は話し手が従事する活動がなんであるかも参照しているという。つまり、話し手は、ことばを用いて何をしようとしているのか（ここではアスパラガスパイに対する評価）を的確に把握しているからこそ、「good」が産出可能となる。これらが理解可能になり、初めて「I love it」が産出できているのであるというわけである。

以上の分析を、本研究のセリフ発話による参入の仕方にあてはめてみると、第一に受け手は、語り手の発話の文の構造を理解していなければならないことがわかる。つまり、受け手は、直前の語り手の発話が、次にどのような文法を用いて、どのような語彙を使って発話を行い得るのかを理解している必要がある。それは、例えば 3.3 で見た事例では、直前の語り手の発話に沿うよう発話の組み立てでセリフ発話が産出されていたことに現れている。また、3.4 で見てきた事例においては、受け手のセリフ発話が、直前の語り手の発話の構造に接続可能な形で、構成されていたことに現れている。特に断片(5)では「お医者さんが三回ぐらい量りなおして、これちげーだろみたいな」、断片(6)では「首を切ったのがドーンってキッチンにあって、さっきさしたやつだみたいな」というようにである。

第二に、受け手は語り手が語りにおいて、今何を行っているのかなんであるかも理解している必要がある。そのことは、受け手のセリフ発話の構成が、単に物語の理解に沿っているというだけではなく、語り手が従事する活動に沿う形で産出される必要があることを意味している。そのためには、受け手は、物語を語るという行為全体において、語り手が今どの段階にあるのか（例えばクライマックスなのか、前置きなのかなど）を注意深く観察し、いつ受け手である自分が参入することが適当なタイミングなのかを見分ける必要がある。なぜなら、もし、物語の冒頭や途中段階なら、次に語り手が何を言おうとしているのかが予測可能になったとしても、単に「うんうん」などと、物語を続けるよう促すことが適切になるかもしれない。また、物語のまだ早い段階で、オチがわかったとしても、それを言うてしまうことはなるべく避けられるべきであろう。適切な位置において参入するために、受け手は、語り手が演技的な発話や、身体的動作を用いて何を行おうとしているのかその行為を見分ける必要がある。その時、会話の中で行われる、語り手の身体的動作のうち、あるものは無意味な動きでかもしれない。また、あるものは語りに関わる重要なものかもしれない。受け手は、語りの流れとともに、今どのような局面にさしかかり、そして、語り手が身体的動作を使って何をしているのかを詳細に理解しなければならない。

このように、物語を語ることに於いて、受け手は単に受け取った情報を解読するだけの受け身の存在ではない。物語の受け手は、語りの構造や展開そのものに貢献を果たすより積極的な存在であることがわかる。

こうした聞き手の理解の示し方について、Sacks (1992) は興味深い二つの側面を指摘をしている。それは、理解を「主張」するやり方と、理解を「立証」するやり方である。前者は、笑うことや、「へえ～そうなんだ」「すごいね」のように納得を示すことでなされる。そのため、真にその経験を理解していなくとも可能だという意味で弱い理解の示し方である。一方、後者は、例えば第二の物語を語ることにように、語り手が語った経験と、自らが持つ経験の類似性を際立たせるやり方で、(それまでの) 受け手がもう一つの語りだと分かる形で新たに経験を提示することである。これは、語り手の語りを厳密に理解していないとできないという意味で、強い理解の示し方である。更に、Sacks (1992) はある語りの「直後」に別の話者が第二の物語を開始するとき、そのことは直前までの語りを理解したことを示すだけではなく、その理解に時間を要することがなかったことを示すため、一層強力な理解の示し方になると述べる。そして、そうした位置で参入できることは、「私とあなたの心がひとつになっている (my mind is with you)」ことを示す方法となる。

本研究で見てきたセリフ発話について、Sacks (1992) が示した理解を示すこうした方法に照らし合わせて考えてみる。受け手によるセリフ発話は、第二の物語のように語り手と同様の経験を持たない場合でも行われる。しかし、相互行為の中で示される語りの具体的状況を利用することによって、受け手がどのように語り手の描写を理解したのかを極めて詳細な形で実演的に示すことができる。また、セリフ発話は、その発話の構成上の特徴から、第二の物語ほど長いターンを必要とせず、また第二の物語を開始する機会が訪れるよりも早い連鎖上の位置で受け手が参入できる方法である。このことから、強力な形で物語の焦点を掴み、理解していることを「立証」する方法であると考えられる²¹。

²¹ 平本 (2011) は、受け手の「理解」に関して「わかる」という発話形式の相互行為上の利用について論じた。その中で、理解を示す「わかる」という形式が、他者の語りの中でなされることに着目する。平本は、Sacks (1992) の記述を踏まえ、語りが完全に終わった後ではなく、理解を示す何らかの叙述がなされたその直後に理解を提示することのほうが、より強い振る舞いになることを、語りの「進行性」との関係から論じている (平本 2011:165)。この点は、本研究の第5章で述べる単独で用いられるセリフ発話とも関連があると思われる。

第4章 物語を語る権利と参加の調整

4.1. はじめに

前章では、物語の受け手が単に受け取った情報を解読するだけの受け身の存在ではなく、語りの構造や展開そのものに貢献を果たすより積極的な存在であることが示された。更に、受け手によるセリフ発話という積極的な会話の参加の仕方は、受け手の語りの内容に対する強い理解を「主張」するだけでなく、「立証」する一つの方法にもなっていることがわかった。そして、その際、受け手の発話の組み立ては、単に語り手の発話を模倣したり、繰り返したりするのではない。受け手自身が語り手の発話の内容、統語構造、身体的な動作、そして物語の構成に敏感な形で、発話を創造的に組み立てるものでもあった。

その一方で、語り手が物語を語る一つの動機は、基本的にはその受け手がその「物語を知らない」という前提の上にあるだろう。つまり、人々は互いが持つ知識状態に差があるとき、それらの差を埋めることを動機として相互行為をすすめていく (Heritage 2012)。それならば、本研究で扱う受け手のこうした積極的な物語への貢献は、互いの知識がまさに同じであることを受け手の側から提示してしまうこととなる。そのことは、物語を語る事が開始された段階で語り手に優先的に語る権利が与えられるという観点から考えるならば、そのバランスを崩す危険性を孕んでいる可能性がある。

実際に、例えば、串田 (2006a) では第二の物語について、聞き手が「格上げされた報告という手続きをとることにより、第一の語り手が話題上の話し手という立場から降りる機会にもなる」(串田 2006a : 237) と述べ、語り手以上に情報を持つことを示すことが、語りにおける優先的な権利関係の交替を意味していることを指摘している。また、Maynard (2003) [メイナード (2004)] ではニュースを報告するという行為において、「送り届ける人は、受け取り手から見て、認識論上、この一世界—の中での—出来事に対して受け取る人以上に密に接近していると表示されるのであるが、(中略) 受け取る人は、いつもではないにしろたいていは、そうした[送り届け手が定めた]トーンに連携していくポジションにいる」(Maynard 2003 [メイナード 2004:92]) と述べ、ニュースを受け取る振舞いをする事が「受け手」であることを保証することになると述べる。

つまり、受け手が、語り手の描写の状況に即した形で、より具体的に語り手の物語に反応することは、ニュースを受け取る以上のことをしていることにもなる。その意味で、語り手が優先的に語る権利を保持しているならば、セリフ発話による参入は、その関係をゆるがす可能性があると考えられる。しかし、大抵、筆者が持つ事例群のやり取りの中でそうした受け手の参入が問題になることはないようである。つまり、受け手のセリフ発話による参入の後で、語り手が受け手に対して「そういう意味ではない」とか「違う」などと言って、受け手の理解を否定することはない。むしろ、多くの場合、語り手は受け手の参入に対して頷いて見せたり、「そう」と言うことで承認している。時に、語り手は、受け手の参入の際に用いた発話の構成と同様のフォーマットを用いて、更に演技的な発話を行うことさえある。

本章では、語り手と受け手の権利関係のバランスの維持という視点から、セリフ発話の産出の際、こうした権利関係のバランスがどのように対処されているかを明らかにする。

具体的には、受け手のセリフ発話による参入を含む連鎖において、語り手と受け手がそれぞれどのような配慮の元で、会話への参加を行っているのかを見ていく。まず、語り手に注目する(4.2)。その後、受け手に注目する(4.3)。最後にまとめとして、本章で述べたことが物語を語るという行為を考えたときにどのような行為を行っていることになるのか、その点について考察する(4.4)。

4.2. 語り手と受け手の参加の調整

4.2.1. 語り手の物語の「可視化」と語る権利の緩み

既に見てきたように、受け手のセリフ発話は、語り手の発話や身体的動作によって「語りの中の具体的状況」が生み出された後に置かれやすい。語りの中の具体的状況が産み出されることは、実は語る権利関係のバランスにおいて、語り手の語る権利に一種の緩みが生じる一つの機会となっていると考えられる。そして、そうした機会を利用して、受け手がセリフ発話で参入する。

Holt (1999) によると、語り手の直接引用によって受け手はその出来事に対する一種のアクセスが可能となり、物語に直接アクセスのないはずの受け手が、物語を「今・ここで」目撃することができるという。そして、受け手はその出来事に対する解釈、評価を自分自身で形成できる(Holt 1999:513)。例えば、AがBにTという人物に対する不満を伝える場面を想定する。この時、Aが「Tさんってとてもひどい人なんだ」と説明的に語るのではな

く、「T さんに「あんたって服のセンスないのね」と言われたんだ」と出来事を報告する形式を用いる。それにより、受け手 B の自らの「ひどい」といった評価を引き出すことが可能となる。同様に、Wooffitt (1992) においても述べられているように、語り手がある出来事の超常性を明示化することなく、客観的に描写をすることにより、受け手の側から「怖い」という反応を引き出すことが指摘されている。そして、このように語りの中に受け手を引き込むことがまさに、演技的な発話によってなされる一つの相互行為上の機能なのである。

これらの分析を本研究の分析に照らしてみると、語りの中の具体的状況の提示は、物語に直接アクセスがないはずの受け手が、物語を「今・ここで」目撃することが可能となる機会であると考えられる。特に、演技的な発話だけではなく、身体的動作や演技空間を使うことは、音声言語の点から言うと、語りの内容上、何も語られていないように見える。しかし、出来事をまさに「目撃」できるという点で、単に演技的な発話だけで示されるよりも、強い意味で、受け手が実際に出来事を疑似体験できる機会となる。つまり、語り手による語りの具体的状況の提示は、語り手が「自分の物語」として語っていた物語の一部を、受け手にも取り扱い可能なものとして、その場に「可視化」して提示することである。可視化された語り手の発話、身体的動作、空間は、その場の相互行為における共同の産物であるから、その後の相互行為の資源として利用可能になる。従って、語り手が語る権利を優先的に保持するならば、物語の可視化は語り手が語る権利を緩め、受け手にも同等に物語に対するアクセスを可能にする機会となると考えられる。

加えて、語り手の演技的な発話に「みたいな」という形式が付加されやすいことも、語る権利関係の引き下げにおける重要な役割を果たしていると考えられる。発話末の「みたいな」に関しては文法的、談話的な観点から既にその機能について検討されている (Suzuki 1995; 前田 2004; 加藤 2005; Maynard 2005; Fujii 2006; メイナード 2008; 甲田 2013)。意味機能について Fujii (2006) は「引用された発話や思考の確実性 (authenticity) に対する距離化 (distancing)」を示すとし、また Inamori (2011) は「思考の形で解釈や創造された quotation をマークする傾向がある」と述べる。更に、加藤 (2005) は、自然会話をデータとし、統語論、意味論、語用論的な立場から「Y みたいな」の基本的な機能として、「一例を挙げるならば、言わば Y だ」という姿勢で、先行談話において既出の概念 (X) の状態や程度性を叙述する機能を持つ」と述べている。また、それを裏付けるのは、「Y みたいな」が「X は Y みたいな感じだ」という構文を本来の統語的背景として持つことである

とする。更に、「みたいな」を使うことで特に付加される意味特徴について、森山（1995）は「みたいな」が持つ用法は「例示」であり、「下位範疇の具体例を取り上げて、それとの「類似」という観点で上位の範疇のものを限定したり、例として注釈的に示したりする」と言う。加藤はそれを受け、「みたいな」の前に話者の思考や発言が置かれる場合において、「発言の例示的な再現というニュアンスが強くなり、「Y みたいな」が「～とか言って」等と交換可能となる現象も説明できる」（p. 49）としている。

これらの記述に共通するのは、話者が「みたいな」という例を示す形式を用いることで、前接する発話を「距離のある発話」として提示することである。その結果、「ぼかす」「曖昧」「責任転嫁」といった解釈が生まれると考えられる。本研究では、語り手が「みたいな」を用いて「距離のある発話」として示すことが、語りの内容についての権限を緩め、受け手にとってもアクセスを可能にすることになると考える。この「距離のある発話」という言葉で示されることの重要な意味は、語り手がどのような立場から「～みたいな」を用いているのかを示すことにある。つまり、語り手は「～みたいな」を用いるとき、その演技的な発話を「現在の報告場面」の立場、いわば語りの外部からそのように感じたことを示す。それは、「過去の出来事の中」において（実際に）何を感じていたかを報告するのとは異なり、「現在の報告の場」において（出来事を振り返った時に）何を感じるかを示す方法のように思われる。例えば、前者は「～とあって」とか「～とあった」と行った過去形の形式が使われることが多い。そこから、当該発話が過去の時点で起こった一つの報告すべき事象として取り扱われていることがわかる。一方、語り手が演技的な発話を行うことは、その身体的動作を含めた実演によって語り手が物語の一部を可視化し、受け手が取り扱い可能にすることに加え、「みたいな」を付与することにより、それが語られた過去の出来事に対して、「現在の報告の場」から想いを描写しているように見える²²。そうした過去の出来事の場面から、現在の場に身を置くという段階に入っていることを示すことは、本来、語り手が持つ語る権利が維持された局面からの距離化が明示される。これは語り手が物語を語るという行為における権限の関係を積極的に引き下げ、受け手に参入の機会を与える手段となる。

このように、語り手が示す語りの具体的状況は、単に語りの内容を詳細化して伝えるためだけに用いられているのではない。相互行為の中で、受け手が語りの内容を理解していることを実演的に示す際の重要なリソースとして利用可能な形で、語り手が可視的に提示

²² そのため、「みたいな」の直後には受け手の参入がなされやすいように思われる。このことについては、第5章でも再度ふれる。

しているのである。

4.2.2. 受け手の語り手の権利に対する配慮

他方、受け手のセリフ発話はどうか。語る権利の緩みが生じたそうした環境において、受け手も参入のための様々な調整を行っている。例えば、既に見てきたように、受け手はその参入の位置とデザインを、語り手の発話の統語構造を利用したり、身体的動作に依存させたり、また空間を利用することで、あくまでも「語り手の物語の一部」として聞かれることに志向する。

また、発話のデザインが、単なる評価ではなくセリフ発話であることにも連鎖上の合理的な理由がある。もし、受け手による参入が物語に対する評価（例えば「すごいね」「面白い」）ならば、語り手の開始した発話を中断し、受け手が新たな発話を構成して参入することになり得る。しかし、受け手が語り手の発話の統語構造を利用し、積極的に介入することにより、結果的に、（セリフの上では）一人の登場人物の一つの発話として聞かれることが可能になる。

加えて、受け手が参入する場合に、やはり「みたいなの」が頻出する理由も説明できる。受け手は積極的に物語の構築に参入する際の手続きとして、自らの発話があくまでも直前の語り手の描写に対するあり得るべき発話の提示であり、それは「受け手」としての参入であることを示す。既に述べたように、「みたいなの」を用いることで、現在の報告場面から過去の出来事を描写する形式として理解される。また、同時に「みたいなの」の従来の意味機能を利用して、「例えばこんなセリフがあり得る」という形で候補を提示するように見せることができる。更に、直前で語り手が「みたいなの」を用いて一度演技的な発話を行っていれば、言語形式的に確実な方法で、自らの発話が「もう一つの例」であり、語り手の発話に依存した「二番手」であることを明示的に示すことができる。実際に、発話末の形式を合わせるやり方は、「みたいなの」だけではなく「しー」や終助詞の「ねー」のような発話の末尾を少し伸ばし、強調することによって、頻繁に利用されている。こうした工夫によって、受け手は物語への積極的な介入に伴う（語り手の権利に対する）リスクに対処しているのではないかと思われる。

更に、受け手がセリフ発話を用いて積極的に参入できる環境は、相互行為の中で語り手・受け手双方に認識可能なやり方で整えられていることも重要である。既に見てきたように、第3章の断片(1)(4)(5)は「だから」から開始される連鎖環境の中で、一度受け手の笑いな

どによる適切な反応が行われた後にセリフ発話が行われていた。一方、他の事例においては「だから」は使われていない。しかし、例えば第3章の断片(6)では、「アヒルを持ち上げる」身体的動作によって、受け手の物語の結末に関わる理解が一度示され、語り手の承認が行われ、受け手の笑いが行われた後に、セリフ発話が置かれていた。また、第3章の断片(2)(3)においても、セリフ発話の前に語り手と受け手双方が互いに声を重ねて笑い合うことが確認できる。そのことは、少なくともその時点までで、語り手と受け手の間に一定の理解が為されたことを意味する。そうした語りが一つの区切りを迎えていると見ることが出来る位置において、セリフ発話が行われる。この連鎖環境上の特徴は、会話参加者にとって、語りの展開の予測可能性が極めて高いとみなすことができる環境において、セリフ発話が産出されやすいことを示している。しかも、その環境が整えられるためには、単に受け手が認知的に「予測できる」だけでは十分でない。受け手の展開の予測可能性は、「語り手が観察可能な形」で相互行為を通して徐々に示される必要がある。このことから、次の二点がわかる。第一に、相互行為の中で、「受け手の積極的な貢献」が可能なことが会話参加者らによって交渉される中で、セリフ発話が生じている。第二に、参与者らが語ることに関する互いの権利関係に配慮する中で、ある発話がセリフ発話として適切に理解されることが可能になっている。

4.2.3. 小括

本節では、語り手と受け手が互いの参加の調整を、どのように行っているのかを明らかにした。受け手のセリフ発話による参入においては、語り手の側から語りの権利関係を緩ませることを様々な方法で示していた。その時、演技的な発話を用いたり、身体的動作を用いることで、語りの具体的状況を「その場に」可視化して示すことをしていた。また、発話の構成においても、演技的な発話を行うことに加え、発話末に「みたいな」を伴うことにより、当該発話が、語りの内部から抜け出した現在の報告場面の立場から見た「想い」として構成されていることを示した。そうした中で、受け手も語り手の語りの展開に敏感な形で、参入を行っていた。

特に本節では、発話末の「みたいな」が物語を語る権利関係維持のための一つのリソースとして使われていることを示した。この分析は、ある特定の言語形式が、特定のやり取りの中で繰り返し用いられているとき、それはどのような相互行為上の課題を成し遂げるための資源となっているのか、という観点からの記述である。つまり、「相互行為と文法

(Interaction and Grammar)」という研究領域に対する一つの貢献として位置付けられる。特に、本研究の立場の重要な点は、これまで言語学者らが明らかにしてきた発話末の「みたいな」の機能を踏まえた上で分析を行った点である。つまり、筆者は既に明らかにされている個々の言語学的な記述が、会話分析において全く無意味なものだとは考えておらず、むしろ、そうした記述は言語のある一つの側面を捉えていると考えている。しかしながら、実際のデータの中である言語形式の機能を明らかにしようとするとき、その形式の意味機能にだけとらわれるべきではなく、発話の連鎖上の位置や発話全体の構成を見る必要がある。その上で、ある特定の形式がどのような行為を行うために用いられているのかを考える必要がある。こうした観点から実際の相互行為の目的にとって、ある形式がどのようなリソースとして利用されているのかを明らかにすることは、実際のコミュニケーションにおけることばの使用を考える上で、非常に重要な観点であると思われる。

例えば、甲田（2013）は、語りにおける「みたいな」を伴う発話が語りの終結部に出現しやすいことについて、「前文脈の被修飾表現へと後続して付け足し的に結びつけること、形容が生き生きした言葉で完了したという意味的統一感に加え、「みたいな」が言いさしの形で言い切れ、下降調で表現が完結する」。それにより、当該発話が「語りの終結シグナルとして機能」（p. 440）し、これまでの聞き手が実質的発話を開始することを指摘している。

甲田が述べるように「みたいな」を伴う発話が語りの終結部に出現しやすいことは、須賀（2012）や本研究でも指摘されている。しかし、実際に重要なのは、「みたいな」それ自体の形式的機能によって、それが「終結」であることを示しているだけではないという点である。「みたいな」が語りの中の、どういった発話内容と共に使われているのかを見る必要がある。なぜなら、「みたいな」の前に置かれる発話は、単なる発話の引用というよりは、語り手が自身の思いを表現するのに用いられることが多い²³。そして、そうした、語りに対する思いの表示は、大抵、経験を語る際に時系列的な報告がなされた後に置かれやすい。従って、甲田が主張するように、「みたいな」それ自体が語りの「終結シグナル」として機能しているというよりは、むしろ語りの終結部に現れることの多い、自らの思いを表示する発話に「みたいな」が接続されやすいと考えるべきである。

更に、その後に、受け手の参入が行われやすいことも、単に「みたいな」によって表現が「言い切れ」たり、「下降調で表現が完結」しているためとは限らない。なぜなら、

²³ 「みたいな」が語り手が自身の思いを表現する際に用いられることは、須賀（2012）も指摘している。

筆者が持つデータにおいて、「みたいな」を用いた語り手の発話の後に受け手が参入しやすいことは認められるが、実際のデータを詳細に観察してみると、「みたいな」が言い切られるよりも前、むしろ「みたいな」に重なるようにして受け手が参入するが多い。それについても、やはり「みたいな」の前にどのような発話が置かれやすく、そうした発話によってそもそもどのようなことがなされているのかを検討する必要がある。従って、単に「みたいな」の存在によって「一定の表現が終えられたと感じられる」とするのは危険である。このようなことから、ある形式の用いられ方を記述しようとするとき、ある発話単独で抽出し、検討するのではなく、やはり連鎖の中で捉える必要があることがわかる。

4.3. 語りの展開を支えること (alignment) と態度に寄り添う (affiliation) こと

ここまでで、受け手のセリフ発話が、語り手の語りに対して理解を立証することのできる方法であり、物語の展開をも支える積極的な貢献を果たしていることを見てきた。その一方で、前節で見たように、受け手は、参入の際の様々な工夫によって、語る権利関係に対するやり繰りも行っていった。

本節では、そうした「語りに対する理解」と「権利関係の維持」という観点から再度、受け手によるセリフ発話によってなされていることを整理し、セリフ発話が、物語を語る場面において、alignment と affiliation を同時に為す合理的な方法であることを述べる。

Stivers (2008) は、物語を語る際の受け手の反応について、alignment と affiliation を区別して提示している。alignment は進行中の語る活動に対し、遮ったり、中断することなく語り手が優先的に保持するターンの維持を支える姿勢を示すことである。このことは、物語が一旦開始されると、その通常のターンテキングシステムは一時的に中断され、語り手のみが優先的にターンを保持し続けることができることと関連している。alignment はそうした語りの展開を支える構造に関わる事柄である。

一方、affiliation は alignment と異なっている。語り手は語ることを通して、その出来事がどのようなものとして経験されたのかといった態度 (stance) を直接的・間接的に²⁴示す。affiliation は、そうした態度に対する受け手のアクセスや理解を示すことであり、それを通して、受け手は、語り手のパースペクティブを支持することを示す。

このような視点から考えると、受け手のセリフ発話による参入は alignment と

²⁴ 語り手は、語りの中において様々なリソースを使って、自らの態度を示すことをしている。その方法には、次のようなものがあると Stivers (2008) では記述されている。

(a) the use of story preface (Jefferson, 1978; Sacks, 1974)、(b) "non-canonical information packaging" in the course of the telling、(c) prosody、(d) the context of the telling

affiliation を同時に行うことのできる非常に合理的な方法の一つとなっているように思われる。つまり、前者の alignment という観点から考えると、一見受け手の参入は語り手のターンを（一時的にせよ）取る行為のように見える。しかし、実際には受け手は語る・受けるという微妙なバランス関係の維持に志向し、その発話デザインと位置を調整し、語り手が提示した語りの一場面適切に聞かれるような形で参入していた。セリフ発話は、語り手側の視点から物語を眺め、実際に演じる形式をとった発話である。それによって、受け手は語り手が構成した「舞台場面」を維持し、または一緒に舞台上がり、演じる。その際の手段としてセリフ発話が利用されている。それは、単に笑うことのように「舞台」を鑑賞することとは異なる。また、「へえそうなんだ」「大変だったね」「面白いね」のように納得を示したり、語りのまとめとして聞かれるような評価を行うことによって、語り本体から、収束に持ち込む段階へと提案することとも異なる。セリフ発話による参入は、語り手の語りの展開自体を（例えば、本体から収束へ）勝手に先に進めることなく、しかし滞らせることもない。しかし、語り手と共に舞台上がることにより、語り手の語りの展開の「仕方」そのものに繊細な形で反応し、その語りの展開を支える一つの有効な方法として機能している。

一方、後者の affiliation という観点から考えると、セリフ発話の一つの特徴である「語り手の（実際には言っていないような）心の声の代弁」として聞かれやすいことそれ自体が、セリフ発話が語り手の出来事に対する態度（stance）への強い同調となっている。つまり、受け手は、セリフ発話によって、語り手の立場に立ってその気持ちを代弁する。その代弁は、語り手がその報告された出来事をどのようなものとして理解し語っているのかを受け手が理解していなければできない。更に重要なことは、語り手の立場に身をおいて（または、なりきって）、受け手の独自のことばでそうした態度を産出することによって、「わたしも同じように感じる」ことを実演的に示す点である。例えば、語り手がある出来事を「面白い笑うべきもの」として提示していれば、そのことがわかるように受け手は発話を組み立てる。また、「否定的なもの」として捉えていれば同様に「否定的なもの」とわかるような形で発話を構成する。ただし、その時、受け手は単にそれが「否定的」に聞かれることに志向するだけではなく、多くの場合否定的であることがより「詳細化」され、「際立つ」形で発話を再構成する。それにより、語り手の発話を単におうむ返しで産出しているのではなく、「実際に」わたしも感じているように／ことを示すことを可能にする。それ

により、その発話が「共感的」に聞かれることが可能になる²⁵。

このように、受け手がセリフ発話で参入することの意味は、単に語りの内容を表面的に理解したということに留まらない。受け手は、セリフ発話を構成する際に、語り全体の展開を支えながら、かつ語り手の出来事に対する態度 (stance) も理解していることを示す。セリフ発話はそうした行為なのである。

4.4. まとめ

物語を語るという行為において、基本的には、語り手が優先的に語る権利を有している。セリフ発話を用いて、物語により近い位置で受け手が反応を示すことは、ある意味で語り手の権利を侵すことを露呈させる危険性を孕んでいる。本章ではそうした権利関係における語り手と受け手の参加の調整の仕方について述べた。語り手は受け手が参入をしてもいいことを示すための様々な工夫を行う。他方、受け手も「受け手」としての貢献であることを示すための様々な調整を行う。これらの調整が行われていることは、第3章で述べたように、セリフ発話による参入が、まさに、物語の構築における積極的な貢献であることを裏付けているだろう。

それと同時に、受け手は単に物語の内容を「理解している」ことを示すだけでなく、語り手がやっていることをその場その場で分析し、的確に参入する。それにより、語りの展開そのものを支えると同時に、語り手の態度に寄り添うことを行うという仕事も行っていった。

²⁵ この点については、次章でも詳細を述べる。

第5章 「セリフ発話」連鎖における共感関係の構築

5.1. はじめに

前章までで、受け手の語りに対する積極的な貢献を見てきた。受け手のセリフ発話は、語りへの詳細な理解が達成されていることを単に示すだけでなく、語り手が言語的には示していない、その語りの焦点をより強い形で示していることがわかった。また、そうした受け手の行為を見ることにより、物語を語るという活動における受け手が、「聞いて理解するだけ」の単なる受け身の存在ではなく、積極的な意味で物語の構築に貢献を果たす存在であることも明らかになった。更に、受け手がセリフ発話という発話の構成で参入することが、特に、語り手の語るという活動という行為に対して、語りの展開を支えつつ、かつ語りで示されるその態度への強い同調を示すことをする合理的な方法にもなっていることがわかった。

本章では、こうした受け手によるセリフ発話以降の連鎖に目を向け、受け手のそうした貢献を（元の）語り手や他の受け手（ら）がどのように扱っているのかを記述していく。セリフ発話以降のやり取りも含めて見ることによって、セリフ発話やそこから開始される連鎖が、単に受け手が一方的に語り手に対する理解を示し、共感的に振る舞うだけではなく、語り手と受け手（ら）が互いに「分かり合える」ことを示すこと、つまり「共感を示し合う」機会となっていることを示す。

以下では、「冗談を語る中のセリフ発話」と、「不満を語る中のセリフ発話」という大きく二つの環境に分けて分析を行っていく。この二つの環境に限定して論じるのは、次の理由からである。筆者のこれまでの分析の中で、セリフ発話が出現する環境には、一つの特徴がある。それは、物語の内容の多くが、何らかの「驚いた体験を語る場面」か、その場面にいない第三者や出来事に対する「不満を述べる場面」であったという点である。また、いずれの場合にも、出来事が笑いを伴う冗談として語られていることが多い。特に、驚いた体験を報告する際に、それを面白いものとして語り、受け手も冗談として受け止める場面にセリフ発話は多く現れる。この特徴は、Holt (2000) によって語り手の reported speech が頻繁に利用される主要な相互行為環境が、物語を語る場面 (storytelling) であり (Holt

1996, 2000)、特に direct reported speech が頻出するのが、amusing story (驚いたことの語り) と complaints story (不満の語り) であることが報告されていることと一致している。Holt の分析では「語り手」の演技的な発話に焦点が当てられており、本研究では「受け手」が用いるセリフ発話という点で異なっている。しかし、既に見たように、受け手によるセリフ発話の出現には語り手の演技的な発話に関わっている。そのため、先行研究の指摘と本研究で得られているデータの特徴が重なることは妥当だと思われる。実際に、Holt (2007) では冗談の中における enactment について論じている。更に、「hypothetical discourse」について論じている Golato (2012) も、「fictitious humorous stories」(架空の面白い語り) における本研究で言うセリフ発話と重なる現象に注目している²⁶。従って、以下では初めに「会話の中で共感を経験すること」がそもそもどのようなことなのかについて本研究の考えを述べる。その上で、驚いた体験を冗談として語る場面において、どのようにしてその冗談が受け手によって理解され、その面白さが参与者双方にとって共有しうるものとして扱われて行くのかについて記述する (5.3)。次に、不満を言う場面におけるいくつかの事例を検討する。ここでは、語りの中で不満を述べるという行為自体の複雑さにかんして敏感な形で、受け手が参入し、その際に受け手がそうした語り手の態度を共有できることを示すためにセリフ発話が用いられていることが明らかになる (5.4)。

5.2. 会話の中で共感を経験すること

語り手が雑談の中で他者に物語を語る時、それは単に出来事を淡々と報告するためだけに語っているのではない。このことは、本研究で得られたデータの特徴とセリフ発話の関係を考える際に非常に重要だと思われる。つまり、何かを語るからには、語り手は通常、語るに値するものであると受け手が認めるようなものを語らなければならない。その時、語り手は、出来事を報告することによって、少なくとも二つの課題を行っているように思われる。一つは、時系列で語る出来事そのものについて、何が起こったのか、どうしたのかの情報を提供することである。これは、単純な知識の問題と言えるかもしれない。もう一つは、語ることを通して語り手の出来事に対する驚きや不満という態度を示すことである。この時、語り手にとっては、実際には受け手がその出来事について単に理解するだけでなく、語り手が経験した驚きや不満を同じように感じてもらえるものか、もっと言え

²⁶ Golato では、立て続けに語りの受け手が、架空のやり取りを行う形で会話に参入してくる現象や、先行するターンへの反応において hypothetical discourse が産出される環境の一つとして不満に対する反応が指摘されており (p. 3, 32)、この点でも本研究の観点と類似している。

ば、共感してもらえかどうか重要な課題となる。実際に、語り手が語りを終えた時、語りの受け手は、それに対して驚きや同情、笑いといった反応を行う必要性にせまられ、語り手はそうした受け手の反応を探ることがわかっている (Jefferson 1978)。

第4章の最後で述べたように、セリフ発話によって受け手が示す「理解」といったとき、それは単に物語りの内容を理解していることだけではなく、語り手が語ろうとしているまさにその登場人物の(心の)声を代弁する。そのことは、語り手が報告する出来事に対する態度(笑えるものとして語っているとか、信じられないものとして語っている、不満として語っている等)に対して、受け手が寄り添う(affiliate)こともしている。そして、その後に、そうした受け手の反応を、更に語り手が承認するならば、語り手と受け手はまさに「同じ気持ちを共有している」ことをやり取りを通して実感することとなる。そうしたやり取りを通して示される、驚きや不満といった感情が、参与者間で互いに「分かり合える」ものとして実感されることが、雑談の中で語ることの重要な意味の一つであり、「共感する」ことを実際のやり取りを通してリアルに経験することであると思われる。つまり、本研究では、ごく一般的な意味で用いられる「分かり合う」「共感する」ということが、単に参与者らの「心の中」で経験されるだけではないと考える。その上で、本章では会話の参与者であれば誰もが経験する「分かり合う」「共感する」というそうした感覚が、会話のやり取りの中にどのように立ち現れ、我々が感じるものとして扱われていくのかを記述する²⁷。

5.3. 冗談を語る中の「セリフ発話」

本節では、語り手が驚いた経験について冗談として語る連鎖の中で、受け手によるセリフ発話が用いられている事例をとりあげる。特に、一度笑いや評価のような受け手の物語に対する適切な反応が生み出された後に、セリフ発話が置かれている連鎖に注目する。それにより、物語を語るという活動の後半で、セリフ発話によって特に何が行われているのかを示す(5.3.1)。そして、最終的には、受け手によるセリフ発話から開始される連鎖が、

²⁷ やり取りを通して実感される「共感」は、西阪他(2013)の著書の中でも一つのキーワードとして扱われている。その中で早野は、共感を「態度のすりあわせ」という観点から分析を行っている。早野の分析においては、ある話者がある出来事を「否定的なもの」として語り、その受け手が同様に否定的なものとして取り扱っていることを示すような「態度のすりあわせ」を行うことにより、共感を示すことになるとしている。本研究では特に不満の語り(5.4)において、この早野の研究が参考になる。ただし、本研究では、そうしたすりあわせの際に、セリフ発話を利用することによって受け手自身のことばで再構成されている点に特に注目する。そして、筆者が持つ事例においては、受け手自身が他者の態度と歩調を合わせるよりも、より積極的な形で「私を感じている」かのように(または、ものとして)そうした態度に寄り添っていることに焦点をあてて論じる。

物語の収束の手続きのための環境となりうることについて述べる (5.3.2)。

5.3.1. 冗談の拡張の契機としての「セリフ発話」

筆者の持つデータにおいて、受け手によるセリフ発話が行われる多くの場合が驚くべき出来事が笑えるものとして語られ、一度受け手による笑いが生み出された後の位置に多く見られる。本節では、そのような環境におけるセリフ発話の後の連鎖に注目する。それにより、物語を語るという活動の後半で何をしていることになるのかを明らかにする。以下の14行目の受け手のセリフ発話は、その後の物語の展開においてどのような相互行為上の役割を果たしているのだろうか。まず、20行目までに注目して見てみる。

断片(1) 【Data3 お医者さん】(第3章の断片(5)に16行目以降を加えた)

- 06 G: あん時も(.)体重はかるときも(.)急成長しすぎ)
- 07 G: てるから
- 08 H: hh[h
- 09 G: [お医者さんが(.)三回ぐらい
- 10 G: 量りなおし[て((首を左右にかしげる))
- 11 J: [hhh[hhhh
- 12 I: [hhh[hhhh
- 13 H: [へえ:[:]
- 14→I: [これちげ::だろみたいな
- 15 I: hhhhhhhh
- 16→H: h まじかよ[みみたいな hhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhh
- 17→J: [壊れてるんじゃないかみみたいな hhhhh
- 18 I: [hhhhh
- 19 H: [hhhhh
- 20 J: [hhhhh

まず注目したいのは、この断片において9~10行目のGの発話と身体的動作が、今語られている「健診場面における医者の驚き」という笑うべき物語のオチでもあるという点である。少なくとも、J、I、Hは笑ったり納得を示すことで何らかの反応が可能な位置として

認識していることを示している（11～13行目）。また、この反応は、笑うべき物語の連鎖における「適切な」一定の反応として理解可能である。それにも関わらず参入してくるのが、14行目のセリフ発話である。

このセリフ発話は、これまで見てきたように、語り手の描写に対する局所的な意味での理解を示す。それと同時に、物語が一旦収束に向かうように見える、このような連鎖上の位置に置かれるとき、更にもう一つの相互行為上の機能を果たしている。それは、語られた物語を再び取り上げ、更なる笑いの連鎖を生み出す契機ともなっているという点である。つまり、ここではまず物語が笑うべきものとして語られ、その反応として笑いが起こる。その後産出されるセリフ発話は、その笑うべき焦点を詳細化する形で再構成するものである。特に、この連鎖においては、14Iの発話を起点に、他の二人の受け手らもセリフ発話を用いて物語に参入する（16～17行目）。それによって、受け手全員で一斉に笑うより大きな機会が表出する（18～20行目）。更に、その時、参与者らは全員で同じ「セリフ発話+みたいな」というフォーマットを立て続けに使用し、発話を連発する。ここではGが演じる医者に合わせて受け手らが「例えばこんな感じ」というように、一言では言い表すことができない、「医者を感じたこと」の様々な笑えるパターンをそれぞれに提示するというをしている。その時、少なくともこの事例においては、それぞれのセリフ発話の内容に関してはほとんど意味的な差異がない。そのため、これらの連続する発話によって、参与者らが「同じタイミングで、同じことを感じた」ことを示すことを可能にしている²⁸。このように同じ形式が連続的に用いられる現象は、M. H. Goodwin (1990) において「format tying」という手続きとして記述がなされている。M. H. Goodwin は、同じ形式が繰り返し用いられることについて、単に同じことばが繰り返されているというだけでなく、一種の「型」を踏襲することで置き換えが行われる、音楽的な方法 (in an almost musical way) であると述べる。特に筆者の持つ、日本語の事例においては主に「みたいな」や、時に「～し」のような発話の末尾に置かれることが多い。そのため、いくつかの発話が間隙なく連続して置かれることにより、連鎖全体で韻が踏まれた一つのリズムが出来ているように聞こえる。

²⁸ 受け手が複数存在するこの断片においては参与者全員が同じ「医者」として適切な一言を加えている。ただし、詳細を見ると、セリフ発話の内容は微妙に異なっている。2番目の受け手であるHは語り手Gの動きに連動しているというよりは、Gを参照した14Iのセリフ発話のデザインに志向し、それに連動させているように聞かれる。この時Hは視線をIに送り確認を求めようとしており、直前のIに承認を求めようことに志向している。3番目のJの発話は更に複雑である。JはHと同様Iの発話に志向した「セリフ発話+みたいな」というデザインを使用している。しかし、Jの視線は直前の発話者Hではなく最初のセリフ発話の開始者Iに送られ、確認を求めようとしている。従って、JはHの直後に置かれるという位置的な特徴からHの発話と関連づけて聞かれることをしながらも、あくまでも最初のセリフ発話の開始者に志向したデザインをとっている。

また、こうした参与者同士で互いにリズムを合わせて同調させることについて、やまだ (2010) も述べている。やまだは、新生児が人の話しかけに対して同期した身体の動きを見せること (エントレイメント (entrainment)) について記述しており、こうした現象を、対人関係を表現する際の「気が合う」「テンポが合う」「うまが合う」といった人と人を「合わせる」ための、一番基本的なはたらきであることを指摘する (p. 45)。こうした指摘は、本研究の事例における、14 行目、16 行目、17 行目に見られる連鎖を通して、参与者らがお互いに「合う」感覚を生み出す機会となっていることを示唆している。

加えて、このとき重要なのは、G が受け手のセリフ発話に対して二度頷いて見せる点である。一度目の頷きは、14I の「みたいな」の位置で I と視線を合わせながら数回行われる。二度目は、16H の「みたいな」(17J「壊れて」) で H と視線を合わせながら、やはり数回行われる。この G の振る舞いから、受け手らが示したセリフ発話に対して、新たな情報を追加したり修正したりする必要がないことが示される。もしこの連鎖の途中で、語り手 G がセリフ発話の内容を否定したり、修正したりするならば、笑いの連鎖は中断され、再び語り手が受け手に物語を伝える行為に戻るることとなる。しかし、この断片における語り手の参加の仕方は、受け手の参入を受け入れ、承認することを示している。このことから、物語の一部を使い参与者が互いに同調し合っただけで笑いを生む連鎖は、語り手・受け手双方の調整の仕方により相互行為的に成し遂げられていることがわかる。

次に示す事例では、語り手がセリフ発話による参入を単に受け入れるだけでなく、語り手自らも、セリフ発話の繰り返しとわかるようなデザインで積極的に参入する。これは、受け手のセリフ発話による参入に対して、言語的な手段を用いて明確に承認することを通して、参与者が同じ感覚を共有することとなる。

断片(2) 【Data1 アヒル】 (=第3章 断片(6)で一部を提示)

- 14 A: ドーンってキッチンにあって hhhhhh
15→B: さっきさしたやつだ[みたいな hhhhhhhhhhhhhhhhh]
16→A: [あれは (みたいな) hhhhhhh]
17 A: すいませんすごい罪悪感があった
18 B: それアヒルなんですか
19 A: アヒルです
20 B: へ:::::

14 行目の語り手の説明と笑いによって、一旦物語のオチが理解され、物語が収束に向かうように見える。しかし、その直後、受け手のセリフ発話（15 行目）の「みたいな」に重なるようにして、再び語り手 A が「あれは（みたいな）」と発話する（16 行目）。そして、語り手と受け手が同時に笑う。その時、語り手 A によって次の三つの事が行われている。

第一に、A は、直前に産出された B のセリフ発話の最初の可能な完了点において、B の発話の続きとして聞かれるよう発話を組み立てている。つまり、「さっき指したやつだあれは」と一つの発話として、または、「同列に並べられるもう一つのあり得る発話」として聞くことが可能な形式と位置で参入している。第二に、直前で受け手がアヒルを「さっきさしたやつ」と表現したのに対し「あれ」という直示表現を用いたり、受け手が指した空間に視線を送り、軽く左手をあげる（図 1、図 1-1）。それにより、受け手の利用した語りの中の具体的状況を、「更に」語り手の側から利用している。第三に、語り手もまた笑いを伴うように発話を行っており、セリフ発話が冗談として構成されていることを受け止め、更なる笑いを生む発話として構成している。



図 1-1 A の左手

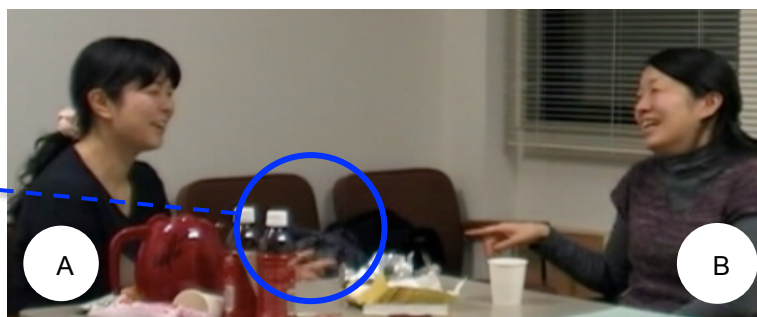


図 1 16A 「あれは(みたいな)」

加えて、ここで重要なことは、断片(1)の 14～20 行目、断片(2)の 15～16 行目で生み出された笑いが、語り手の（過去の）出来事にはではなく、今・ここで生み出された受け手のセリフ発話に対して向けられているという点である。それは、語り手によって物語が伝達され、笑いが生み出されるのとは異なっている。なぜなら、本来物語を知らなかった受け手がセリフ発話で参入することにより、その発話は、物語の一部の声として聞かれることに志向しながらも、あくまでもリアルタイムの時間の中で、今・ここで参与者全員が同時に体験できる発話という性質を持つ。そこで生み出された笑いは、今・ここでまさに起き

たことへの反応として構成される。そして、受け手や他の参加者らが全員で物語を冗談として扱えるほどに理解していることを示し合い、今・ここでの笑いを生み出すことは、物語を語る・受けるという行為から離れ、今・ここで同じ体験を共有する仲間としての感覚と言える。これが従来、「共感」と呼ばれてきた示し合いの一つの形であると考えられる。そして、物語に対する笑いの後に数回に渡るセリフ発話と笑いがセットとなった連鎖の表出が「盛り上がり」と我々が感じるものの一つの正体と考えられる。

それに加え、今語られた「面白い物語」が受け手の側から再び取り上げられ、再度詳細度を高めた笑いの機会が創られることにより、物語の面白さがより強い形で再び際立たされていることにも気づく。実際に、参加者が同時に笑うことで、より大きな笑いとなっていることがそれを示している。つまり、このことは単に語られた物語の面白さを、受け手が理解し、同調していることが示されているだけではない。また、単に「面白い」と感想を述べたり、笑うだけよりも強い意味を持つ。この「冗談の連鎖」の拡張は、物語が面白い「語るに値するものであった」ことを、受け手の側から例証する一つの手続きとなっていると見ることができる。

そのような意味で、セリフ発話は、語り手の描写の詳細度を高めるという局所的な点に対する、強調という仕事をしながら、ある特定の位置に適切に置かれるとき、物語を語るという活動自体の価値を引き上げるという意味での貢献も行うことがある。

5.3.2. 物語の収束を可能にする環境の提供

本節では、語り手によって冗談として物語が語られ、その後受け手によるセリフ発話によって連鎖が拡張されることにより、物語の連鎖そのものが収束に向かいやすいことを、事例を元に示す。実は、このことは、Holt(2007)において、enactment が冗談を拡張させ、その後冗談の連鎖が閉じられることが指摘されていることと重なっている。本節では、物語を語る環境において、セリフ発話から始まる連鎖の後に「なぜ語りが閉じられやすいのか」についても詳細な分析を試みる。

物語の語りが開始された時点において、物語を「知らないもの」として聞いていた受け手が、ある時点で「笑う」ことや納得を示すことによって、理解の表示を行う。また、既に見てきたように、セリフ発話を産出することで、その理解がよりの確なものであることを示す。このような受け手自身の反応間の微細な変化は、物語を「知らない」状態から「知っている」状態への認識の変化が「今まきに行われている」ことを相互行為を通して示し

- 24 J: [へえ::[::]
- 25 H: [そうなんだ::[:]
- 26 G: [だから俺小学校の時 180
- 27 G: センチいくと思ってたもん
- 28 H: ね::(.)それなら::
- 29 J: いま-今何センチ?
- 30 G: <ひゃくななじゅう>よんかご[ぐらい
- 31 J: [うんうんうん

既に確認したように、受け手によるセリフ発話が行われ（14行目、16行目、17行目）、それに対し、語り手の否定や修正が行われず、受け手らが一斉に笑う（18～20行目）。それにより、参加者らが語られた物語に対して、互いの知識状態に差がないことを互いに示し合う。実際に、その次の位置において、受け手Hが「尋常じゃない成長率だったんだね::」（21行目）とGの成長の速さに対する評価を行う。この時、Hが「成長率」ということばを用いているのは、この物語の全体の焦点がそもそも「生まれてすぐ大きくなったこと」であったことと、6行目の「急成長しすぎ（ぎ）てるから」に呼応している。そのため、21Hの評価は、今語られた物語のまとめの言葉として聞かれる。特に、この局面においては、直前でセリフ発話から開始される連鎖の拡張が起こり、新しい情報のやり取りがなされていない。つまり、それは、物語の時系列で出来事を語るという意味での展開に一種の滞りが起きていると見ることができる。そうした連鎖上の位置において、受け手が評価を行うことは、「受け手」の役割に志向しつつ、物語の出来事を語るという「本体」から「収束」の連鎖へ持ち込むという意味で、連鎖を先に進める合理的な方法にもなっている。

それに対し、Gも「もっ::すごい成長して」とHの評価を受け入れる。その後、受け手らが「へえ::[::]」「そうなんだ::」（23～25行目）と改めて物語全体に対する納得を示した後、Gは「だから～と思ってたもん」（26～27行目）と当時の思いを述べる。この発話は、今語られた「生まれてすぐ大きくなった」こと、つまり「急成長」と現実の相違に対する自分の思いである。このような物語の終盤に行われる「そのときの自分の思いへの言及」と、物語の前置きとの呼応は、物語が実質的に終わったことを強く示すため、この発話が物語の可能な完了点となる（西阪2008:307）。こうして物語の収束は成し遂げられる。

その一方で、物語（の本体）がまだ途中の場合、語り手は語り手が未だ継続段階であり、

収束に向かうわけではないことを、できるだけ早く示す必要にせまられると考えられる。実際に、受け手によるセリフ発話が行われ、語り手がそれをキャンセルするように重なって、セリフ発話で語りの一部を言い直すこともある。そして、その後語り手は、語りを継続したり、受け手のセリフ発話を「確認」として理解したことを示しつつ、語り（の本体）を前に進める。以下の断片を見てみよう。

断片(4)【Data4 ブーケトス】

- 21 E: ((後ろに下がる演技継続))[特になんか私ぐら
22 E: いの[年の[人たちはみんななんか
23 F: [.h.[hhhhhhhhhhhhhhhh
24 D: [hhhhhhhhhhhhhhhh
25 E: [((畏まる演技(1.0)[顔をうつむき困る演技))
26→D: [hhhhhhhhhhhhhhhh[↑え(.)だれ::?みたいな
27 F: [hhhhhhhhhhhhhhhh
28 D: hhh[hhhhhhhhhhhhhh
29 E: [ん独身?独身?ん:でもなんか
30 E: だまってれ[ば っか(0.8)()↑くし::
31 F: [hhhhhhhhhhhhhh
32 D: [hhhhhhhhhhhhhh
33 E: してなんか(.)ね:すごいあの::結婚した人が
34 E: 若かったから:あのお嫁さんが((語りが続く))

この断片では、Eがある結婚式に出席した際のブーケトスについて語っている。Eは会場で未婚の女性に、前に出てくるようにとアナウンスするという演出の際、なかなか前には出て行けないものだと語る。その後、Eは「特に」(21行目)「私ぐらいの年の人たちはみんな」(22行目)と女性の年代を限定する。それにより、前に出て行くことができないのは、単に「独身」であることだけではないことを示す。それに対し、受け手は笑いで反応を開始する(23行目、24行目)。その後、25行目でEは演技を開始する。この時、Eはうつむき視線を落とし、両手をひざにおき、首を左右に揺らす。それらの身体的動作により、「困っている」演技をする。それに対し、D、Fは笑いで反応をする(26行目、27行目)。セリ

フ発話は、その後Dによって行われる。Dは、Eの身体的動作に合わせるようにして、「↑え(.)だれ::?みたいな」と発話する。注目したいのは、その後の語り手Eの反応である。Eは「ん独身?独身?ん:でもなんかだまってればいっか」(29~30行目)と発話する。この発話はどのような発話か、詳細を見てみよう。

Eはこの時、Dのセリフ発話を受け止めてはいない。その理由は次の3点である。第一に、EはDとは視線を合わせることなく、また、自らの身体的な動作も途切れさせることなく、発話を継続している。第二に、Eの発話はDの発話とは形式が大きく異なっている。このことは、Eの発話が受け手Dのセリフ発話とは異なるものとして聞かれるようデザインされていることを示す。つまり、受け手の発話が「みたいな」によって、物語から一步はずれた冗談として扱われることを意図した例示であるならば、自らの発話は、物語のメインの展開にあることを主張することとなる。第三に、セリフ発話の内容においても、受け手のセリフ発話とは質的に異なっている。受け手が、「だれ::?」と言うことでアナウンスで呼ばれた人が自分ではないという反応をする。このことにより、ブーケトスのために前に出て行くことはできないということを示している。それに対し、語り手の発話においては、ブーケトスがすなわち「独身」であることを意味していることを明確にしている。つまり、この描写の焦点は、単にその場で「ブーケトスに行けない」ことではない。むしろ、「独身」であることであり、だからこそ「だまっている」ということにある。従って、受け手のセリフ発話をキャンセルし、語り手の動作に伴う、精確なセリフを自らやり直したのとして聞かれる。実際に、33行目以降で、Eは物語を継続する。それにより、語り手・受け手の理解が一致したものではないことを示している。

5.3.3. 小括

セリフ発話が、直前の発話に対する理解を立証する手続きの一つであることは、既に見た通りである。しかし、それは、ある特定の連鎖環境の中においては、単に理解を示す以上のことを行うことになる。本節では、冗談の連鎖の中にセリフ発話が現れるとき、その発話が、特に語り手が一度提示した冗談を更に拡張させ、更なる笑いを生む機会を創り出すこととなっていることを示した。特に物語りの終盤、オチがまさに実演で示された場合、そのオチを受け手が拡張することとなっていた。

5.4. 不満を語る中の「セリフ発話」

本節では、セリフ発話が観察されるもう一つの語りの環境である、不満を語る場面²⁹におけるセリフ発話の振る舞いと、その後の連鎖に注目して見ていく。以下では、まず、第2章で述べたように不満を語ることが相互行為的に成し遂げられるものであるという指摘を踏まえ、語り手がどのように不満をやり取りの中で表出し、それを受け手が受け止めて行くのかを詳述する。そうした中で、セリフ発話が語り手の語る出来事が不満であることに対するお墨付きを与える行為になっていることを指摘する(5.4.1)。その後、セリフ発話が単独で用いられるケースが、不満を語る中に多いことに注目する。語り全体においてそうしたセリフ発話がどのような位置に置かれるのか、そしてそうした形式を使って受け手が何を行っているのかについて論じる(5.4.2)。

5.4.1. 語り手の不満にお墨付きを与える「セリフ発話」

第2章で述べたように、語り手が不満を述べる際、受け手の反応を慎重に取り扱いつつ、徐々に、ある事柄(や人)に対する否定的な態度を明らかにしていく。一方、第4章で述べたように、受け手のセリフ発話によるこうした参入は、語り手の発話に対して単に(内容に対する)理解を示すだけでなく、どのように語り手の語りや直前の発話を理解したのか、その焦点を凝縮した形で発話を再構成する。そしてその際受け手が際立たせる焦点は「心の声」「本音の吐露」として示される。それは、別のことばで言い換えるならば、語り手がそこで示した出来事に対する態度に寄り添う(affiliate)ことであり、そうしたレベルで語りを理解していることを立証する手続きであった。このことは、例えば驚いた話を冗談として語る場面において、受け手がセリフ発話を用いて語り手が示した面白さを際立たせ、更なる笑いを産み出すことに現れていた。一方、不満を語る連鎖環境の中で受け手が語り手の態度に寄り添うというときはどうか。この時なされる受け手の参入は、単に面白さを際立たせることよりも受け手の貢献と言う意味で語り手にとって重要な意味を持つと考えられる。なぜなら、語り手が何らかの出来事や人に対して不満を表明することは、ある種モラルに反する事柄である。そのため、受け手がそうした態度に寄り添うことは語り手にとっては、単に更なる笑いを産み出すような発話をするのと比べて、語りを遂行する上で重要な意味を持つ。そしてそれは受け手にとってみても、笑いを産むことよりも社会的負荷の高いことである。なぜなら、受け手が自らがよく知らない(または経験のない)ことについて語り手と共に悪く言うことは、人としての良識を疑われかねないことと

²⁹ ここでは、語り手が出来事やその場にはいない人物を、否定的なものとして描写することを指している。

なる可能性を含んでいるからである。従って、語り手が不満を表出する際に、受け手の反応に即して慎重に行う一方で、受け手の側もそうした語り手の態度に寄り添えるかどうかを慎重に取り扱うものと考えられる。以下では、そうした語り手と受け手の不満の共有の過程が、互いの振る舞いの中で慎重に交渉されていることを示す。そうした中で、受け手のセリフ発話による参入が、語り手が示した不満に対して同じ気持ちになっていることを示す行為として機能していることを見ていく。そしてそれは不満であることにお墨付きを与える行為とでも呼ぶべき、語りの展開に関わる重要な要素として機能していることを示す。以下では、まず語り手の不満の表出の過程と、それが受け手によって主に笑いでのみ受け止められ、不満としての十分な支えが得られない過程を見ていく(5.4.1.1.)。その後、そうした不満に対する参与者間の交渉の過程を経て、受け手がセリフ発話で参入する様相を記述する(5.4.1.2.)。

5.4.1.1. 不満の表出と笑いによる受け止め

以下の断片は、Mが語り手で、HとTがその受け手である。Mはかつて滞在していたイスラム圏の国において、自身のアイメイクの薄さを指摘され、現地女性らにアイメイクをされた経験について述べている。その際、Mの語りの焦点となっていくのはMが現地女性らに「フィリピーナ」のように濃いアイメイクを勝手に「やられた」にも関わらず、現地女性らは賞賛するでも否定するでもなくMを「放置」したというエピソードである。つまり、Mは語りを通して現地女性らの自分に対する扱いのひどさに言及しているように見える。そしてそれは現地女性らに対する一種の不満の表出として聞かれる。しかしながら、一方で、語り手は笑いを含みながら笑える出来事としても語っており、受け手はそうした語り手の態度に寄り添う形で、一貫して笑いで反応を示し続ける。具体的に見てみよう。

断片(5) 【Data2 アイメイク】

- 01 M: h でもその:(.)uh ばっちりアイメイクを
 02 M: .h¥私が¥目力弱い弱いって言われて(h)=
 03 T: =HAHA[hahahahahahahahahahaha [HAHAhahahahaha.h.h
 04 M: [¥化粧してるのに¥化粧してないだろ[みたいに言われてh.h.h
 05 H: [((口に手をあてて笑う))
 06 M: .h 一回やら[れて:]

07 T: [.h]huhu

08 M: .hhu で やられて(.)↑お::みたいになるならまだいんですけど(0.5)

09→M: ん::>み(h)[た(h)い(h)な(h)<]

10 T: [H A H A H A H A] HAHAHA [ha ha ha]

11 H: [H A H A H A H A] HAHAHA [ha ha ha]

12→M: [自分で¥やっ]といて

13→M: みたい[な¥

14 T: [.hha.hha[.hha]hahahaha[hahahahahahahahaha

15 M: [HUHU]

16 H: [写真はありますか=

17 M: =ないです

18 H: え[え:::]:

19 M: [そんなとき女の人ばかりだった[から

20 H: [あ::そっ[か::

21 M: [ん:

この断片の冒頭で、自身のアイメイクについて現地女性らから「目力が弱い」(2行目)、「化粧してないだろ」(4行目)と言われ、メイクを「一回やられ」た(6行目)経験について語り始める。この時、Mは「ばっちりアイメイク」(1行目)とメイクの濃さを強調し、そうしたメイクを「やられた」という表現を用いる。それは「やってもらった」と言うのと異なり、当該出来事が喜ぶべきものではなかったことをあえて示しているように見える。また、「化粧してない」という指摘を報告する際に、「化粧してるのに」を付加することによって、自分にとっては不要な指摘であったという態度を示しているように見える。更に、その結果、その濃いアイメイクについて、「お::」(8行目)と感心されるのではなく、「ん::」(9行目)という反応がなされたことを演技的に語る。このときMは「お::」で声を高く同時に手を叩き賞賛する演技を行い、また、「ん::」で首を傾げることで、その反応がアイメイクをしたMに対する否定的ともとれる反応であったことを演技的に示す。こうした語りの冒頭における語り手のことばの選択から、現地女性らに対するなんらかの否定的な態度示されているように見える。しかし、受け手らはあくまでもそうした語りを笑えるものとして以上には受け取っていない(10~11行目)。

その後 M はその出来事に対して、(M が) 内心どのように思っていた (ものとして述べている) のかを付け加える (12~13 行目)。これは須賀 (2012) が指摘する語りに対する実際には言われなかった M の出来事に対する否定的な態度の表出である。この M の発話の「自分でやっというて」の「自分」は M のためにアイメイクをした現地女性らのことを指している。また、「やっというて」という発話の後には、「何なの」「褒めてもくれない」といった表現が来うる。通常、他者が自分に対して何かをした際、それが感謝すべきことならば、このような表現を用いることはない。従って、この「自分でやっというて」は、むしろ、相手に対して何らかの不服を感じているときに使用される表現として聞くことができる。

しかし、そうした M の語りに対し、T は 10 行目と同様に笑うのみである (14 行目)。それまでの反応と変化がないことは、受け手らが、語りを面白いものとして以上には受け取っていないことを示すことになる。つまり、この時点までで語り手 M は不満として聞くことが可能な形で出来事を報告しているにも関わらず、受け手は、(少なくとも、発話の上では) そうした M の否定的態度に対して積極的に同調してはいない。しかも、その後の 16 行目で H が M にその時の写真を持っているかどうかについて尋ねることで、語りの報告場面から離れており、この語られた出来事が一つの区切りを迎えたと理解していることを示す。

しかし、既に見たように、不満が示されたなら、受け手からの affiliate/disaffiliate な反応が行われることが期待される。そのような観点から考えると、ここでは M が示した「現地女性ら」に対する不満が特に拾われず、宙に浮き、共有されることも否定されることもないままとなっている。このことは、単に筆者がそう感じるだけではなく、この後に、M が語りを継続することから確認できる。

断片 (6) 【Data2 アイメイク】 (断片 (5) の続き)

22→M: フィリピーナ?みたいになって.=

23⇒H: =いや:: (ん)

24 (0.4)

25 T: hahaha

26→M: [ん::] みたい [な]

27 H: [これ?] [こん] な

28 M: huhu [ha] .h [.h

29 H: [あの] [はねの]

30 M: あんなの<絶対>できないですよあんな不器用な人たちには。

31 (0.6)

((8行略))

21行目までで一旦一区切りをついたように見えた語りが、22行目でMによって「フィリピーナ」ということばを使って再び再開される。Mは、やられた自分のアイメイクがどのようなものであったかを更に描写する。

まず、Mの発話の組み立てに注意したい。語り手Mは、発話の冒頭に直前の語りとのつながりを示すような「だから」「でね」といった接続詞を使用したり、説明的に語りの描写を始めたりしていない。語り手が演技的な発話を直に用いることは、この発話が、直前で区切りを迎えたと見なされた出来事の結末やそれを踏まえた新しい連鎖の開始ではなく、直前で受け手が開始した写真の有無に関するやり取り(16～21行目)が「差し挟まれたもの」として、遡及的に構造化される。

更に「フィリピーナ」ということばの選択とその際に用いられる演技的な発話の音調に注意したい。語り手は、この発話を笑いを伴うこともなく首を傾げながら上昇調で発音する。それにより、その発話が、少なくとも喜ぶことのできない「疑問に感じられるもの」であったことが再び示唆される。そして、Mが「フィリピーナ」という具体的な国の女性を例としてあげることによって、受け手にとっても、そのメイクがどのようなものであったのかがより明確に想像できるようになる。このことばの選択は、9行目で示した「ん::」がそのメイクを見たことがない受け手にとっては「いやだね」などと同調しにくいことと対照的である。実際に、受け手は次の行で受け手Hは「いや::(ん)」(23行目)とそれが喜ばしいものではなかったという態度を理解していることを示す。このHの反応はそれまでの単に笑うこととは大きく異なっている。HはMが報告した発話が単に面白いものではなく、拒否を示すことが適切なものとして理解すべきであることを示している。

ただし、重要なことはこの「いや::」が、語られた「アイメイクの出来映え」に対する反応であるという点である。ここまでの受け手の反応によってなされていることは、受け手がアイメイクの出来映えに関して否定的なものとして理解し、そうした態度に寄り添うことである。そのため、ここで否定されている事柄が必ずしも13行目まで語り手Mが語ってきた、メイクをした「現地女性ら」に対するものとしては理解されない。そのため、語り手Mの立場から考えると、その「アイメイクの出来映え」に対する否定的な態度に賛

同が得られているとは理解できても、当初、語り手が語っていたメイクをした「現地女性ら」に対する不満への賛同として理解するには十分な反応とは言えない可能性がある。

実際に、その後短い間が生じ（24行目）、反応の不在が露呈する。そうした中で、Tが遅れて反応を示す。しかし、この時Tは相変わらず笑うのみである（25行目）。Tのこの笑いは、10行目、14行目で語り手が行った演技的な発話に対するTの反応と同じである。そのため、ここでTが発した笑いによる反応もそれまでと「変わらない」ことが示され、取り立てて何かがここで明らかになったとT自身が捉えていないことが明らかになる。要するに、語られた出来事がTにとっては未だ面白いものであるに過ぎないことが示されており、このことは、語り手Mにとってみると、不満に対する十分な賛同が得られているとは言えない。

そうした中で、語り手Mはここで語りを終えることなく、更に現地女性の反応を描写する。Mは「ん::みたいな」（26行目）と首を傾げながら、自分の「フィリピーナ」ということばで示されるようなアイメイクの出来映えに対して、微妙な反応が行われたことを再度示す。この「ん::みたいな」という発話は、その発話がアイメイクに対する現地女性らの反応として聞かれる位置、音調、首を傾げるジェスチャーで示されており、9行目で一度行われた反応を再びやり直しているものとして聞きうる。そして、それはつまり、ここまでで本来9行目に行われるべき受け手の反応が、未だ十分な形で得られていないことを示している。

しかし、この発話は、Hの別の質問と重なってしまう。27行目でHは目元に手を持っていき左に払うような動きとともに「これ?」「こんな」と発話する。そして、更に29行目で「あのはねの」と、そのアイメイクが単に濃いのではなく、細かい模様を描くようなものであったのかどうかを尋ねている。この発話から次のことがわかる。HにとってMが強調するそのアイメイクの濃さの理由は、アイメイクをした「現地女性ら」の責任にあるのではなく、「アイメイクのデザイン」にあるものとして理解されているということである。そうしたHの質問を利用する形で、30行目でMは「あんなの絶対できないですよ あんな不器用な人たちには」と、そのHが言う繊細なメイクをすることは現地女性らには難しいことを述べつつ、現地女性らに対する否定的な側面を再び語り始める。この時、Mは単にそれができないことを報告するだけではない。「あんなの絶対できない」と「絶対」に強制をおき、しかも他者の能力に対して、確信を持って「できない」と言う。それは、他者に対する強い批判として聞きうる。更に、Mは、そう断言できる理由として、現地女性らが「不器

用な人」であるがためだと言う。この時、「あんな～人」という形式の利用や、「絶対できない」「不器用な人」と断言することにより、M が現地女性らを否定的なものとして語っていることが明確に示される。また、現地女性らを「～な人」と呼ぶことによって、アイメイクを自分に行った特定の出来事における現地女性らだけではなく、現地女性ら全体を一般化した形で批判対象としている。しかも、そうした断言は、M が現地に長く滞在していたことを知る T と H にとっては、M の経験に裏づけられた否定のしよのないものとして聞かれる強い批判となる。それに対し、T と H はすぐには反応を示さない（31 行目）ことによって、簡単には同意できないことであることを示す。そうした同意もできず、しかし否定もできない状況の中で、この後、T と H は、小さな声で単に「うん」「そうか」などと、ごく小さな声で間を埋めるような最小限の発話を行うこととなる。

5.4.1.2. 不満にお墨付きを与えることと物語の収束

そうした間が続いた後で、M は 40 行目、41 行目で、再びアイメイクに対する微妙な反応に話を引き戻し、自分がどのような反応を期待していたのかを更に具体的に示すことをする。M は現地女性らの対応について「すごいほっとかれっぷりでした」（43 行目）と単にほっとかれたこと以上のものであることを強調した形で出来事を描写する。以下では、語り手と受け手の間で語られた出来事が不満として理解できるかに関して交渉が行われ、最終的にセリフ発話産出される（47 行目）ことに注意しながら、断片を詳細に見ていく。

断片(7) 【Data2 アイメイク】(断片(6)の続き)

- 40 M: 最後まで責任もって
- 41 M: ¥なんか¥[こ h う h 褒(h)め(h)た(h)り(h)]と h か h な h ん h か h
- 42 H: [HUHUHUhahahahahahahahaha]
- 43 M: HAHA[hahahahahahaha[すごい]ほっとかれっぷりでした huhu
- 44 T: [hahahahahahaha[()]]
- 45⇒H: ¥文化の違[いが¥]
- 46 M: [hhuhu]そう
- 47⇒H: ひど::いそれは:ちゃんと[()]ってよね::
- 48 M: [終わった途端に放置ですよ]
- 49⇒H: えっ huhh

50 T: hhh

51 (1.0)

40～41行目、43行目でMは現地女性らの自分に対する扱いのひどさについて、9行目で示した「ん::」よりも一層明確に（受け手が）理解できるよう描写する。つまり、「すごいほっとかれっぷり」と聞いたならそれは現地女性らへの強い批判として聞きうる。その後、受け手のH、Tは笑うことが適切な反応の仕方であるものとして取り扱いつつも（42行目、44行目）、ここで初めて、受け手が語り手の不満に寄り添う（ように見える）態度を明確に示す。興味深いのは、Hがその経験が「文化の違い」（45行目）として理解できることを示し、それに対する語り手の承認（46行目）を得た上で、「ひど::いそれは::ちゃんと（ ）ってよね::」（47行目）と、相手が当然すべき何かをしてくれなかったという不満の気持ちを示す点である³⁰。ここでHは文化の違いを持ち出すことにより、現地女性らの振る舞いがある一定のレベルでは理解できるという意味で擁護しつつも、「ひど::い」と語り手が示す不満に同調している。そのため、「ひどい」とだけ言うよりも現地女性らに対する否定的態度が弱められているように見える。なぜか。このことは不満に同調することが、受け手にとっても慎重に扱われるべきものであることを示している。つまり、受け手はこのとき二つの課題に直面している。一つは、目の前で語っている語り手の語りの進行を支え、表明された態度に寄り添うことである。もう一つは、その寄り添いのために他者への不満の吐露という社会的負荷の高い課題を行うことである。受け手は、こうした二つのジレンマに対処するため、発話を慎重に組み立てることをしていると考えられる³¹。いずれにせよ、Mは語った経験がいまやHによっても、否定的に捉えることが可能なものとして理解されていることが認識可能になる。

そうした不満に対する受け手の賛同を得た環境において、Hの発話と重なる位置でMは「終わった途端に放置ですよ」（48行目）と、更にもその出来事が自分にとって不満に感じられるものであったことを詳細に示す。しかも、「<不満>+ですよ」という発話の形式が用いられることにより、それは単に事態を報告しているのではなく、その後に、受け手の側から何らかの反応が可能なスペースが与えられているように見える。しかもこの直前で既に不満

³⁰ この47行目の発話「ちゃんと（ ）ってよね::」はセリフ発話として聞くことができる要素も含まれているが、音声をはっきりと聞き取ることができないことから確定はできない。しかしながら、少なくともHがMの経験を不満として受け取り、それを共有しているという態度を示しているということは言える。

³¹ 確定はできないが、カメラが回っているこの環境においては特にこうした他者への不満に同調することに対して慎重に取り扱う側面があると考えられることでもある。

に寄り添う態度が示されたことを考えるならば、この時与えられるスペースにおいて、受け手は更に明確に不満に寄り添うことをしてみせることが求められるだろう。しかし、それに対して受け手は「え::」や笑いによって反応を示すのみで（49 行目、50 行目）、その後 1 秒の間があいてしまう（51 行目）。この間は、語り手が受け手からの更なる反応を期待した結果として見ることができる。このことから、語り手 M は未だ自身が示した不満に関して受け手と同じ気持ちを共有できているのかを実感するのに十分な反応が受け手の側から得られておらず、語りを収束させるには至らないことを示している。

実際に、語り手はここで語りを終えることなく、再び語りの続き（または詳細化）として聞かれる形で発話を行う。以下の断片を見ていただきたい。

断片(8) 【Data2 アイメイク】(断片(7)の続き)

52→M: フィリピーナみたいだね!(.)おわり!

53 H: ↓ん[↑::なるほど[::

54⇒T: [ん: [huhu~~え~~::とってよ~~み~~(h)た(h)い(h)[な(h)]

55 M: [huhu]

56 M: (本当そう)((深く頷きながら))huhu

57 H: 大変[だよ

58→M: [あの:もうちょっといくつかコメントしようよみ[たいな]

59 H: [huhu]huhu.h.h

60 T: [huhu]

61 (1.0)

62 H: .h(.)°そっか:::°

63 (11.0)

間の直後、語り手 M は「終わった途端に放置」ということがどのようなものであったのかについて「フィリピーナみたいだね おわり」(52 行目)と演技的に語る。この発話によって次のことがなされている。第一に、語り手は、22 行目で一度利用した「フィリピーナ」という形式を利用することによって、未だ語りは完結していないこと、もっと言えば語りのオチを再度やり直していることを示す。また、「フィリピーナ」という言葉は受け手によって既に否定的なものとして理解できることが示された表現である。そうした表現を再び

用いつつも、本来、不満の対象である（アイメイクそのものではなく）「現地女性らがやったこと」に再び焦点を当て直している。第二に、語り手は演技的な発話を用いることにより、不満に値する出来事の一場面が受け手にも（擬似的にせよ）どのようなものであったのかのアクセスを可能にする。アクセスを可能にするということは受け手の側からの何らかの反応を引き出すことが示唆される。こうした工夫によって、受け手からの何らかの適切な反応が未だ得られていないことが示唆される。

注目したいのは、そうしたMの演技的な発話に対するTの反応である。Tは「え::とってよ」(54行目)とセリフ発話を行う。この発話は、アイメイクをするならば化粧をしたまま放置するのではなく、最後まで責任を持って褒めたり、「アイメイクをとる」べきであるという「現地女性ら」に対するMの不満の露呈として聞くことができる。この発話がこのように聞けるのは、次のような特徴があるためである。まず、52行目のMの発話に対する反応として聞かれるよう構成されている。それは、単にセリフの形で発せられているからだけではない。まず、既に述べたように直前の語り手の演技的な発話には、ある種受け手からの反応を引き出すことが示唆されていた。加えて、「とってよ」の主語が何であるかが示されていないことにより、この発話はそれ自体単独で理解することはできず、あくまでもこれまでのやり取りに依存した形で理解される。また、この発話は、ここまでで語り手が語り手が「すごいほっとかれっぷり」(43行目)、「終わった途端に放置」(48行目)という表現で報告した現地女性ら行動に対する、受け手側からの不満として理解される。そのことは、「え::」という何か不満を感じたときにその感情を吐露することばが利用されていることや、Mの演技的な発話に対する反応として聞かれることに現れている。更に、「え::とってよ」は、Mの実際には言わなかったであろう、心の声として受け手なりなことばで再構成されている点も重要である。心の声であることは、つまり、当該出来事に対してどのように理解すべきかという態度が示されている。

このように、語り手が徐々に不満であることを明確にしつつ、語り続ける中で行われる受け手のセリフ発話は、語り手の不満を感じたことへの同情を示す一つのやり方となっている。その際、受け手がセリフ発話を用いて「不満を吐露」してみせることは、単に「ひどいね」「わかる」と相手に同調することよりも強い意味を持つ。なぜなら、語り手にとってみると、自らが提示した不満を受け手の側から独自の言葉で、不満がどのようなものであるかが詳細化された形で再構成されることは、そうした態度に対する理解を立証して見せることであるからである。しかも、この50行を越えるやり取りの末に受け手の側から「同

じ気持ちである」という態度が示されることは、語りの中で慎重に取り扱われてきた不満に対して、そう感じてもいいものであるというお墨付きが与えられることとなる。そして、このことは、不満として語ることに對する社会的な根拠を受け手の側から与える行為として理解できる。

実際にその次の行を見てみると、語り手 M は深く頷く (56 行目) ことによって、受け手の参入を承認し、更に「あの:もうちょっといくつかコメントしようよみたいな」(58 行目) と、あり得るべきもう一つの本音を更に発する。この時、語り手は受け手が使った「～よみたいな」という発話の末尾を繰り返し利用する。このことから、冗談の語りの場面するときと同様、語り手が受け手のセリフ発話による反応を受け止め、「同じ立場で同じことをしている」ことが発話の構成を通して示していることがわかる。更に興味深いことに M は「～しようよ」と誘いの形式を用いることによって、その前の時点で描写した「すごいほっとかれっぷり」(43 行目) という発話に比べると、不満の程度が明らかに弱める。もっと言うと、語り手は T がセリフ発話によって示した「え::とってよ」が表す不満の程度に寄り添う形で発話を調整しているように見える。このことも、語り手と受け手が今や「同じ気持ちである」ことを連鎖を通して可視化する際の一つの重要な手続きであるように思われる。そして、出来事に対する「不満」という態度が分かり合えることが、語り手と受け手双方にとって認識可能になった後に、前節で見た冗談を語る連鎖と同様、語りは収束に向かい、長い沈黙を迎える (63 行目)。

このように、語り手が自身の本音の吐露を行い、その後長い連鎖を経て受け手によって否定的な態度を更に明示的に示すような反応が行われていることは、Haakana (2007) でも述べられている。特に、Haakana (2007) では、語り手が自身の思いを述べる発話 (reported thought) を行うことにより、語り手が自身の評価を明示的に示すことができ、それにより、聞き手から共感的反応を引き出すはたらきがあることを指摘されている。

ただし、重要なことは、語り手が自身の態度を示せばいつでもすぐに受け手による共感的な反応が自動的に引き出されるという単純なものではないという点である。少なくともこの断片においては、語り手が示した態度に対して、すぐには受け手の側から適切な賛同が得られておらず、50 行以上にも渡る語り手と受け手の交渉の過程がある。その過程の中では、語り手が様々な方法で出来事に対する態度を示すだけでなく、受け手も不満として感じていることを実際に示すかどうかに関する交渉を行う。そうした交渉の過程の結果、受け手の側からセリフ発話が産出される。そして、それを語り手が頷くことや同様のフオ

一マツトでもう一つのあり得るべき発話を追加することで受け手の貢献に承認を与える。そうした過程を通して、語り手と受け手が出来事に対して「同じ気持ちを共有している」ことが互いに認識可能なものとなる³²。

5.4.2. 単独で用いられる「セリフ発話」³³

前節では、受け手がセリフ発話で参入することが、語り手の不満に対する強い共感的反応として機能していることを見てきた。また、前節までで見た事例においては、語り手が

³² セリフ発話が、不満を述べる連鎖の中において、語り手の不満という態度に対する共感的反応としておかれることは、日本語だけではなく以下の英語のデータにおいても確認される。以下のデータにおいては、セリフ発話が産出される連鎖上の位置的な特徴についても、本節で示したデータと共通性が確認できる。

[8]Paediatrician [#5 BCC 369]
 1 Pol: I hated being trea:ted .hhhh I mean hh! It
 2 sounds awfully snobby to sa:y this but .hhhh
 3 because of the area I live i:n [uhm] they=
 4 Clt: [mm]
 5 Pol: =treat everyone I think (.) uhm to the lowest
 6 common denominato:r.
 7 Clt: [m m h m. [mm hm.]
 8 Plo: [So I >remem[ber them] coming in and saying<
 9 .hhh "↑He:llo: I:'m the: ↑ba:by: docto:r."
 10 ['n I'd say] "You can say 'paediatrician' it's=
 11 Clt: [Oh m(h)y:]
 12 Pol: =oka:y I'm- you know [I'm ()
 13 Clt: → [ɛ "I understand the
 14 →language yes!"
 15 Pol: You know and I just ha:ted (.) I hated being
 16 patronised. 'N .hhh it sounds like I'm really
 17 arrogant but I just wanted to be treated (.)
 18 you know (.)
 19 Clt: mm:.
 20 Pol: sort'v as an inte(h)lligent wo(h)man
 21 ba(h)[sically.]
 22 Clt: [Of course.]

(Kitzinger, C. and J. Mandelbaum (2013)より抜粋)

この断片において、Pollyは、Birth Help Lineというところに電話をかけ、その際の医者態度が傲慢であったことについて不満を示す。特に8行目以降に注目したい。まず、8～10行目の演技的な発話によって、受け手に観察可能な形でどのようなことが起こったのかその具体的状況の提示を行う。そうした環境において、受け手は、「oh my」(11行目)ということで、医者発話に不満として聞くことができるという同調的態度を示す。注目したいのはその後の13～14行目のセリフ発話である。受け手は、セリフ発話を用いて、そうした医者発話に対するあり得るべき別の反応を示す(13～14行目)。その時のセリフ発話には、そうした医者発話をどう理解すべきかの態度が示されている。そうした受け手の反応に対し、語り手は「hated」の「ha」を強調したり、ことばを繰り返し用いることや、詳細を語ることで、不満として感じられることを一層明確にする。

³³ 「セリフ発話が単独で用いられる現象」というとき想定しているのは、セリフ発話の後の位置で「みないな」がない事例だけではなく、実際には、(音声は聞こえないが)口が動いていた、不確実ではあるが「って」だと思われる音がわずかに発音されているように聞こえる事例も含めて考えている。重要なことは、実際に話し手が何か発音している可能性があるかどうかではなく、会話の参加者にとって「ない」ものとして取り扱われているかどうかという点である。

示す不満が、語り全体における一つのオチ、または主要なトピックとして語られているものであった。その証拠に、セリフ発話による参入がなされた直後の位置で語り手は更に不満を詳細化した形で発話を重ねていた。そうした語り手と受け手の気持ち共有された後、語りは収束に向かっていった。

ところで、これまで見てきた受け手のセリフ発話の一つの形式的特徴として、「みたいな」という形式が伴われやすいことは既に指摘した。その一方で、「みたいな」が伴われず、セリフ発話が単独、または末尾に何らかの形式が用いられるとしても音声的にはほとんど聞きとることができない形で用いられる現象が見られる。このことは、驚いた出来事を面白いものとして語る場面において「みたいな」が明確に発話されるセリフ発話が多いことと明らかに異なっている。本節では、セリフ発話が単独で使用される現象が、語り手が示す不満に対して、(冗談ではなく)「真面目に私のこととして」とらえていることを示す方法となっていることを指摘する。そして、このことは、社会的に負荷の高い不満を述べることに對して、受け手の側から配慮を示す際の一つのやり方であることを指摘する。

以下の断片は前節の事例と同じ【Data2】のデータである。ここでも、M が海外のバスでの経験について語っている。M が滞在していたイスラム圏の国では、基本的には女性の近くに知らない男性が近づき、話しかけることが許されていない。にも関わらず、バスで乗り合わせた見知らぬ男性が、女性の M の隣に座ったため、バスの車掌や乗客から大ブーイングをくらうこととなる(4、6、7、8、10 行目)。M の隣に座った男性は、かえって意地になり、なかなか席を移動しようしなくなってしまった。その結果、バスの出発が遅れてしまう。その後、バスの前の方に座っていた乗客も集まり、更には車掌まで呼んでくるという事態に発展することが報告される。まず、セリフ発話が産出される前までのやり取りを見ていく。

断片(9) 【Data2 バス3】

- 01 M: その::私も長距離バスにのっ-長距離バスなんですけど
02 M: 乗ったときに::h(.)あの::予約して:席割り振ってもらっ[て:
03 H: [んん
04 T: 女の人になるべくその:男の人の隣にならない[ように
05 H: [ああ::
06 M: あいてる席にいつてもらうんですけど:(.)

07 M: .h でその場で乗って来る人もいるから:私の隣あいてたのに

08 M: ある若い男の人が[座って::(.)]ではあ:って話しかけて来て[:そしたらもう

09 H: [ああ::: [ん:]

10 M: まわりから太ブーンで[:.h¥まわりに座ってる人がみんな¥.h

11 H: [ああ::

12 M: おまえその席座るなやめろやめろみたいに[なっ[て::

13 H: [↑あ[あ:::

14 T: [へえ:::=

((18行略))

35 M: その人も来て.h もう(.)車掌権限でお前はそこの席からどけろって言ったら

36 M: もうほんとに怒っちゃって[(.)私に聞いてきて

37 H: [ああ:]

38 M: お前も h 俺が隣で[嫌か [みたいな=

39→H: [↑いやっ[や:()

40 M: =[hahaha[hahahahaha

41 T: =[HAHAHA

42→H: [そんな::haha 私に委ねないで

43 M: .h¥私に¥委(h)ね(h)な(h)い(h)で(h)っ(h)て(h)

44 M: みんな私の意見を[聞いて]やだろ?みたい[に言って, やなのか

45 H: [わあ:::] [わあ:::]

46 M: みたい[で

47 H: [ええ[:

48 T: [HAHA[hahaha

49 M: [ここどうし(h)た(h)ら(h)い(h)い(h)の(h): (h)

50 M: みたいな haha ほっといてください¥みたい[な¥

51 T: [hahahahaha

52 M: なって(.)でもまさかその人にいやとは言えないから ん:::みたいな

53 M: ことばわからない[ふりをし::

54 H: [hahaha

55 T: [hahahahaha

35 行目以降に注目しよう。「その人」とは車掌のことである。その車掌が M の隣に座った男性に移動を命じると (35 行目)、男性は怒ってしまう (36 行目)。その結果、男性は M に直接「お前も俺が隣で嫌か」と男性の演技的な発話を行い、受け手にも観察可能な形で語りの中の具体的状況を示す (38 行目)。このとき M は「お前」「俺」「嫌か」という言葉を選択することにより、男性の発話が丁寧なものいいではなかったことを暗に示す。また、乗客らからブーイングを浴び、追いつめられた男性が、M にこのような質問によってなされていることは、単に「嫌かどうか」を問うことだけではない。字義通りの単なる質問ならば、単に「はい、嫌です」「いいえ、嫌じゃないです」と応答すればいいだけである。しかし、この質問は言ってみれば「男性が席をどけるべきか否か」に関する「男性」対「乗客と車掌」のやり取りにおける最終審判が求められているものとして聞くことができる。なぜなら、もし M が「嫌ではない」と答えるならば、それは M のためを思って男性を非難し続けた乗客らの主張を「無駄なもの」あるいは「負け」として M 自身が主張してしまうことになる。一方、M が「嫌だ」と答えることは、追いつめられた男性にとっての最後の砦である M が男性の「負け」に承認を与えることとなり、男性をますます追いつめることとなる。しかも、このやり取りの発端は男性が M の隣に座ったことにあり、バスの乗客らにしてみればこの男性を負かす事は、M 自身のために行われているとも言える。このように、この発話によって M は微妙な立場に立たされ、非常に困った事態に陥ることが報告されている。

更に、男性の発話が M を微妙な立場に立たせる困ったものであったことは、M 自身が当該発話の前に「私に聞いてきて」(36 行目)を使うことでも暗に示されている。「私に聞く」というのは、客観的な立場から「聞く」という行為が「私」に向けてなされたといういわば行われた行為の方向性を示す表現である。一方、ここでは単に「聞く」ではなく、「聞く」に補助動詞「てくる」が付加された「聞いてくる」という形式が用いられている。山本(2011)では「言ってくる」という形式について分析を行い、「(私に)言う」と「言ってくる」と区別して考えるべきであることが指摘されている。山本では「(私に)言う」は行為の方向性を中立的に述べるのに対し、「言ってくる」は報告者にとって(元発話の場面において)何らかの意図的な行為要求がなされたことを明示的に示す方法とされている。つまり、この事例について考えてみると、「お前も俺が隣で嫌か」という発話の組立と、それを枠付ける「私に聞いてきて」という発話の両者によって、M にとっては、その出来事が単なる質問

以上のものであり、Mに対する要求が付与されたものであったことが示される。そして、そのような要求が課されたことが、あえてここで「てくる」を用いて明示的に示されるならば、この発話の受け手は当該発話を単なる質問として聞くだけでなく、何らかの報告に値すべき事態が生じたものとして聞くことができる。要するに、「聞いてくる」は物語の具体的な内容を説明する前にその話を「どう聞くべきか」の指針を与える一つのリソースとなっている。

実際に、このMの報告に対し、語りの受け手であるHは単に相槌を用いて聞いていることを示すだけではなく、「いやっや:」と評価に値する事態が今まさに報告され、それを受け取ったことと、それが否定的なものであるということへの理解を即座に示す(39行目)。しかも、Hの反応は、Mの発話の完了可能点に至る前に開始されている。つまり、Hのこの参入位置は、不満を語る事に対して、出来る限り早い位置において語り手の不満に対する優先的応答を示すことである。従って、それはより強い共感を示すものとして聞く事ができる。

注目すべきは、その後、Mの笑いが少しの間続いた後(40行目)、その笑いに重なるようにして、Hが「そんな::私に委ねないで」と、実際に当該出来事を経験しているかのようにセリフ発話を行う点である(42行目)。この発話について詳細を見て見よう。まず、セリフ発話の局所的な位置について述べる。この発話は、これまで分析してきたデータと同様、語り手が何らかの形で語りの具体的状況が置かれたその後の位置に置かれている。それにより、語り手が演じた発話に対するあり得るべき反応の一つとして理解される。具体的には、男性が「お前も俺が隣で嫌か」と言うのに対し、困ったMが「そんな::私に委ねないで」と今問題になっている事態の是非を問うことに対する不満の態度を示す。そして、これまで分析してきたデータと同様、このセリフ発話の内容は、実際にその場でMが産出したものというよりは、心の声や本音の吐露として聞かれるよう産出されている。

次に、このセリフ発話によって何がなされているのかについて述べる。この発話によって、Mが描写している直前の発話をどのようなものとして理解すべきか、そしてHが的確に理解をしたことが端的に示されている。既に述べたように、男性の発話は単なる質問ではなく、Mの立場を明言することを通して、男性が隣に座ることの是非を問うものであった。そして、それはMにとってみると非常に困った事態であったという一種不満の吐露であることが示されていた。実際に、Hの最初の「いやっや:」という反応では、Mの発話が報告に値する不満じみたものであり、そのことに共感を示すものであった。一方、セリフ発話

では、語り手が明示的に示してはいない否定的な部分を際立たせることをしている。詳細を見てみよう。まず、受け手は、「そんな:」という発話によって、想像もしていなかったようなことが身に起こり、途方にくれていることを示す。そして、「私に～ないで」という形式を用いることにより、非常に強い形で M にとって好ましくない、受け入れがたい事が「私自身に」起こった事が示される。

更に、この発話は「みたいな」のような遡及的にセリフであることを枠付ける言語形式を伴わず、セリフ発話が単独で産出されている。そうした発話の構成により、当該発話は「独り言」のようにも聞こえる³⁴。これは、語りのメインの反応としては取り扱われず、語りの連鎖上は聞き流してもよい反応として聞けることを意味する。加えて、語り手が「今ここで、私が、実際に」感じているように聞くことを可能にする。それは、特にこの事例においては「私」という一人称が用いられることによって、(語り手の立場に立ってそう思うというよりは)「私」自身の立場から「勝手な心の叫び」として示されていることからわかる。なぜこのような発話の構成になっているのか。

第一に、セリフ発話が連鎖上のどのような位置で産出されているかという問題が関係している。M の語りの主要な話題は「バスでの出来事」であるため、バスで「どんなことが起こった³⁵」その結末が語り切られるまでターンは現在の語り手 M にある。実際に、この後に M が、54 行目の「30 分出発おくれました」と出来事の時系列上の報告を最後まで貫徹しており、セリフ発話が置かれる連鎖上の位置が出来事全体の結末ではないことがわかる³⁶。そう考えるならば、受け手がここで参入することは、これまで見てきた事例でセリフ発話の多くが、語りに一区切りがつく位置に置かれることとは異なる。あくまでもターン交替が起こるとは考えにくい位置なため、そうした受け手の発話に対して語り手がとりたてて反応する必要はない。だからこそ、そうした連鎖上の位置と語る権利関係に配慮する必要が

³⁴ 独り言のようであることは、単に筆者がそう感じるだけではなく、受け手自身がセリフ発話の産出における振る舞いからも示されているように見える。振る舞いには、例えば、吐き捨てるように言うことや、アルバムを見ながら視線を落とした状態で発話すること、セリフ発話の直後に視線を落としてお菓子を食べ始めたりするような振る舞いなどがいくつかの事例において確認できる。

³⁵ この語りの冒頭で M は、「それも問題だろっていうのが」(6 行目)と語りを開始している。このことから、これから語られることはバスでの何らかの「問題」であることを示している。

M: ジャバス三

H: (ないないな[ら)

S: [hahahahaha[hahahaha

H: [()

M: [()

→M: でもそれも[も-(.)問題だろっていうのが:[なんか:

³⁶ M にとって、バスでの出来事を語り切ることが主要な課題となっていることは、M が語り始める際に、「じゃあバス 3 (さん)」と言って、他の二人が既に語った他の国でのバスに関わるエピソードの三つ目として語ることを宣言していることからわかる。

一層生じる。そうした配慮に対処するため、受け手は、Mの語りの展開を支え態度に寄り添いつつも、聞き流されてもよい相槌的な反応を行う。

第二に、セリフ発話が悪気の無い男性の好意的態度に対する不満の表出であることも関連しているように思われる。つまり、正当な行為を行うものを取り立てて批判することは、一種モラルに反することのように思われる。少なくとも、この連鎖において、Tは笑うのみで、その不満を取り上げることはしていない。つまり、受け手のセリフ発話による参入は、語り手が不満を示すという社会的負荷の高いことを行った後に、それを受け手の側から際立たせ、更なる詳細化をはかることである。しかし、そうした不満に寄り添う姿勢は見せる必要はあっても、語りの主要なオチではない場合、あえて際立つ形でピックアップし話題の俎上にあげることができれば避けられるだろう。そうしたジレンマの中で参入する際の一つの方法として、語りの連鎖上の俎上に明確に挙げることをさけつつ、さりげなく態度に寄り添うことをする。それが、独り言のように聞かれるよう単独で用いられるセリフ発話の利用があるように思われる³⁷。

第三に、独り言のように聞かれることは、つい「私自身の」本音が漏れ出てしまったものとして聞かれることを可能にする。第3章では「みたいな」を伴うことによって、セリフ発話が受け手側からの一例の提示として示すことを可能にすることを指摘した。また、そうした一例としての提示は冗談の文脈で用いられやすく、受け手側の発言に対する権利を緩める働きがあることについても述べた。一方、セリフ発話が単独で用いられるとき、それが独り言としても聞けることから、受け手は語り手の立場に立って気持ちを代弁したり、冗談として言ったりしているのではなく、「私の真面目な」反応として理解される³⁸。Jefferson (1984) は trouble-talk において、その語り手は笑いを伴う形で悩みを報告するが、その受け手は笑わないという現象があることを指摘している。Jefferson によると語り手は笑うことで「trouble-resistance」を示すが、受け手は笑わないことで「trouble-receptiveness」を示し (p. 351)、「真面目に受け止めている」ことを示しているという。本研究で扱うデータにおいては、受け手の発話に笑いが伴われていることもあ

³⁷ ただし、ここで言いたいのは受け手がセリフ発話で参入した時点では、そうした不満の表明が語りの展開においてどの程度俎上にあげられるべきかは、語り手に委ねられているという点である。もし、語りの展開を優先したければ、不満に対する共感的反応が得られたとしても、最小限の短い承認を行い、次の展開に進むこともあるだろう。また、この事例のように、同じことばで発話を繰り返し、積極的に承認することもあると考えられる。詳細な分析は課題とする。

³⁸ 同様に、Haakana (2007) でも、think や say を伴わない「be」を用いた発話 (例えば、I was like ...) について、think や say が用いられた場合とは区別して考えるべきであることが指摘されている。また、フィンランド語の会話においても、同様に存在し、よりイデオマティックな表現であることがわかっている (p. 172)。

るが、「独り言」として聞ける形でさりげなく参入することによって、受け手は「真面目に語り手の気持ちを受け止めている」ことを、単なる例示ではなく、自分のこととして表現しているように思われる。

そして、このように考えるならば、真面目に受け止めていることを示すこの形式が不満を語る場面に多く現れる理由も説明ができる。既に述べたように、不満を述べることは、語り手にとっても受け手にとっても社会的負荷の高いことである。その一方で、語り手が示した態度に対して受け手は寄り添っていることを確実に示すことが求められる。特に目の前の語り手自身が経験した出来事ならば尚更同情していることを明確な形で示す必要が生じるだろう³⁹。しかし、語りの連鎖上の位置と不満がどの程度語り手によって会話の話題上の俎上にあげられるべきことかは、語り手に委ねられている。そうした中で、受け手は、確実な形で不満が共有できることを示しつつ、しかし語り手の語りを邪魔しない形で反応することが求められる。そうした際に、受け手は単独のセリフ発話を用いる。独り言として「私を感じることを」をつい示すことは、真面目に事態を受け止め、かつ本当に感じていることを示すことができる。こうした工夫は、語り手が不満を語っていく上での強力な支えとなる。

実際にこの断片においては、そうした受け手のさりげない参入に対して、語り手は受け手が提示した発話の一部（「私に委ねないで」）を繰り返すことによって、受け手のそうした発話を承認し（43行目）⁴⁰、互いに分かり合えることがやはり連鎖を通して示し合わされる。

単独で用いられるセリフ発話が、語りの進行上の問題にも配慮しつつも、不満に対する受け手の「真面目な」受け止めであることは、次の事例からも確認できる。以下の事例では、受け手の視線や身体の使い方から、より一層明確にセリフ発話が受け手の独り言として聞かれる。

断片(10)【Data12 はんこ】

12 すず： [手術のなんか](.)

³⁹ 実際に、筆者が収集したセリフ発話が単独で用いられる事例のほぼ全てにおいて、受け手のセリフ発話において示される不満を感じている人物は、第三者ではなく、目の前の語り手の態度に共感的に振る舞う場合であった。

⁴⁰ このような語り手の繰り返しは、Schegloff (1996) が「confirming allusions」（「ほのめかしの確認」串田 2006a）と呼んだ現象である。つまり、語り手は受け手のセリフ発話の一部を繰り返すことによって、語り手はその前までほのめかしていた（が、明示していなかった）内容について、受け手が理解してくれたものとして確認を与えることとなっている。

- 13 由衣: [大変::]
- 14 すず: はんこ¥押してくださいと[か言われて¥
- 15 孝子: [いh や h[.h ((手元のアルバムを見ながら))
- 16 五月: [や[:::]
- 17 すず: [huhu
- 18 すず: ¥それどこ[ろじゃないんですけど]みたいな¥=
- 19 五月: [それどころじゃないね:]
- 20→孝子: =誰か押しといて=(演技がかった口調で/手元のアルバムを見ながら)
- 21 すず: =>そ(°う/の°)<[二分の]隙間の合間をぬって
- 22 孝子: [(°って°)hh]
- 23 すず: ¥サインしてください(だって)¥hhh
- 24 五月: 結構もうう::::んってやつがきてたってこと?=
 ((この後、すずが五月の質問に答えつつ、力むのは最後まで、陣痛途中では力を抜くこ
 とが求められ、その我慢が辛いということについて語る。))

この断片において、語りの表面上の主要な課題は「出産の辛い体験」を語ることであり、後に話題となる承諾書を書くことを求めた医療従事者に対する不満を語ることではない。それは、この断片の直前、語りの冒頭で語り手のすずが「麻酔の承諾書とか書くのが辛かった」と述べていることからわかる。そして、その辛さを引き出した一つの要因として、その語りに埋め込まれる形で、医療従事者側の対応に対する語り手の不満が表出する。

12 行目以降で、すずは「承諾書とか書く」ことが具体的にどのようなやり取りの中で行われるものだったのかを、演技的な発話を用いて具体的に述べる。すずは「手術のなんかはんこ押してくださいとか言われて」(12 行目、14 行目)と、医療従事者側から、陣痛で辛い中はんこを押すことを求められたことについて述べる。そのとき、すずは、「はんこ押してください」を感情を込めて嫌みたらしく言ったり、誇張して報告することをせずに、単に「事務的な依頼をされた」こと(だけ)がわかるよう、冷静な口調で発話を提示する。それによって、やりとりの具体的発話がどのようなものであったのかを客観的な形で示す。

一方で、注目したいのは、その冷静な依頼が自分にとってどのようなものであったのかは、すずの発話の直前の笑い(11 行目)やその発話自体が笑いを伴う(14 行目)ことや、引用動詞に「言って」ではなく、「言われて」が使用されていることから、字義通りに受け

止めるべきではなく、単なる報告以上の意味を持つ発話として理解できるよう自身が表示している。特に、「言われて」という受け身の形を用いることによって、少なくとも何かを「被った」ことを暗示しているように思われる。そうした中で、12行目、14行目ですずは、その承諾書が実際に依頼された場面を提示する。しかし、この時点ではこの発話がすずの医療従事者に対する「不満」であるかどうかは、(そのように聞きうる可能性があると言うことはできても) 確定されない。実際に受け手にとって、すずの発話がどのように理解されているかは、次の行を見ることで明らかになる。

15行目で孝子は「い h や h.h」と反応する。「いや」という形式とそれが呼気を伴うことによって、その依頼が抵抗すべきもの、少なくとも否定的に捉えるべきものとして理解されていることが示されている。同様に、五月も「や:::」(16行目)と、やはりすずの報告が不満として理解可能な発話であることを示す。そうした、一連の受け手の反応から、語り手は、医療従事者側から提示された「はんこを押すこと」が、受け手らにとっても不満として受け入れられることの保証を得る。もしも受け手らが同意できないようなことについて、語り手が不満を明確に示すなら、それは語り手自身の人間性を疑われかねない事態となる。しかし、受け手らが語り手と同様の否定的な感情を抱くことを示してくれたなら、語り手は安心して不満を示すことが可能となる。このことは、既に見た事例と同様、不満を言うという一種モラルに反する行為を、相互行為の中で表面化させる際の語り手の重要な手続きと言える。実際に、18行目ですずは、医療従事者の依頼について自身がどう感じたのかを演技的な発話を用いて一層明確に示す。

すずは「それどころじゃないんですけど」と、実際に出産の際に発したとは考えにくいような発話の内容と、形式で発話を構成する。医療従事者が承認のはんこを求めた際に、もし実際にすずが「それどころじゃない」と言うならば、それは「はんこを押すこと」を断ることを意味する。しかし、それは一般常識的には考えにくいことである。また、「んですけど」という形式を直接相手に発するならば、それは単なる断り以上の意味を持つ。つまり、単にはんこを押すことができる状況にないということを示すだけではなく、「んですけど」の付加により、それが相手の求めに対する抵抗・抗議として聞きうる発話として示される。

さて、その後の受け手の反応に注目したい。注目すべきはその次の孝子の反応である。孝子は、「だれか押しといて」(20行目)とセリフ発話で反応する。この時、孝子は、「といて」を強調し、吐き捨てるような音調で発話する。しかも、「ひどいね」といった評価的反

応ではなく、すずの発話とパラレルなもう一つのありうるべき発話、またはすずの発話に接続可能な発話として聞かれるような形式とタイミングで参入する。こうした発話の特徴に加え、セリフ発話が単独で用いられることにより、語り手が語った出来事に対する否定的な態度に対して受け手が出来事に身を置き、「実際にそう感じられる」ことを今ここの「私の」自身の感情として発しているように見える。更に、この断片において興味深いことは、この発話に伴う孝子の視線は同意を示すべき相手のすずではなく、(この断片の前から孝子が見ている) 手元のアルバムに向けられている点である。加えて、孝子は時折ページをめくりながら会話に参加することをやる。このように、発話の特徴に加えて、発話の際の様々なリソースを利用することによっても、受け手は当該発話が「独り言」または「勝手なつぶやき」として聞くべきことを示している。なぜこのような工夫が必要なのかは、前節で見たデータと同様、この語りの連鎖における不満の表出の位置づけに関わっている。つまり、この断片においては、すずの語り自体の主要な話題は「出産の辛い体験」である。そのため、ここでは、医療従事者に対する不満は、そうした話題に付随して表出したものとして位置づけられる。それは、この後に五月が、陣痛のどの段階にあったかを確認し、更にすずが力むことができなかつたために背中が折れそうならい辛いものだったと引き続き、出産の辛さが語られることからわかる。従って、受け手は、語りの進行そのものを妨げることなく、しかし、その辛さの一つの要因として示された医療従事者の対応への不満に確実に寄り添う。そうした課題に対処するため、「セリフ発話」が単独の形で用いられている。

5.4.3. 小括

本節では不満を語る連鎖に現れるセリフ発話に注目した。不満を述べることににおいて、受け手のセリフ発話がどのような機能を果たしているのか、その詳細を記述した。まず、語り手がある出来事に対して否定的な態度を表明するとき、それが実際に不満であるかどうかは最初から明示せずやり取りの中で交渉され、相互行為的に成し遂げられていくことが本研究の事例によっても明らかになった。例えば、最初の断片においては、アイメイクをしてもらったという経験と、それに対するそっけない反応は、笑いが行われることによって、笑う事のできるものとして語られていることとして扱われている。しかし、その時点まででは、それがアイメイクをした知人らに対して、不満を含むものとして、語られているかどうかは確定されない。しかしながら、受け手の側から、セリフ発話によって、当

該出来事がどのようなものであるかが、「本音を漏らす」形で示される。それによって、「不満」であることがやり取りの中で明確に示される。つまり、不満として受け手にとっても理解されることが可視的に示される。それにより、不満を述べることに墨付きが与えられるため、語り手は、心置きなく出来事を不満のあるものとして語り続けたり、より詳細に語り始めることが可能となっていた。

また、セリフ発話が単独で用いられることは、単に「みたいな」という形式が脱落したのではないことについても論じた。セリフ発話による受け手の参入は、話が「独り言」として聞きうることを可能にする。それによって、受け手が同じ気持ちであることを示す「不満」が語りの俎上にあげられることを避けつつ、しかし確実に語り手の経験に対して受け手が「私の気持ちとして」共感的に振る舞うことを実現していた。

このように、不満を述べる連鎖におけるセリフ発話は、「冗談」を語る場面の特徴と共通する点も多い。しかし、語り手にとっては不満を述べ、受け手の共感的反応を引き出すことのほうが受け手が（語り手と）同様、またはそれ以上に報告した出来事を本当に不満に思ってくれなければ、単に語り手のみが他者や出来事の悪口を言っていることになってしまうため、社会通念上の負荷が高い。一方、受け手にとっても、面白い話と同調することに比べて、出来事や人に対する不満に同調することは、悪口を言うことができれば避けたいことであると同様、受け手にとってのメリットが期待できない行為である。従って、受け手は不満として語られているのかに関して、慎重に取り扱った上で、自らも「本音の気持ちとして不満に感じることを確実に示す。このように、語り手と受け手は、お互いの発話や語りの展開を一層慎重に取り扱い、セリフ発話を産出することを通して互いの態度をすりあわせていくことになっていた。

5.5. まとめ

本章では、セリフ発話について冗談を語る場面と不満を語る場面のという二つの典型的な事例の中で、特にどのような働きをしているのかを検討した。検討を通して、語り手と受け手がやり取りを通して互いに「分かり合う」ことを示し合い、「共感する」ことを経験する機会となっていることがわかった。特に、セリフ発話と、その後の語り手（や他の参与者）のセリフ発話に対する取り扱いの過程を見ることによって、語られた驚きや不満といった感情が、互いに共有できることを観察可能な形で示し合われていることが確認できた。このことは、互いに「共感し合う」ということが、単に人々の心の中で感じるだけで

はなく、実際のやり取りの中で経験されていることを示している。

第6章 結論

6.1. 全体のまとめ

本研究では、実際のデータの中に現れる物語の受け手が行う「セリフ発話」という現象をみてきた。各章では、以下の点について述べた。

第1章では、本研究において、対象とする現象をいくつかの事例と共に示し、受け手によるセリフ発話が、従来の引用研究の枠組みではとらえられないことを指摘した。そして、なぜ会話分析の立場から当該現象を「セリフ発話」と呼び、分析を行うのかを明らかにした。それによって、従来の引用研究における引用の枠組みでは、本研究で扱う現象が捉えきれない事が示された。

第2章では、初めにセリフ発話の分析には会話分析が有効な方法であることについて述べ、その上で本研究に関わる会話分析の基本的な考え方と概念を整理した。また、データの概要と、その収録方法について述べた。

第3章では、受け手によるセリフ発話がどのような環境で現れやすいのか、発話の連鎖上の位置と発話の構成の特徴を示した。その際、語り手によって語りの具体的状況が提示された環境の中で受け手の参入が行われやすいことを指摘した。その上で、具体的な事例に基づき、現象の分析と記述を試みた。第一に、語り手の提示する具体的状況が、語り手の「演技的な発話」によって示されているデータを分析した。第二に、語り手の発話だけではなく、「身体的動作」によって示されているデータを分析した。これらの分析を通して、受け手のセリフ発話による参入は、語り手の語りに対する理解を立証する、一つの強力な方法となっていることがわかった。

第4章では、第3章で記述した現象が、会話における語り手と受け手の微妙な参加の調整の基で成り立っていることを示した。特に、セリフ発話の組み立てや、その位置、語り手が具体的状況を提示した中で受け手の参入が行われやすいことは、語り手の語る権利と受け手の立場に配慮した結果であることを指摘した。その際、発話末の「みたいな」という形式が、そうした配慮のための一つのリソースとして利用されていることを指摘した。更に、そうした微細な調整の中でなされているセリフ発話は、語り手の語りの「内容」に

対する強い理解を示すだけでなく、セリフ発話を通して受け手の語り手に対する強い同調を示している事がわかった。特に、セリフ発話によってなされる同調とは、語り手の語りの展開を支えること (alignment) と、語り手の「態度」に寄り添うこと (affiliation) が同時になされる合理的なやり方であった。

第5章では、そこまで述べたセリフ発話から始まるその後の連鎖について、具体的な場面とともに焦点をあてた。焦点をあてた場面は、(1) 語り手が驚くべき出来事を冗談として語る場面と、(2) 不満を語る場面である。分析を通して、第5章の後半で述べた受け手の同調が個々の場面の中でどのように達成されているのかが示された。特に、ある出来事を「面白いと感じること」や「不満に感じる」といった語り手が報告する出来事に対する態度が、セリフ発話によって受け手にも理解されていることが表示されることがわかった。更に、そうした受け手の発話を語り手が承認することにより、語り手と受け手が「同じ気持ちである」こと、つまり「共感している」ことが会話のやり取りを通して経験されていた。また、セリフ発話の構成に関わる重要な点も明らかになった。それは、冗談語りのデータにおいては、セリフ発話に「みたいな」が付加されやすいが、不満を述べる連鎖のデータでは、セリフ発話が単独で用いられる事例があることである。その理由について、本研究では、「不満を述べる」という行為と、「みたいな」を使わずにセリフ発話が単独で用いられることとの関連について述べた。

以上の観点から第1章であげた課題に対して、以下のような答えが得られた。

【課題1】物語を語る・受けるという活動において、受け手によるセリフ発話はどのような機能を果たしているのか。

セリフ発話による受け手の参入は、極めて的確に語り手の物語を理解していることを示す一つの方法になっていることがわかった。その時、受け手は語り手の発話だけではなく、身体的動作を含めた語り手が利用可能なその場の様々なリソースに敏感に反応することにより、適切な参入を実現していた。それは物語の構築における受け手の積極的な貢献であり、物語の構築が相互行為的に達成されていることを示す一つの証拠となっていた。そして、このことは、従来会話の中で常に受け身の存在として語られてきた聞き手観に対し、いかに会話の中で積極的に貢献を果たすものであることを経験的に示されたことを意味する。更にそれは、会話のやり取りが、参与者らの協力の元で成り立っていることを裏づけてきた会話分析における一連の研究における、一つの証拠としても位置づけられた。

【課題2】 セリフ発話に伴う「みたいな」という形式の相互行為上の機能はなにか。また、「みたいな」を伴わずに、セリフ発話単独で用いられるとき、その相互行為上の機能はなにか。

課題1で明らかになったそうした受け手の積極的な参入は、語り手と受け手双方の参加の組織化に関する絶妙なバランスの維持に志向し、協働的になされていることが示された。そうしたバランス関係の維持の際に、語り手・受け手双方が用いる発話末の「みたいな」という形式が、有効に利用されていることがわかった。そして、本研究では既になされている「みたいな」に関する言語学的な意味機能の記述が、実際の相互行為においてどのように機能しているのかを示すことができた。こうした観点からの記述は、これまでの言語学的な記述の意義や妥当性を相互行為の観点から再検討することにもなった。

更に、本研究では、「みたいな」を伴わないセリフ発話が単独で用いられている現象について、それらは単に形式が「脱落している」のではなく、あえて形式を伴わないことによって「独り言」として聞かれることを実現していることを指摘した。そして、そのことは、不満を述べるという活動の中で、受け手が語り手に対して「私自身が」同じ気持ちであることを示す一つの手段をなっていることが示された。

【課題3】 出来事を冗談として語る環境や、不満を語るといった特定の環境の中で、セリフ発話やそこから開始される連鎖が、相互行為上、特にどのような機能を果たしているのか。

課題1で明らかにした受け手によるセリフ発話が、特定の環境の中に置かれるとき、個々の文脈の中でどのような機能を果たしているのかを明らかにした。それぞれの環境の中で、受け手は、単に語り手の語りの内容に対する強い「理解」を示すだけでなく、語り手が報告する出来事に対する態度への強い「同調」も示すこととなっていた。

例えば、冗談の語りにおいては、受け手によりセリフ発話によって、その面白さが更に際立たされ、その場の参与者全員で更に笑い合うより大きな機会を提供することとなっていた。そのことは、受け手が、語られた出来事を同じように「面白い」と感じることを実演的に示す方法であり、また、語るに値する出来事を語り手が語ったという「語ること自体に対する価値」の引き上げにもなっていた。更に、そうした受け手の反応を語り手が受け止めることによって、語り手と受け手が互いに「同じ気持ち」であることを示し合い、

共感し合うことがやり取りを通して経験されていることが明らかになった。

このことによって、セリフ発話によってなされていることが「共感が示されている」とだけ指摘されてきたこれまでの研究に対し、具体的なデータに基づき、なぜそのように我々が感じるのかを記述的に示すことができた。

6.2. 会話分析研究への貢献と意義

本研究では、受け手のセリフ発話による語りへの参入が、物語を語るという行為における、受け手の積極的な貢献であることを述べた。その時、受け手は、語りを単に聞いてわかることを表示するだけの受け身の存在ではなく、受け手自身のことばで発話を組み立て、語りの権利に配慮しながら参入を実現する、より能動的な存在であった。特にセリフ発話で受け手が参入するためには、受け手は、これまで語られた物語の内容や、語りの流れといった全体的な見通しと、語り手の今・ここで行っている局所的な活動を結びつけることで、語り手が物語の中で示した描写の焦点を理解していなければならない。そうしてなされた受け手のセリフ発話は、その後、語り手が承認し、語りの展開に利用されていた。このことは、「物語を語る」という一見個人の活動に見える行為が、実は、語り手のみに関わるのではなく、その場の受け手との相互行為によって達成されているものであることを示している。こうした受け手の存在の重要性は、Goodwin (1980) から始まる一連の研究が、「受け手」の積極的な意味での存在が不可欠であるということを示してきたことの一つの証拠として位置づけられる。

また、特に冗談を語る連鎖の分析（第6章）から、物語を語るという全域的構造において、セリフ発話が物語の完了の一步手間、完全なる収束を可能にする環境を提供することにもなっていた。従って、これまであまり注目されてこなかった、語りの終盤、どのように語り終了に持ち込まれるかを記述した一つの研究としても位置づけられる。

6.3. 引用研究における貢献と意義

本研究では、従来の引用研究においては、直接引用と呼ばれてきた現象と重なる現象を「セリフ発話」と呼び、分析の対象とした。引用の枠組みから切り離して現象を記述することによって、次の点が明らかになった。

第一に、本研究は、会話の参加者自身がある発話を、その場の話者自身の声ではなく「セリフ」として扱っている現象を見ることにより、これまで引用研究の枠組みでは抽出する

ことのできなかつた現象を扱うことができた。そうした視点をとることにより、従来の引用研究において「非典型的」とされていた発話末の「みたいな」を伴う発話や、形式を伴わないセリフ発話単独で用いられる現象を扱うことができた。

例えば、セリフ発話が単独で用いられる現象や、「みたいな」という形式が相互行為上、どのような働きをしているのかを記述することを可能にした。特に会話の中に見られる発話末の「みたいな」という形式は、引用研究においても、その存在が指摘されたり、談話分析と中心とした研究の中で記述されてきていた。本研究では、そうした知見を踏まえながら、実際の会話のやり取りの中で「みたいな」という形式がどのように相互行為のリソースとして利用され、それがどのような相互行為上の課題に対処するために用いられているかを記述的に示した。それにより、単に相互行為の観点から現象を分析するだけではなく、これまでの言語学的な記述の意義や妥当性を相互行為の観点から再検討することができた。こうした記述の試みは、会話の中によく現れる引用をマークする他の形式（例えば発話末の「と」「って」など）を相互行為の観点からとらえ直すことができる可能性も示唆している。そしてこうした記述は、会話分析の一つの側面である「相互行為と文法」研究の一つの成果としても位置づけることができる。

第二に、本研究では、従来の文単位で現象を見るのでは抽出することのできなかつた、語りの「受け手」が示す発話に注目することができた。語りの内容を知らないはずの受け手の発話に注目することにより、受け手が必ずしも、過去に行われた（であろう）「元発話」を参照し、それを「再現」「模倣」しているわけではないことが明らかになった。それによって、従来の引用研究の定義では取り扱うことのできない現象を新たに捉え直すことができた。更に、従来の引用研究では、何かを「報告・再現」する際の報告者の発話に限られていた。実際に、このような引用研究における偏った場面や固定化した形式の捉え方について、山口（2009）では以下のように指摘されている。

話法は、しばしば報告・再現を行うために用いられる。だが、その事実のみをもとに話法の基本的機能が報告にある、とは言い切れない。引用がさまざまな目的で行われるのなら、その具現形式である話法も複数の機能を話しているはずである。にもかかわらず、話法はもっぱら報告のための形式であると疑われることなく信じられて来た。その結果、話法のデータはおもに報告・再現が行われるコンテキスト、つまり、小説や体験談などの語り（narrative）や新聞などの報告（report）のコンテキストにおい

て採集されることとなった。いや、逆に、語りや報告のコンテキストにデータを求めた結果、報告・再現を行う話法の例ばかりを取りあつかってきたのかもしれない。いずれにせよ、語りや報告以外のコンテキストにおける引用表現のふるまいを言語学は等閑視してきた。(山口 2009:5-6)

このような偏った場面の選定や、引用が「報告・再現」であるという認識があるために、語りの場面において引用を用いるのは「語り手」だけであると捉えられてきたように思う。これに加え、山口(2009)では引用研究においては、対話(dialogue)のやりとりにおける引用表現が、長らく顧みられることはなく、実際の会話のやり取りの中における引用表現についての研究が不足していることも述べられている。本研究において、実際の会話データを基に、物語の内容を知らないはずの「受け手」が行う「セリフ発話」を取り上げたことは、こうした課題にも応える研究として位置づけられる。

第三に、本研究で示した現象は、これまで引用研究の枠組みで指摘されたとしても、その分析において単に「共感を示す」と感覚的な記述に留まっているものであった。しかしながら、本研究では、会話分析の立場に立つことによって、その「共感」と呼ばれる現象が、実際の参加者の振る舞いを通じた観察可能な現象であることを経験的に示すことができた。特に、セリフ発話が始まる前に、既に語りに対する十分な反応が得られている事例においては、受け手のセリフ発話によって、物語の「面白さ」や「不満」が受け手の側から焦点化される。そして、より詳細な形で発話が構成されることにより、受け手が語り手の気持ちに寄り添うことが可視化される。そして、それを受け止める語り手とのやりとりを通して、参加者らが共にそうした感情を共有する機会を作り出すことになっていた。

6.4. 日本語教育における貢献と意義

本研究で扱った物語の受け手による「セリフ発話」という現象は、日本語教育に関わる研究領域に対しても示唆を与えることができる。

第一に、本研究で現象を連鎖で取り出し、そこでどのような行為が行われているのかを記述する姿勢は、次のような一見誤用として扱われるような現象の適切さの説明を可能にする。以下の断片の中に現れる「あんな」というあ系の指示詞は、通常、Bと共有知識を持たないAが使用することのできない形式である。そのため、Aの提示した「スープ」について、Bがあ系の「あんな」で指示することはできないはずである。しかし、発話を連鎖で見

ることにより、当該発話は誤用ではなく、むしろ参加者がより積極的な形で会話に参加することを示す一つのやり方であることが明らかになる。具体的に見てみる。

【Data1 帰る帰る】(第3章の断片(2)において提示)

05 B: ↑最↑初の年しか(.)メキシコにはいなくて:

06 B: >それ以外<(.)基本的に帰っ[¥てき¥て(h)た(h)の(h)で:(h)h]

07 A: [hhhhhhhh] .h

08 B: 帰る帰る[とか()haha とつとと日本に帰る]((声を低くセリフがかって))

09 A: [hahahahahahahahaha]haha

10→A: あ(.)¥あんなスープ飲んでもられない¥[(hahahahaha)

((顔は笑っている))

11 B: [haha(いやいやいや)haha

Aが「あんな」を用いることは、「こんな」や「そんな」を選択することではできない別の行為を行うことを可能にしている。Aが「スープ」を提示したのは、現在の語りよりも少し前のことである。そうした「既に語られた物語の中のスープ」について、Bはただ単に見聞きした「Aのスープ」ではなく、「あんな」を用いることによって、「共に出来事の中で衝撃を受けた」ために、Bの立場に立って発話を提示することができることを示すことを可能にする。それが「あんな」を用いることでBが行っていることである。つまり、Bは「あんなスープ」と指示することで、「少し前に共に経験した出来事の中のスープ」として「スープ」を位置づけ直し、次の展開に利用している。このことは、今・ここでの時間軸の中でAとBとのやり取りの過程なくしては決して成り立たないものである。

このように、一見「誤用」に見える指示詞の利用が、実は、物語の受け手が物語の内容とそれに対する態度への強い理解の表示のための重要なリソースとなっているのである。ここからわかるのは、発話を文単位で取り出し、その正誤を問うことの危うさである。発話はその場の相互行為を成り立たせる際の一つのリソースであり、ある発話は、そうした様々な環境の要請に応じた位置と構成で産出される。このことは、現象を一文単位で見るのではなく、「連鎖」の中で現象を観察し、参加者が実際にやっている「行為」を記述することによって初めて扱うことができる。従って、第二言語話者が産出する発話を扱う際にも同様に、単に発話だけを抽出し、その正誤を問うだけでは見えてこない現象があると思

われる。第二言語話者が、「なぜ今そこで」その発話を行ったのか、そして、もし不自然に聞かれたり、実際に不自然なものとして扱われているのだとしたら、それは何によるものなのかを、連鎖全体を考慮して検討する必要がある。

第二に、本研究で記述した「セリフ発話」という現象は、日本語教育において「言語能力」を測る際の超絶話者かどうかを判断する一つの基準になる。こうした意味でも本研究は日本語教育への貢献が期待できる。本研究で取り上げた現象は「発話」であるという意味では、「産出」に関わる能力のように見える。しかし、その一方で、実際に行っていることは「聞く」こと、つまり「理解」に関わる重要な能力でもある。つまり、既に見て来た通り、受け手が適切に「セリフ発話」で参入できることは、語り手の物語や語り手の態度を的確に理解し、その理解をいかに示すことができるかに関わっている。こうした点から考えるならば、相互行為の中で「聞くことができるようになる」ということは、少なくとも大まかには二つのセットから成っていると考えることができる。一つは、実際に「聞いて理解する」という認知レベルでの聞き手個人の内部で行われる（であろう）活動である。もう一つは、そうした理解のプロセスを経た上での適切な「振る舞い」のための言語化である。前者については、これまでの日本語教育においても積極的に研究され、また、実際に授業でもそうした能力を伸ばすための、様々な試みが行われているだろう。一方、後者に関しては、実際の授業において積極的に扱われているとは言い難い。しかし、適切な振る舞いを行うには、受け手は、語り手の発話の音声情報を受け取り、解釈するだけでなく、その場その場の語り手の振る舞いに敏感な形で、今、物語のどの段階なのか（例えば、物語のクライマックスにさしかかっているのか、不満を示しているのか）を見極めることができなければならない。それと同時に、今、語り手が何をしているのか（例えば、オチに関わるジェスチャーをやっているのか、まだ語りの途中なのか）を的確に把握する。そうしたことを一度に行いながら、かつ、適切に受け手が理解しているものとして、語り手に示すことができる発話の構成と位置で「セリフ発話」を産出する。このように、受け手は単に「聞いて理解する」だけではなく、かなり複雑なことを一度に行っている。

そのため、もし、不自然な位置や発話の構成で受け手が参入するならば、単に笑うことや、「そうなんだ」「なるほど」と納得を示すことよりも、理解が不十分であること露呈させてしまうリスクを伴った反応の仕方であるとも言える。従って、言語能力という観点から考えると、もし、セリフ発話で適切に参入できるならば、その参加者は、日本語に関してかなり高い言語能力を持っていると見なすことができるだろう。このことは、日本語を

使った相互行為場面において高い言語能力を持つことを示す一つの基準になるだろう。

このように、これまで言語能力といったとき、日本語教育においては、その解釈の過程をいかに滞りなく達成しうるかということに重点がおかれてきた。しかし、これからは、その解釈の後、どのように振る舞うことが（特に、発話の連鎖上のどの位置でどのように発話を産出することが）「実際に」理解されたものとして扱われるのか、そうした視点で教育をしていく必要がある。従って、本研究で行った、受け手の反応を相互行為という観点から観察し、分析する視点や、なされた記述は、言語教育において何を教育し、どのように能力を測るかという問題に対する一つの答えを提供することになるだろう。

参考文献

- Austin, J. L., 1962, *How to Do Things with Words*: Harvard University Press. (=1978, 坂本百大訳『言語と行為』大修館書店.)
- 遠藤裕子, 1982, 「日本語の話法」『言語』11(3): 86-94.
- Drew, P., 1998, "Complaints about Transgressions and Misconduct," P. Drew and J. Heritage eds., *Research on Language and Social Interactions*, 31(3/4): 295-325.
- Drew, P. and E. Holt, 1988, "Complainable Matters: The Use of Idiomatic Expressions in Making Complaints," *Social Problems*, 35(4): 398-417.
- Drew, P. and T. Walker, 2009, "Going too far: Complaining, escalating and disaffiliation," *Journal of Pragmatics*, 41: 2400-2414.
- Dersley, I. and Wootton, A., 2000, "Complaint sequence within antagonistic argument," *Research on Language and Social Interaction*, 33: 375-406.
- Fujii, S. 2006, "Quoted thought and speech using the *mitai-na* 'be-like' noun-modifying construction," Fujii, S. eds., *Emotive Communication in Japanese*, John Benjamins, 53-95
- 藤田保幸, 1988, 「引用」論の視界『日本語学』7(9), 30-45.
- 藤田保幸, 2000, 『国語引用構文の研究』和泉書院.
- Golato, A., 2012, "Impersonal quotation and hypothetical," Buchstaller, I. and Alphen I. van eds., *Quotatives: Cross-linguistic and cross-disciplinary perspectives*, Amsterdam ; Philadelphia : John Benjamins Pub. Co.
- Goodwin, C., 1980, "Restarts, pauses and the achievement of a state of mutual gaze at turn beginning," *Sociological Inquiry*, 50: 272-302.
- Goodwin, C., 1984, "Notes on story structure and the organization of participation," J. M. Atkinson & J. Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 225-246.
- Goodwin, M. H., 1990, *He-Said-She-Said: Talk as social organization among black children*, Bloomington, IN: Indiana U.P.
- Goodwin, C., and Goodwin, M. H., 1992, "Assessments and the Construction of Context", Duranti, A. and Goodwin, C. eds., *In Rethinking Context: Language as an Interactive Phenomenon*, Cambridge: Cambridge University Press, 147-189.
- Haakana, M., 2007, "Reported thought in complaint stories," E. Holt and Rebecca Clif, eds., *Reporting Talk*, Cambridge: Cambridge University Press, 47-80.

- Hayashi, M., 1997, "An Exploration of Sentence-Final Uses of the Quotative Particle in Japanese Spoken Discourse," Ho-min Sohn and John Haig eds., *Japanese/Korean Linguistics*, Volume 6, 565-581.
- Hayashi, M., 2003, *Joint Utterance Construction in Japanese Conversation*, Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Hayashi, M., 2005, "Joint turn construction through language and the body: Notes on embodiment in conjoined participation in situated activities," *Semiotica* 156(1/4), 21-53.
- Hayashi, M. and Mori, J., 1998, "Co-construction in Japanese revisited: We do finish each other's sentences," N. Akatsuka, H. Hoji, S. Iwasaki, and S. Strauss eds., *Japanese/Korean Linguistics*, 7, Stanford: CSLI, 77-93.
- Hayashi, M., Mori, J. and Takagi, T., 2002, "Contingent achievement of co-tellership in a Japanese conversation: An analysis of talk, gaze, and gesture," C. Ford, B. Fox, and S. Thompson eds., *The Language of Turn and Sequence*, Oxford: Oxford University Press, 81-122.
- Heritage J., 2012, "The epistemic engine: Sequence organization and territories of knowledge," *Research on language and Social Interaction* 45:30-52.
- 平本毅, 2011, 「他者を「わかる」やり方にかんする会話分析的研究」『社会学評論』62(2): 153-171.
- 廣瀬幸生, 1988, 「言語表現のレベルと話法」『日本語学』7(9): 4-13.
- Holt, E., 1996, "Reporting on Talk : The Use of Direct Reported Speech in Conversation," *Research on Language and Social Interaction*, 29(3): 219-245
- Holt, E., 1999, "Just gassing : An analysis of direct reported speech in a conversation between employees of a gas supply company," *Text*, 19(4): 505-537
- Holt, E., 2000, "Reporting and Reacting: Concurrent Responses to Reported Speech," *Research on Language and Social Interaction*, 33(4):425-454
- Holt, E., 2007, "I'm eyeing your chop up mind': reporting and enacting," E. Holt and Rebecca Clif eds., *Reporting Talk*, Cambridge: Cambridge University Press, 47-80.
- Inamori, A., 2011, "Examination of the quotative markers like, *mitaina* and their co-occurrence in Japanese / English code-switching," *Proceedings of the Nineteenth Annual Symposium About Language and Society – Austin, Texas Linguistics Forum* 54:173-193.

- 岩崎志真子, 2008, 「会話における発話単位の協調的構築—「引き込み」現象からみる発話単位の多面性と聞き手性再考—」串田秀也・定延利之・伝康晴編『「単位」としての文と発話』ひつじ書房, 169-220.
- Jefferson, G., 1978, "Sequential aspects of storytelling in conversation," J. Schenkein ed. *Studies in the organization of conversational interaction*. New York, NY: Academic Press. 219-248.
- 加藤陽子, 2005, 「話し言葉における発話末の「みたいな」について」『日本語教育』124: 43-52.
- 加藤陽子, 2010, 『話し言葉における引用表現—引用標識に注目して』くろしお出版.
- 鎌田修, 2000, 『日本語の引用』ひつじ書房.
- Kitzinger, C. and J. Mandelbaum, 2013, "Word Selection and Social Identities in Talk-in-Interaction." *Communication Monographs* 80: 176-198.
- 甲田直美, 2013, 「名詞修飾節による「語り」の終結「みたいな」「っていう」の表現性と談話機能」『言語の創発と身体性』ひつじ書房, 431-447.
- 久保進, 2001, 「言語行為」小泉保編『入門語用論研究—理論と応用編—』研究社, 81-100.
- 串田秀也, 2006a, 『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共—成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社.
- 串田秀也, 2006b, 「会話分析の方法と論理：談話データの「質的」分析における妥当性と信頼性」伝康晴・田中ゆかり編『講座社会言語科学6方法』ひつじ書房, 188-206.
- 串田秀也, 2009, 「聴き手による語りの進行促進：継続指示・継続催促・継続試行」『認知科学』16(1): 12-23.
- Labov, W., 1972, "The transformation of experience in narrative syntax," *Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania, 134-166.
- Labov W. and Waletzky, J., 1967, "Narrative analysis: Oral versions of personal experience," *In Essays on the verbal and visual arts*, J. Helm ed., Seattle: University of Washington Press, 12-44.
- Lerner, G. H., 1996, "On the "semi-permeable" character of grammatical units in conversation: Conditional entry into the turn space of another speaker," E. Ochs, Schegloff E. A., and Thompson S. A. eds. *Interaction and Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press, 238-276.
- Levinson, S., 1983, *Pragmatics*, Cambridge University Press (=1990, 安井稔・奥田夏子訳『英語語用論』研究社出版.)

- 前田直子, 2004, 「文末表現「みたいな。」の機能」『月刊言語』33(10): 55-57.
- Mathis, T. and G. Yule, 1994, "Zero Quotatives," *Discourse Processes*, 18(1): 63-76.
- Mayes, P., 1990, "Quotation in spoken English," *Studies in Language*, 14: 325-363.
- Maynard, D., 2003, *Bad News, Good News: Conversational Order in Everyday Talk and Clinical Settings*, University of Chicago Press. (=2004, 檜田美雄・岡田光弘訳『医療現場の会話分析—悪いニュースをどう伝えるか』勁草書房.)
- Maynard, S., 2005, "Another conversation: expressivity of *Mitaina* and inserted speech in Japanese discourse," *Journal of Pragmatics*, 37: 837-869.
- メイナード泉子, 2008, 『マルチジャンル談話論』くろしお出版.
- 森山卓郎, 1995, 「推量・比喩比況・例示—「よう／みたい」の多義性をめぐって—」『宮地裕・敦子先生古希記念集 日本語の研究』493-526.
- 中園篤典, 1994, 「引用文のダイクシス—発話行為論からの分析—」『言語研究』105: 87-109.
- 中園篤典, 2006, 『発話行為的引用論の試み』ひつじ書房.
- 西阪仰, 1995, 「連載〈会話をフィールドにした男〉サックスのアイディア」『言語』24(7-12)
- 西阪仰, 1997, 『相互行為分析という視点 認識と文化 (13)』金子書房.
- 西阪仰, 2008, 『分散する身体—エスノメソドロジー的相互行為分析の展開』勁草書房.
- 西阪仰・高木智世・川島理恵, 2008, 『女性医療の会話分析』文化書房博文社.
- 西阪仰・早野薫・須永将史・黒嶋智美・岩田夏穂, 2013, 『共感の技法 福島における足湯ボランティアの会話分析』勁草書房.
- 奥津敬一郎, 1970, 「引用構造と間接化転形」『言語研究』56: 1-26.
- 大津友美, 2005, 「親しい友人同士の雑談におけるナラティブ—創作ダイアログによるドラマ作りに注目して—」『社会言語科学』8(1): 194-204.
- Pomerantz, A., 1984, "Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred / Dispreferred Turn Shapes," J. M. Atkinson and J. Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 57-101.
- Pomerantz, A. and Heritage J., 2011, "Preference," In Sidnell, J. & Stivers, T. eds., *The Handbook of Conversation Analysis*, Wiley-Blackwell, 210-228.
- Sacks, H., 1974, "An analysis of the course of a joke's telling in conversation," J. Sherzer and R. Bauman eds., *Explorations in the Ethnography of Speaking*, Cambridge: Cambridge University Press, 337-353.

- Sacks, H., 1992, *Lecture on Conversation Volume 2*, Blackwell.
- Sacks, H., Schegloff, E. A. and Jefferson, G., 1974, "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation," *Language*, 50: 696-735.(=2010, 西阪仰訳「会話のための順番交替の組織—最も単純な体系的記述」ハーヴィー・サックス/エマニュエル・A・シエグロフ/ゲール・ジェファソン『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織』世界思想社, 5-153.)
- Schegloff, E. A., 1984, "On Some Questions and Ambiguities in Conversation," J. M. Atkinson and J. Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 28-52.
- Schegloff, E. A., 1996, "Confirming allusions: Toward an Empirical Account of Action," *American Journal of Sociology*, 104(1): 161-216.
- Schegloff, E. A., 1988a, "Description in the social science I: Talk-in-interaction," *IPrA Papers in Pragmatics*, 2(1/2), 1-24.
- Schegloff, E. A., 1988b, "Presequences and indirection: applying speech act theory to ordinary conversation," *Journal of Pragmatics*, 12: 55-62.
- Schegloff, E.A., 2000, "On Granularity," *Annual Review of Sociology*, 26(20): 715-720.
- Schegloff, E.A., 2005, "On Complainability," *Social Problems*, University of California Press, 52(4): 449-476.
- Schegloff, E. A., 2007, *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis 1*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. R., 1969, *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shannon, C.E. and Weaver, W., 1964, *The Mathematical Theory of Communication*. Urbana: The University of Illinois Press. (=1969, 長谷川淳・井上光洋訳『コミュニケーションの数学的理論：情報理論の基礎』東京:明治図書出版.)
- 嶋津百代, 2005, 「異言語話者のナラティブを研究する」西口光一編『文化と歴史の中の学習と学習者』凡人社, 234-255.
- Sperber, D. and Wilson, D., 1995, *Relevance : communication and cognition 2nd Edition*. Wiley-Blackwell. (=1999, 内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳『関連性理論—伝達と認知—[第2版]』研究社出版.)

- Stivers, T., 2008, "Stance, alignment and affiliation during story telling: When nodding is a token of preliminary affiliation," *Research on Language in Social Interaction*, 41: 29-55.
- Stivers, T., 2011, "Sequence Organization," In Sidnell, J. & Stivers, T. eds., *The Handbook of Conversation Analysis*, Wiley-Blackwell, 191-209.
- 須賀あゆみ, 2012, 「実演と笑いによる語り連鎖」吉村あきこ・須賀あゆみ・山本尚子編『ことばを見つめて』英宝社, 425-436.
- 砂川有里子, 1988, 「引用文における場の二重性について」『日本語学』7(9): 14-29.
- 砂川有里子, 1989, 「引用と話法」『講座日本語と日本語教育4』明治書院, 355-387.
- 砂川有里子, 2003, 「話法における主観表現」北原保雄編『朝倉日本語講座5 文法1』朝倉書店, 128-156.
- 杉浦まそみ子, 2007, 『引用表現の習得研究—記号論的アプローチと機能的統語論に基づいて』ひつじ書房.
- Suzuki, S., 1995, "A study of the sentence-final *mitai na*," *The journal of the association of teachers of Japanese*, 29(2): 55-78.
- Tannen, D., 1989, *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 谷泰編, 1997, 『コミュニケーションの自然誌』新曜社.
- やまだようこ, 2010, 『やまだようこ著作集第1巻 ことばの前のことば うたうコミュニケーション』新曜社.
- 山口治彦, 2009, 『明晰な引用, しなやかな引用』くろしお出版.
- 山田富秋, 1999, 「会話分析をはじめよう」好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社, 1-35.
- 山本真理, 2011, 「引用表現「～と言ってくる」の語用論的考察」『日本語教育』148: 99-113.
- Wooffitt, R., 1992, *Telling Tales of the Unexpected: The Organization of Factual Discourse*, Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf. (=1998, 大橋靖史・山田詩津夫訳『人は不思議な体験をどう語るか—体験記憶のサイエンス』大修館書店.)

謝辞

北海道大学大学院の博士前期課程に入学してから実に 10 年の年月が経過した。この 10 年の間に私が得たものは尊敬すべき素晴らしい人との出会いにつきると言っても過言ではない。本研究が博士論文として北海道大学に提出することができたのは、一重に私を支えてくださったそうした方々のおかげである。

まずはじめに、指導教員であり、本論文の主査を務めていただいた佐藤俊一先生に感謝したい。佐藤先生には、博士前期課程に入学した当初は副指導教員として私の成長を見守っていただいた。研究が何であるかやどのように進めるべきかわからない時から、手取り足取り丁寧にご指導くださり、常に優しく見守っていただいた。また、博士後期課程に入学し、指導教員となっていて以降は、私が公私にわたって抱える様々な問題に対し、父親同然の存在として支えていただいた。研究が思うように進まない時期にも「とにかく研究室に顔を出しに来なさい」と言ってくださったことが何より嬉しかった。にも関わらず、私が会話分析に興味を持ち始めた 2009 年以降、研究を進めるにあたって、私が自分が考えていることや気持ちをうまく伝えられないために足が遠のき、ご心配をおかけすることとなった。しかし、佐藤先生は、一度言い出したら聞かない頑固な私の性格を誰よりも理解してくださり、何事も時間のかかる私の回り道の過程を辛抱強く見守り、そして信頼し続けてくださっていた。佐藤先生の応援と、励ましがなければ、こうして博士論文を執筆することはできなかった。佐藤先生に主査・指導教員を引き受けていただき、そしてこの 10 年間大切にさせていただいたことを心から幸せに思う。

また、博士後期課程で副指導教員をしてくださり、本論文の副査をしてくださった柳町智治先生（北星学園大学）にも感謝したい。柳町先生は後に私が大変お世話になる関西会話分析研究会のメンバーとの最初の出会いの場を作ってくださいました。それは、今からちょうど 4 年前の 2010 年の冬に、私がデータを持って柳町先生の研究室を訪れたことに始まる。柳町先生は私の突然の訪問にも関わらず、熱心に相談にのってください、またそのデータを面白がってくださった。そして一言「関西の研究会に行ったらいいよ」とおっしゃってください、私を研究会に繋げ、関西の研究会に参加するために必要な様々な支援と後押しをしてくださった。今にして思えば当時の私はトランスクリプトの書き方もわからず、データセッションで実際のところ何をするのかさえよくわかっていなかったように思う。そんな私を研究会に送り込んでくださったところに、柳町先生のお人柄と懐の深さを感じ

る。その後も、学会発表、会話分析初級者セミナーへの参加、串田秀也先生（大阪教育大学）の授業への参加など、継続的に支援をしていただいた。また、研究プロジェクトにも加えていただき（国立国語研究所共同研究プロジェクト（領域指定型）「日本語を母語あるいは第二言語とす者による相互行為に関する総合的研究」（平成23～26年度、代表者：柳町智治））、そのおかげで、私は非常に恵まれた環境の中で研究を続けさせていただくことができた。

更に、博士前期課程の副指導教員であり、本論文の副査である山田義裕先生にも感謝したい。山田先生には、博士前期課程の頃から継続的に授業を開講していただき、コミュニケーションを新しい視点で捉える機会をつくっていただいた。私の興味の中心が言語学から相互行為研究へと移った際にも深く共感してくださり、くじけそうになる私の心の支えとなっていた。また、本論文の執筆過程において、計画性のない私の突然の訪問や内容の検討にも熱心に快く応じてくださった。

また、博士前期課程の指導教員で、本論文の副査をしていただいた小林ミナ先生（早稲田大学）にも感謝したい。私の研究者としての根本的な信念と、その後も続く日本語教育に対する関心は、先生から教えていただいた。先生の温かいお人柄にふれることや、厳しくも優しいご指導をいただいたおかげで、研究の面白さを知ることができた。加えて、先生には日本語教育の教材開発プロジェクトに参加する機会も与えていただいた。その経験は、私が実際のデータに目を向け、コミュニケーションの観点から現象を見たいと強く思う最初のきっかけとなった。

それから、関西会話分析研究会を通して出会った全ての方々に感謝したい。私が会話分析という魅力的な分野と出会ってから一貫してその興味と情熱が揺るがないのは、一重にそのメンバーの方との出会いによる。ここにお一人お一人お名前をあげることはできないが、特に串田秀也先生（大阪教育大学）、森本郁代先生（関西学院大学）には感謝申し上げたい。最初にデータセッションにうかがった際には、メンバーらがわずか数行のデータに数時間を費やして分析を行う姿勢に圧倒され、とんでもない世界に来てしまったと衝撃を受けたのを覚えている。そうしたみなさんの熱い分析のまなざしの一方で、夜の懇親会で掛けていただいた暖かい励ましのことばと、その心地よさに、札幌に戻る頃にはすっかり会話分析と会話分析に関わる方々の虜になってしまっていた。その時にみなさんに見ていただいたトランスクリプトと、その際に得た分析は、本研究の骨子となって活かされている。更に、その後度々関西に出向く中で林誠先生（イリノイ大学）にはデータ分析のため、

非常に多くの時間を割いていただいた。気軽な私のメールにも快く応えてくださり、また、いつも温かいことばで励ましてくださった。論文執筆過程においても、度々最新の研究の動向を教えてくださっていた。また、研究会を通して出会ったよき友人でもある張承姫さん（関西学院大学大学院生）には、公私にわたって私の研究活動を支えていただいた。彼女の存在がなければ、私はこうして博士論文を完成させることはできなかった。

そして、伝康晴先生（千葉大学）には私を会話分析の専門の人間として、研究プロジェクトへの参加の機会を与えていただいた（国立国語研究所共同研究プロジェクト（独創・発展型）「多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化」（平成23～26年度、代表者：伝康晴））。プロジェクト内で発表の機会をいただいたり、データ分析をする機会を得ることにより、博士論文執筆が大きく促進された。更に、そのプロジェクトメンバーのお一人である鈴木亮子先生（慶應大学）には「話ことばのワークショップ」において、本研究の中心となる分析の発表の機会をいただき、多くのコメントをいただくことができた。

また、岡田みさを先生（北星学園大学）には、北海道での研究会において多くのアドバイスをいただくと共に、私の公私にわたる悩み事にいつも向き合ってください、心の支えとなっていた。心から感謝申し上げたい。

本研究の内容は、既に学会誌に投稿・掲載されたものが中心となっている（山本真理（2013）「物語の受け手によるセリフ発話—物語の相互行為的達成—」、『社会言語科学』、第16巻第1号、139-159）。およそ1年に渡る査読過程において、査読者の方々からコメントをいただき、多くを学ばせていただいた。感謝申し上げたい。そして、何よりも快くデータ収録に協力してくださったみなさまと、データ提供をしてくださった岡崎渉氏（広島大学大学院生）に感謝したい。

最後に、博士論文執筆期間中、私の心身の健康を支え続けてくれたよき友人ら、そして家族に感謝したい。彼らと共に過ごす楽しい時間がなければ私は今こうして笑顔でいられることはなかったと思う。特に、長きに渡る私の研究生活に対し、疑問も持たずに応援してくれた両親、妹に感謝したい。彼らがどんな時も変わらない姿勢で私を支え続けてくれたことにより、私は研究に専念することができた。本研究の中心的なトピックである人々が「互いに分かり合う」ということに対する疑問や、それが人々の振る舞いの過程に見いだされるという視点は、家族と過ごす中でわき上がって来たものであった。そして、そんな私の素朴なコミュニケーションへの問いを聞いた友人の一人が、会話分析という魅力的な分野に導いてくれた。このように私は人との繋がりによってこの研究と出会い、多くの

人に支えられ、そして今こうして論文を完成できた。こうした素晴らしい人々との出会いに恵まれたことを、心から幸せだと感じている。